

## 解題

錦天山房詩話

二冊 後下冊

友野

瑛著

解題は前卷に見えたり。

錦天山房詩話下冊目次

安藤煥圖 卷四十一	一	墨昭猷	三	宇庭	五	原偉文 卷六十五	八九
山縣孝孺	五	鳴鳳卿	三	澤村維顯 卷五十二	五	尾芝質	八九
平玄中	七	菅正朝	三	三浦晉	五	平義綱	八九
太宰純	九	瀧正愷	三	高辨	五	小西續	九〇
越智正珪	三	宇惠	三	鳥山輔寬 卷五十三	三	白木彰	九〇
服元喬 卷四十二	三	和知隸卿 卷四十八	四	益田助 卷五十四	三	膝義鄰	九一
服元雄 卷四十三	九	山根清	四	江兼通	三	山田君豹 卷六十六	九二
高維馨 卷四十四	二〇	山根道晉	四	東龜年 卷五十五	三	宮重信義	九三
谷友信	二二	白石榮	四	丘融	三	岡長祐	九四
鷗孟一 卷四十五	二四	平賀義憲	四	野本公臺	三	小瀬良正	九四
石正猗	二五	守屋煥明	四	五味國鼎 卷五十六	三	石川正恆 卷六十七	九五
鷹見正長 卷四十六	二七	湯淺元禎 卷四十九	四	安脩 卷五十七	三	上柳美啓	九五
岡井孝先	二八	富逸 卷五十	四	川治義豹 卷五十八	三	小栗元愷 卷六十八	九六
千葉玄之	二九	田良暢	五	繩維直	三	福世謙	九六
平義質 卷四十七	三〇	餘承裕	五	陰山雍 卷五十九	三	香山彰	九六
板倉九	三一	宇鼎 卷五十一	五	秋山儀 卷六十	三	伊藤縉 卷六十九	一〇三
				葦鷺 卷六十一	三	江村綬	一〇三
				池邊匡卿 卷六十二	三	清絢	一〇六

錦天山房詩話下冊目次

一

平長孺 卷七十	一〇八	西山正 卷八十二	一〇三	清原雄風	一〇七	尼元總	一〇九
龍公美 卷七十四	一〇九	賴惟柔 卷八十四	一〇四	文之	一〇五	尼正慶	一一〇
葛張 卷十七	一一一	賴襄 卷八十五	一〇四	寂本 卷一百一	一〇四		
孔文雄	一一三	櫻田命真 卷八十六	一〇四	道成	一〇五		
元維寧 卷七十八	一一三	鈴木恭	一〇九	法霖	一一〇		
南宮岳	一一四	市河世寧 卷八十七	一〇五	日政 卷一百二	一一一		
紀徳民	一一六	菅晉帥 卷八十八	一〇五	日可	一一七		
伊藤一元 卷七十九	一一二	山村良由 卷九十	一〇七	釋元皓 卷一百三	一一九		
赤松鴻	一一三	石作貞	一一九	原資	一二〇		
井通照	一二四	佐佐木俊信	一二〇	義寛 卷一百四	一二三		
皆川恩	一二五	脇長之 卷九十一	一二二	大龍 卷一百五	一二三		
宮崎奇	一二六	松山造 卷九十三	一二二	顯常 卷一百六	一二四		
中井積善	一二七	岡部正懸 卷九十四	一二三	釋慈周 卷一百七	一二六		
篠崎應道	一二九	淺野長泰	一二四	志岸 卷一百九	一二六		
片山猷	一二九	香川弘	一二七	敬雄	一二九		
柴邦彦 卷八十	一二三	荒木田興正 卷九十八	一二六	元明	一二九		
尾藤孝肇 卷八十一	一二四	北條讓 卷一百	一二六	井上氏 卷一百十	一二九		
古賀樸	一二六	伊藤幸猛	一二九	多田氏	一二九		

# 錦天山房詩話 下冊

江都 友野瑛子玉輯

安藤煥圖卷四十一

字東壁、號東野、稱仁右衛門、下野人、本姓瀧田氏、幼孤、乃來江戶、養於安藤氏、因冒其姓、初學於中野搗謙、後更師物徂徠、憤激自奮、才氣大發、以儒仕、柳澤侯、年二十九罷官、侯猶優待、輸粟云、東壁俊傑不群、加之刻苦、淬勵出於天性、其鴻文鉅藻、既魁藝苑、惜哉、卒以劬悴、致咯血疾、歿、年僅三十七、世不問、交不交者、莫不惜之、葬於淺草茅原福壽院、同社合貲、立碑石。

錦天山房詩話下冊

安藤煥圖卷四十一

字は東壁、東野と號す。仁右衛門と稱す。下野の人、本姓は瀧田氏、幼にして孤なり、乃、江戸に來り、安藤氏に養はる、因て其姓を冒す。初め中野搗謙に學ぶ、後、更に物徂徠を師とし、憤激自ら奮ひ才氣大に發す、儒を以て柳澤侯に仕ふ、年二十九官を罷む、侯猶優待して粟を輸すと云ふ、東壁、俊傑不群之れに加ふるに、刻苦淬勵天性に出づ、其鴻文鉅藻、既に藝苑に魁たり、惜いかな、卒に劬悴を以て咯血を致し、病んで歿す、年僅に三十七、世、交ると交はらざる者とを問はず、之れを惜まざるは莫し、淺草茅原福壽院に葬る、同社貲を合せて碑石を立つ。

秋元以正子師曰、東野實永中、以儒仕甲侯、更奉牛耳我物夫子、大誦古文、業益進、天才研尋、遂足與兩司馬相抗衡、雖今諸公、無不以東壁爲稱首也、傍通華音律、又工字、都下從游、或有瞻仰其技者、多多從養其才、是其緒餘也。

山縣孝瑞次公曰、自東野之未死也、聲名籍甚、當世知名之士、無能與之抗衡、業已掛冠、築室于白山之陰、居焉、環堵蕭然、足支風雨、鉛槧之餘、一托絲竹、有高人之致、操觚構思、百物靡不從者、譬如東野稷、以御也、進退周旋、無不可者、使之鉤百而反、而力不屈、是敏者能事、唯弁州有之哉、雖來者銳也、東野不可及也已矣、泛假使其

秋元以正子師曰、東野實永中、儒を以て甲侯に仕へ、更に牛耳を我物夫子に奉ず、大に古文を誦し、業益進む、天才研尋、遂に兩司馬と相抗衡するに足る、今の諸公と雖、東壁を以て稱首と爲さざるはなし、傍華の音律に通じ、又、字を工みにし、都下從游、或は其技を瞻仰する者ある多々、從て其才を養ふ、是其緒餘なり。

山縣孝瑞次公曰、東野の未だ死せざりしより、聲名籍甚、當世知名の士、能く之れと抗衡する無し、業已に掛冠し、室を白山の陰に築きて居る、環堵蕭然、風雨を支ふるに足るのみ、鉛槧の餘、一に絲竹に托し、高人の致あり、操觚構思、百物從はざる者なし、譬へば東野稷御を以てするや、進退周旋可ならざる者なきがごとし、之れをして鉤百して反らしむ、而して力屈せず、是れ敏者の能事、唯弁州之れあるかな、來者銳なりと雖、東野には及ぶべからざるのみ、泛假して其れをして屬厭せしむれば、之れと與に京なるなし、惜いかな。

屬厭莫之與京惜夫。

宇鼎士新曰、夫元美世所推、誰不嗜者、而庶幾者鮮矣、獨吾物翁新意縱橫、是大海紫瀾哉、滕東壁、長語、或有庶幾焉。

江村綬君錫曰、東壁詩在護園諸子中、雖華藻不競、而渾朴可稱。

釋然常大典曰、護園徒善文章者、獨滕東壁、角田簡大可曰、安藤東野善病、時時嘔血、自謂予終當從李賀之後、繼天上白玉樓記也、及病篤、謂物徂徠曰、歲在大淵、獻吾歸、東壁之期至也、肝心既嘔盡矣、辭氣忼慨、飲食若平生。

錦天山房詩話、東野才既高、學亦勤、於護社諸子中、固自卓然、故其死也、徂徠悼惜

宇鼎士新曰、夫元美は世の推す所、誰れか嗜はざる者ぞ、而して庶幾き者鮮し、獨吾が物翁、新意縱橫、是れ大海の紫瀾なるかな、滕東壁長語、或は庶幾きあらん。

江村綬君錫曰、東壁の詩、護園諸子の中に在りて、華藻競はずと雖、而して渾朴、稱すべし。

釋然常大典曰、護園の徒、文章を善くする者、獨滕東壁なり。

角田簡大可曰、安藤東野善く病み、時々血を嘔く、自ら謂ふ、予終に當に李賀の後に從ひ、天上白玉樓の記を繼ぐべしと、病篤きに及び、物徂徠に謂つて曰、歲、大淵獻に在り、吾れ東壁に歸るの期至ると、肝心既に嘔き盡す、辭氣忼慨、飲食は平生の若し。

錦天山房詩話、東野、才既に高く、學亦勤む、護社諸子の中に於て、固より自ら卓然たり、故に其死するや、徂徠悼惜最甚し、富春山人に與ふる書に曰、獅愁む、東壁、

最甚、與富春山人書曰、獨悲東壁、以四月十三日死、渠三世以大淵獻降也、亦終以之陟焉、記十年前、渠齡同長吉、而殆將嘔、出心肝以死、而不死、今遂嘔、出心肝以死、豈白玉樓記必待其人邪、天圖書之府、不可以久虛邪、悲哉、又與下館侯書曰、以渠之才之學、而假之以年、豈不佞之所能及哉、天貧之、窶之、又奪之年、加以無後、何其毒也、不佞亦免稅予之嘆乎、服南郭與平金華書曰、嗚呼蒼天不怒、遺俊士、文章憎命達、天地一大厄哉、嗚呼東野、吾與足下不如也、此皆師友之語、悽惋固宜然也、嘗閱梁蛻巖集、有謂物徂徠老矣、弩末不能入綫、天又奪滕煥圖、如失左右手、可見其

四月十二日を以て死す、渠れ三世、大淵獻を以て降る、亦た終に之れを以て陟る、記す十年前、渠れ齡、長吉に同じく、而して殆んど將に心肝を嘔出し、以て死せんとす、而して死せず、今遂に心肝を嘔出し、以て死す、豈んど白玉樓の記、必其の人を待つか、天圖書の府、以て久しく虚しくすべからざるか、悲いかなと、又、下館侯に與ふる書に曰、渠の才と學とを以て、而して之れに假すに年を以てせば、豈、不佞の能く及ぶ所ならんや、天、之れを貧し之れを窶す、又之れが年を奪ふ、加ふるに後なきを以てす、何ぞ其れ毒するや、不佞亦稅予の嘆を免れんやと、服南郭の、平金華に與ふる書に曰、嗚呼蒼天、怒に俊士を遺さず、文章、命達を憎む、天地の一大厄なるかな、嗚呼、東野、吾れと足下と如かざるなりと、此れ皆師友の語、悽惋固より然るべきなり、嘗て梁蛻巖集を閲するに謂へるあり、物徂徠老いぬ、弩末綫に入る能はず、天又、滕煥圖を奪ふ、左右の手を失ふが如しと、其、英特なる、時人に推さるを見るべし。

英特爲時人所推也。

山縣孝孺

字次公、號周南、稱少助、周防人、父長白、字子成、官長門、職居師儒、欲周南不墜家聲、攜至江戶、托徂徠受業、時年甫十九、英特負才氣、已學於家庭、通大義、及見徂徠、孜孜匪懈、學日益進、是時徂徠業未大振、而周南東野早登其門、迭爲羽翼、是以徂徠待二子、異群弟子、正德辛卯、朝鮮信使、途歷長州、館赤間關、奉君命、往接待之、筆談唱酬、信使驚其雋才、兩伯陽嘗稱爲海西無雙。

太宰純德夫曰、古人絕句、有人耳能令人成誦者、如宋延清邨山、賀季真回鄉偶書

鐘天、山房詩話下冊

山縣孝孺

字は次公、周南と號す、少助と稱す、周防の人、父、長白、字は子成、長門に官す、職、師儒に居る、周南の家聲を墜さざらんことを欲して、攜へて江戶に至り、徂徠に托して業を受けしむ、時に年甫めて十九、英特にして才氣を負ふ、已に家庭に學び、大義に通ず、徂徠を見るに及び、孜孜として懈らず、學日に益進む、是の時、徂徠業未だ大に振はず、而して周南、東野、早く其門に登り、迭に羽翼を爲せり、是を以て徂徠、二子を待つこと群弟子に異れり、正德辛卯朝鮮の信使、途、長州を歴、赤間關に館す、君命を奉じ、往いて之れを接待し、筆談唱酬す、信使其の雋才に驚く、兩伯陽嘗て稱して海西無雙と爲す。

太宰純德夫曰、古人の絶句、耳に入り能く人をして誦を成さしむる者あり、宋延清の邨山、賀季真の郷に回りにて偶書すの如き是れなり、物先生、君彝が函嶺に遊



是也。物先生送君彝遊函嶺曰：昨日晁郎採藥還，井郎今日又遊山。山中芝草知長短，玉筍流雲可重攀。近日縣次公送子知之參州云云，亦皆易成誦也。

江村毅君錫曰：次公父良齋爲長藩文學，次公嗣其職。長門泮宮曰明倫館。次公司其館事。至今長門多才學之士云。余謂近時文士得行志，莫若次公。

原善公道曰：周南少南郭四歲，文章雖不及，亦自足不朽。然飲然不自足，病中尙寄書南郭曰：今疾踰年不已，岌岌乎傾者必覆，幾不起矣。余於文辭無所喻，老兄所熟知也。諸友門人欲梓而傳，拒而不允。數請數拒，於今數年所矣。余死後，彼必行其意。

ぶを送るに曰：昨日晁郎藥を採りて還る。井郎今日又山に遊ぶ。山中の芝草知んぬ長短ぞ、玉筍流雲重ねて攀つ可しと。近日、縣次公の子和が參州に之くを送る云云、亦皆誦を成し易きなり。

江村毅君錫曰：次公の父良齋、長藩の文學たり。次公、其職を嗣ぐ。長門の泮宮を明倫館と曰ふ。次公其館事を司どる。今に至るまで長門に才學の士多しと云ふ。余謂ふ、近時の文士志を行ふことを得るは、次公に若くは莫しと。

原善公道曰：周南は南郭より少きこと四歲、文章は及ばずと雖、亦自ら不朽に足る。然るに飲然として自ら足らずとす。病中に書を南郭に寄せて曰：今、疾、年を踰えて已まず、岌々乎たり、傾く者は必覆る。幾んど起たざらん。余、文辭に於て喻る所なし、老兄の熟知する所なり。諸友門人梓して傳へんと欲す、拒んで允さず。數請ふて數拒む。今に於て數年所、余、死後、彼必、其意を行はん。其意を行ふには、必、諸を老兄に圖らん。請ふ足下を勞せん。我が爲に蕪を刈り莠を除き、

行其意、必圖諸老兄、請勞足下、爲我刈蕪、除蕪、略存繩墨、莫貽同社之誦、幸甚。

平玄中

字子和、號金華、稱源右衛門、本姓平野、修爲平氏、陸奧人、器宇偉然、才鋒出群、學物徂徠、閑修辭、其始謁也、以文爲贄、時有一醫官、以黃金爲贄、徂徠熟視其文、乃延之上座、顧謂醫曰、欲入吾門作文、如此而可、奚以黃金爲、性曠達、侮弄一世、仕守山侯、家素貧窶、侯家嘗布令曰、佳節見君者、宜用新衣、勿服垢衣、子和著其妻衣而朝、吏讓之、子和從容曰、薄祿小臣、家貧不能給新衣、而令不可犯、幸荆婦有一衣稍新、故至於此、侯聞之、卽日加賜祿數石、狂縱不

南天山房詩話下冊

平玄中

字は子和、金華と號す、源右衛門と稱す、本姓は平野、修して平氏と爲す、陸奥の人、器宇偉然、才鋒群に出づ、物徂徠に學び、修辭を閑ふ、其始めて謁するや、文を以て贄と爲す、時に一醫官あり、黄金を以て贄と爲す、徂徠熟、其文を視、乃之れを上座に延き、顧みて置に謂つて曰、吾が門に入りて文を作らんと欲せば、此の如くして可なり、奚ぞ黄金を以てせんと、性曠達、一世を侮弄し、守山侯に仕ふ、家素と貧窶、侯家嘗て布令して曰、佳節君に見ゆる者は、宜しく新衣を用ふべし、垢衣を服すること勿れと、子和、其妻の衣を著けて朝す、吏之れを讓む、子和從容として曰、薄祿の小臣、家貧にして新衣を給する能はず、而して令犯すべからず、幸に荆婦、一衣の稍新なる有り、故に此に至ると、侯之れを聞き、卽日、祿數石を加賜す、狂縱、檢せず、屢、妓樓に遊ぶ、或ひと徂徠に謂つて曰、何ぞ誦讓せざるやと、徂徠曰、渠昂々たる千里駒なり、數、之

檢屢遊妓樓、或謂徂徠曰、何不請讓也、徂徠曰、渠昂昂千里駒、數調之、恐風逸矣、嘗與服南郭、登東山、歎曰、寥寥乎無聞哉、使我頓生自愛之心、其大言自稱、率此類也、所著金華稿、刪行于世。

江村毅君錫曰、金華嘗有詩、贈服子遷曰、白髮如絲混弟兄、中原二子奈虛名、子和之不自量、誠亡論耳、世人亦多與子遷竝稱、可謂子和之幸、子和詩有「太佳者、有太不佳者、太佳者體格雄華、金石鏗鏘、太不佳者淺陋支離、剽竊陳腐、如出二手、亦唯負才不能精思耳。」

原善公道曰、金華有一妾一僕、妾名月小夜、僕名染之助、又甚愛猫、所蓄蓄息、至十

れを調せば、恐くば風逸せんと、嘗て服南郭と東山に登り、歎じて曰、寥寥乎として聞ゆるなきかな、我をして頓に自愛の心を生ぜしむと、其大言自ら稱すること、率ね此類なり、著す所金華稿、刪世に行はる。

八

江村毅君錫曰、金華嘗て詩あり、服子遷に贈りて曰、「白髮絲の如く弟兄を混す、中原の二子虚名を奈んせん」と、子和の自ら量らざる誠に論なきのみ、世人亦多く子遷と竝べ稱す、子和の幸と謂ふべし、子和の詩、太だ佳ならざる者あり、太だ佳なる者は體格雄華、金石鏗鏘たり、太だ佳ならざる者は、淺陋支離、剽竊陳腐、二手に出づるが如し、亦唯、才を負ふて精思する能はざるのみ。

原善公道曰、金華、一妾一僕あり、妾の名は月小夜、僕の名は染之助、又甚、猫を愛す、蓄ふ所蓄息し、十八

八頭、性好酒、痛飲、徂徠送其之三河、序曰、  
 子和飲酒傲睨、深慕伯倫青蓮之爲人、紫  
 芝園漫筆曰、何充善飲、劉惔常云、見何次  
 道飲酒、使人欲傾家釀、予於平子和亦云、  
 南郭記墓曰、飲酒怏慨、時或激烈、至泣下、

### 太宰純

字德夫、號春臺、稱彌右衛門、信濃人、本姓  
 平手氏、年十五、來江都、仕出石侯源忠德、  
 非其好也、疏乞骸骨者三、不許、乃去、侯以  
 其輒去、錮之、西遊京攝十年、始得解、還江  
 都、生實侯源重令辟爲記室、未幾、謝病而  
 去、時年三十六、從是絕意進取、初從中野  
 僞謙爲性理學、既而聞物徂徠唱復古學、  
 而悅之、卽棄其學、而師事之、遂以治經、名

頭に至る、性、酒を好みて、痛飲す、徂徠其三河に之く  
 を送る序に曰、子和酒を飲み、傲睨し、深く伯倫青蓮  
 の人と爲りを慕へど、紫芝園漫筆に曰、何充善く飲む、  
 劉惔、常に云ふ、何次道の酒を飲むを見れば、人をして  
 家釀を傾けんと欲せしむと、予平子和に於ても亦云  
 ふ、南郭、墓に記して曰、酒を飲み怏慨し、時に或は激  
 烈して泣下るに至ると。

### 太宰純

字は德夫、春臺と號す、彌右衛門と稱す、信濃の人、本  
 姓は平手氏、年十五、江都に來り、出石侯源忠德に仕  
 ふ、其好に非ざるなり、疏して骸骨を乞ふ者、三たび、  
 許されず、乃去る、侯其輒ち去るを以て之れを錮す、西  
 京攝に遊ぶこと十年、始めて解くことを得て江都に  
 還る、生實侯源重辟して記室と爲らしむ、未だ幾くな  
 らずして病を謝して去る、時に年三十六、是より意  
 を進取に絶つ、初め中野僞謙に従ひ、性理學を爲す、既  
 にして物徂徠、復古學を唱ふるを聞きて、之れを悦び、  
 卽、其學を棄て、之れに師事し、遂に經を治むるを以  
 て、名、一時に冠たり、人と爲り、殿祿端方、動止荷もせ

冠一時爲人嚴毅端方、動止不苟、而折人過、毫不假借、雖王侯貴人、不合其意、則不敢見、東叡法王、嘗聞其善吹笛、遣使召之、辭曰、余儒生也、豈敢爲王門伶人乎、自後不復吹笛、侍中八田侯正通、欲以其所著經濟錄進呈、使人乞之、辭以藁本作字不愼、且衰邁不能繕寫、而私謂其人曰、托中官以達言、君子所不爲也、其守正不撓、皆此類也、博學強記、旁通天文、律曆、算、數字、學、音韻、書法、醫方、佛經、洞究精微、最留意經濟、諳悉天朝文獻、江都沿革、以及秦漢以來制度、歷歷如指諸掌、其教人、先之以孝經論語、次以六經、其論學、大要以勉、驅爲主教、以恭敬勤敏、慎而寡言、博聞彊識、

一〇  
す、人の過を面折し、毫も假借せず、王侯貴人と雖、其意に合はざれば、則敢て見ず、東叡法王、嘗て其善く笛を吹くを聞き、使を遣はして之れを召す、辭して曰、余は儒生なり、豈敢て王門の伶人たらんやと、自後復た笛を吹かず、侍中八田侯正通、其著す所の經濟錄を以て進呈せんと欲し、人をして之れを乞はしむ、辭するに藁本作るに愼まず、且、衰邁にして繕寫する能はざるを以てす、而して私に其人に謂て曰、中官に托して以て言を達するは、君子の爲さざる所なりと、其正を守りて撓まざる、皆此の類なり、博學強記、旁ら天文、律曆、算、數字、學、音韻、書法、醫方、佛經に通じ、精微を洞究し、最、意を經濟に留め、天朝の文獻、江都の沿革を諳悉し、以て秦漢以來の制度に及ぶまで、歴々として諸を掌に指すが如し、其人を教ふる、之に、先んずるに孝經論語を以てし、次に六經を以てす、其學を論ずる、大要、勉、驅を以て主と爲す、教ふるに恭敬勤敏、慎んで言寡く、博聞彊識、務めて有用の才を成すを以てす、一代の學者皆敬懼せり、延享四年五月晦卒す、年六十八、著す所、紫芝園漫筆、詩傳齊言、易道撥亂、周易反正、易占要略、春秋曆六經略說、律呂通考、產語、

務成有用之才、一代學者、皆敬憚焉、延享四年五月晦卒、年六十八、所著有紫芝園漫筆、詩膏、育易道撥亂、周易反正、易占要略、春秋曆、六經略說、律呂通考、產語、獨語、斥非辨道書、聖學問答、親族正名、倭讀要領、倭楷正訛、三王外紀、亂婚傳、和漢帝王年表、新撰唐詩、六體集、家語增注、論語古訓、外傳詩書古傳、古文孝經音注、紫芝園前後稿等、凡數十種。

江村君錫曰、春臺初同東壁、從學中野、搗謙、後東壁從遊、徂徠、數書招德夫、遂歸于物門、唯斯褊心、往往爲人訶斥、而以余論之、則春臺雖褊窄、自信甚確、是以議論透徹、多痛快語、自有過人者、其人以名教

獨語、斥非辨道書、聖學問答、親族正名、倭讀要領、倭楷正訛、三王外紀、亂婚傳、和漢帝王年表、新撰唐詩、六體集、家語增注、論語古訓、外傳詩書古傳、古文孝經音注、紫芝園前後稿等、凡數十種あり。

江村君錫曰、春臺初め東壁と同じく中野搗謙に從學す、後、東壁、徂徠に從遊す、數書もて德夫を招く、遂に物門に歸す、唯、斯褊心、往々人に訶斥せらる、而して余を以て之れを論すれば、則春臺褊窄と雖、自信甚確し、是を以て議論透徹して、痛快の語多く、自ら人に過ぎたる者あり、其人、名教を以て自ら任ず、而して詩も亦觀るべし、嘗て文論詩論を著す、余初め之

自任、而詩亦可觀、嘗著文論詩論、余初讀之、殊歎其持論平正、後讀春臺文集、與二論、抵牾者有之、所謂當局者惑歟、不然則初年作耳、纂輯其集者、不刪何哉。

錦天山房詩話、春臺操行學術、卓絕時輩、其論詩文、似亦解作者之旨者矣、及其自運、則惟魯麤笨、殊乏興象、宜乎詩有別才也。

## 越智正珪

字君瑞、號雲夢、又號神門叟、曲直瀬氏、稱養安院、江戸人、曾祖正琳、京師人、業醫、仕豐太閤、絅法印、後奉仕東照大君、爾後襲爲大府侍醫、君瑞受學於物徂徠、與服南郭、平金華、交驩、好古愛士、質實謹厚、未嘗

れを讀み、殊に其持論平正を歎す、後春臺文集を讀むに、二論と抵牾する者之れ有り、謂はゆる局に當る者は、惑ふか、然らずんば則初年の作のみ、其集を纂輯する者、刪らざるは何ぞや。

錦天山房詩話、春臺操行學術、時輩に卓絶す、其詩文を論ずる、亦作者の旨を解する者に似たり、其自運に及んでは、則惟魯麤笨、殊に興象に乏し、宜なるかな詩に別才あるや。

## 越智正珪

字は君瑞、雲夢と號す、又、神門叟と號す、曲直瀬氏、養安院と稱す、江戸の人、曾祖正琳、京師の人、醫を業とし、豐太閤に仕え、法印に絅し、後、東照大君に奉仕す、爾後襲いで大府の侍醫と爲る、君瑞、學を物徂徠に受け、服南郭、平金華と交驩す、古を好み士を愛し、質實謹厚、未だ嘗て疾言遽色せず、其奴婢常に謂ふ、吾が主公見ざる者三、愠顔を見ず、話詰を見ず、鄙吝を見ずと。

疾言遽色、其奴婢常謂、吾主公不見者三、不見慍顔、不見詰語、不見鄙吝、延享三年卒、歲六十一、著有懷仙樓文集、神門餘筆。

服元喬卷四十二

字子遷、本姓服部、修爲服氏、號南郭、又號芙蓉館、稱小右衛門、平安人、年十四、來江戶、十六起仕柳澤侯、三十四而致仕、乃下帷授徒、其學得之徂徠、而才氣俊拔、遂以詩文、出斗一世、爲人風流溫藉、藝苑之士、莫不雅慕者、嘗講莊子、聽者甚多、門外如市、年既老、同社宿老、凋謝殆盡、巋然獨存、以是名望益重、寶曆乙卯卒、所著南郭集四十卷、行於世、高子式嘗問曰、先生詩以誰爲準的、曰、余非必有所誦法焉、初年唯

延享三年卒、歲六十一、著に懷仙樓文集、神門餘筆あり。

服元喬卷四十二

字は子遷、本姓は服部、修して服氏と爲す、南郭と號す、又芙蓉館と號す、小右衛門と稱す、平安の人、年十四、江戸に來り、十六起ちて柳澤侯に仕ふ、三十四にして致仕す、乃、帷を下して徒に授く、其學之を徂徠に得たり、而して才氣俊拔、遂に詩文を以て、一世に山斗たり、人と爲り風流溫藉、藝苑の士、雅慕せざる者なし、嘗て莊子を講ず、聽者甚多し、門外、市の如し、年既に老ひ、同社宿老、凋謝殆んど盡き、巋然獨存す、是を以て名望益重し、寶曆乙卯卒す、著す所南郭集四十卷、世に行はる、高子式嘗て問ふて曰、先生、詩は誰を以て準的と爲すやと、曰、余必しも誦法する所あるに非ず、初年唯、好んで杜詩を讀む、今にして竊に之れを思ふに、拙劣と雖、問、杜の髣髴を得たる者は、蓋、此れが爲の故なりと、從四位下侍、從守山侯、源賴順、其墓に誌



好讀杜詩、今而竊思之、雖拙劣、間得杜之  
 髣髴者、蓋爲此故也、從四位下侍從守山  
 侯源賴順、誌其墓曰、物門之學、風靡天下、  
 夫子與有大造、固無論矣、以余視之、我邦  
 自有斯文、立言之業、能執其左契、經緯橫  
 出、煥乎洋洋、具體而大、莫盛於夫子、顧隆  
 世氣運所釀、天實成之以華、大東百世軌  
 于斯文乎、率土之濱、問南郭服夫子何爲  
 者、雖五尺之童、答以天下文宗、口碑莫尙  
 矣。

高維壽子式曰、服南郭、風韻洒落、喜慍不  
 形乎色、毀譽不芥乎胸、獨從己所欲、似謝  
 安矣。

永富風朝陽曰、南郭常言、功名非吾事、蓋

して曰、物門の學、天下を風靡す、夫子與りて大造あ  
 る、固より論なし、余を以て之れを觀るに、我邦斯文あ  
 りてより、立言之業、能く其左契を執り、經緯橫出、煥  
 乎洋洋、體を具へて大なるは夫子より盛なるは莫し、  
 顧ふに隆盛氣運の釀する所、天實に之れを成すに華  
 を以てす、大東百世、斯文に軌するか、率土の濱、南郭  
 服夫子とは、何する者と問へば、五尺の童と雖、答  
 ふるに天下の文宗を以てす、口碑も尙ふるなし。

高維壽子式曰、服南郭、風韻洒落、喜慍色に形はさず、  
 毀譽胸に芥せず、獨己の欲する所に從ふ、謝安に似  
 たり。

永富風朝陽曰、南郭常に言ふ、功名は吾事に非ずと、

似不任名教者故其言寓託無痕幽深難窺其識度蓋物徂徠門下第一流。

江村叅君錫曰我邦詩元和以前唯僧絕海元和以後漸有其人而白石蛻巖南海其選也今以南郭較夫三子南郭天授不及白石工警不及蛻巖富麗不及南海而竟難爲三子之下者何哉操觚年少悟入此關始可與言詩耳蓋白石天授超凡辭藻絕塵誠不可及若就其全集論之清雅秀婉絢彩溢目而悲壯沈鬱渾雄蒼老者集中無幾南海唯一味綺麗後勒超脫卻屑屑乎纖巧矣蛻巖天縱之才奇正互用變幻百出神工鬼警孤高獨立于古今之間惜乎用才太過蓋用才太過有傷

蓋名教に任せざる者に似たり故に其言寓託痕なし幽深窺ひ難し其識度蓋物徂徠門下の第一流。

江村叅君錫曰我邦の詩元和以前は唯僧絶海あり元和以後は漸其人あり而して白石蛻巖南海は其選なり今南郭を以て夫の三子に較するに南郭天授は白石に及ばず工警は蛻巖に及ばず富麗は南海に及ばず而して竟に三子の下たり難き者は何ぞや操觚の年少此の關に悟入せば始めて與に詩を言ふべきのみ蓋白石は天授超凡辭藻絶塵誠に及ぶべからず若し其全集に就きて之を論ぜば清雅秀婉絢彩目に溢る而して悲壯沈鬱渾雄蒼老者は集中幾ばくも無し南海は唯一味綺麗後勤めて超脱し卻て纖巧に屑々たり蛻巖は天縱の才奇正互に用ひ變幻百出神工鬼警古今の間に孤高獨立す惜いかな才を用ふる太過蓋才を用ふる太過なれば風雅を傷るあり之れを士庶侯家の誦席に陪するに譬ふ時ありて笑謔歌唱するも亦害なきなり太だ過ぐれば則俳優に類する有り南郭能く地步を守り勝を一句一章に求めず而して功を一巻一

風雅、譬之士庶陪侯家、謙庶、有時笑謔歌  
唱、亦無害也、太過則有類俳優、南郭能守  
地步、不求勝於一句一章、而全功於一卷  
一集、今閱其集、初編瑕類頗多、二編十存  
二三、三編四編最粹然矣、乃知此老剪裁  
老益精到、因謂作者無才則已、有小才而  
欲大用之、醜態畢露、最可戒也、大才大用、  
誠爲快絕、而僅欲快絕、易侵三尺、十分之  
才、每用六七分、正是詩家極至工夫、南郭  
能解此義、百尺竿頭不肯進步、反是難至  
地位。

原璠公璠曰、南郭天才流麗、其詩合作者  
眞足配古人、然其聲律、動失法度、是學力  
不足處、至文則大較婉佻、浮而乏於實、雜

集に全らず、今其集を閲するに、初編は段類頗多し、二  
編は十に二三を存す、三編四編は最粹然たり、乃知る  
此の老剪裁老ひて益精到なり、因て謂ふ、作者才な  
ければ則已む、小才あり而して大に之を用ひんと欲  
せば、醜態畢く露はる、最、戒むべきなり、大才大用、  
誠に快絶と爲す、而して僅に快絶ならんと欲せば、三  
尺を侵し易し、十分の才、毎に六七分を用ふるは正に  
是れ詩家極至の工夫なり、南郭能く此義を解し、百尺  
竿頭に肯て歩を進めず、反て是れ至り難き地位なり。

原璠公璠曰、南郭天才流麗、其詩合作の者、眞に舌人  
に配するに足る、然るに其聲律動もすれば法度を失  
ふ、是れ學力足らざる處、文に至りては、則大較婉佻、  
浮にして實に乏く、離にして法に淺し、譽、一世に高し

而淺於法、雖譽高一世、而實殊不稱、物茂卿嘗序其初稿云、它日使子遷木鐸一方、詩之教、庶幾被之一世哉、文亦然、然其慧而才敏也、故其巧與俊、終或不能全闕之、時出之、子遷乃無所不有、已可見、雖茂卿之私、其徒哉、以其不可爲之諱掩也。

釋顯常大典曰、南郭文第四編、爲妙手、初編可議者多、二編三編未爲至。

東龜年藍田曰、不佞壯歲從諸老先生、吟芙蓉館之文、誠於本邦無比、則無比、然其初編則未至混化之地、是以斧斤取材、蹈襲蹈痕蹟多見、若夫二編三編、一切圓機混化亡蹤、至或得意之篇、則李王以下、不敢齒也、四編則衰矣。

と雖、而して實殊に稱はず、物茂卿嘗て其初稿に序して云ふ、它日、子遷をして一方に木鐸たらしめば、詩の教庶幾は之れを一世に被らしめんかなと、文亦然り、然れども其慧にして才敏なり、故に其巧と俊と、終に或は全うすること能はず、之れを闕して時に之れを出だす、子遷乃有らざる所なし、已に見るべしと、茂卿の其徒に私すと雖、其の之れが爲に諱掩すべからざるを以てなり。

釋顯常大典曰、南郭の文、第四編妙手と爲す、初編議すべき者多し、二編三編未だ至れりと爲さず。

東龜年藍田曰、不佞壯歲、諸老先生に從ひ、芙蓉館の文、誠誠に本邦に於いて比なきは、則比なし、然るに其初編は則未だ混化の地に至らず、是れ斧斤を以て材を取る、蹈襲の痕蹟多く見ゆ、若し夫れ二編三編は一切圓機混化して蹤なし、或ひは得意の篇に至りては、則李王以下、敢て齒せざるなり、四編は則衰ふ。

原善公道曰、南郭兼善繪事、恆言日本畫、以僧雪舟狩野元信爲至、如八種畫譜、所謂隸畫、不足觀也、又頗通國風、其父名元矩、事北村季吟、善國風、故承其遺云。

錦天山房詩話、服南郭天才秀潤、加旂風流洒落、照映於一時、是以赤羽之聲、薰灼於四方、海內翕然推爲詩宗、無復異議、以片山兼山之學之誠、尙至採其詩、而附古詩十九首等後、以教兒輩、可以見當時尊崇之至矣、近日詩風大變、專以清新空靈爲宗、唾棄此種詩、斥爲僞體、每舉黃金白雪以爲笑具矣、今遺集具在、其得失可得而議焉、蓋其五古樂府、過於模擬、七古換韻無法、近體拘束於聲調、不得大馳騁、應

原善公道曰、南郭兼善繪事を善くす、恆に言ふ日本の畫は、僧雪舟、狩野元信を以て至れりと爲す、八種畫譜の如きは、謂はゆる隸畫にして、觀るに足らざるなりと、又頗國風に通ず、其父名は元矩、北村季吟に事ふ、國風を善くす、故に其遺を承くと云ふ。

錦天山房詩話、服南郭、天才秀潤、旂れに加ふるに、風流洒落、一時に照映す、是を以て赤羽の聲、四方に薰灼す、海内翕然として推して詩宗と爲し、復た異議なし、片山兼山の學と識とを以て、尙其詩を採りて、而して古詩十九首等の後に附し、以て兒輩に教ふるに至る、以て當時尊崇の至れるを見るべし、近日詩風大に變じ、專ら清新空靈を以て宗と爲す、此の種の詩を唾棄し、斥けて僞體と爲し、毎に黃金白雪を舉げて以て笑具と爲す、今遺集具さに在り、其得失得て論すべし、蓋其五古樂府は、模擬に過ぐ、七古は換韻法なし、近體は聲調に拘束せられて、大に馳騁するを得ず、應酬率、排批支綴、體裁合ふと雖、恣興、索然たり、變化に乏しきが故なり、虛心に之れを論ずれば、當時の稱許、固より太過と爲す、今時の矯枉も亦未だ中を得

酬牽率、排批支綴體裁雖合、意興索然、乏變化故也、虚心論之、當時之稱許、固爲太過、今時之矯枉、亦未爲得中、如舍短取長、則縱使不得爲冠古之絕才、亦不失卓然爲一名家也。

## 服元雄 卷四十三

字仲英、稱多門、攝津人、本姓中西氏、父某爲西宮祝、嘗訴主祠貪汙、反爲所誣、竟放逐以死、仲英痛心刺骨、乃至江戶、三鳴之官、事始得白、受學於服南郭、業旣成、開門授徒、未幾、南郭諸子死、唯有季女、仲英就贅、於是冒服氏、最長于詩、著有踏海集、除承裕子緯曰、仲英於述作、欲別自出機軸、以爲一家、嘗曰、苟有得於我、雖家風所

たりと爲さず、如し短を捨て長を取れば、則縱使冠古の絶才たることを得ざるも、亦卓然として一名家を失はず。

## 服元雄 卷四十三

字は仲英、多門と稱す、攝津の人、本姓は中西氏、父某、西宮の祝たり、嘗て主祠の貪汙を訴へ、反りて誣ふる所と爲り、竟に放逐せられて以て死せり、仲英、痛心骨を刺す、乃、江戶に至り、三たび之れを官に鳴らし、事始めて白するを得たり、學を服南郭に受け、業旣に成り、門を開き、徒に授く、未だ幾くならずして、南郭諸子死す、唯、季女あり、仲英、就いて贅す、是に於いて服氏を冒す、最詩に長す、著に踏海集あり。

除承裕子緯曰、仲英述作に於いて別に自ら機軸を出だし、以て一家を爲さんと欲す、嘗て曰、苟我に得るあらば、家風と雖、必しも守らざる所なり、我不肖と雖、

不必守也、我雖不肖、豈至步趨不能自施、徒從人周旋、以此爲不墜家聲乎、則其志可以觀矣、余嘗過其房、見几上有端明集、乃亦知其於文不必漢、於詩不必唐、將集衆美以成大者也、退省其所爲、文不必漢、未嘗不漢、詩不必唐、未嘗不唐、而二者雜諸宋、未嘗墮宋、則雖所不必守乎、而竟未得、不以家風矣。

錦天山房詩話、仲英愧爲牛後、不墨守家法、雖追縱於七子、步趨少異、猶口之於鼻、州也、其詩精鍊、氣格迥然、上視乃翁、殆有過而無不及焉、可謂克子也。

## 高維馨 卷四十四

字子式、號東里、又號蘭亭、本姓高石、其先

豈步趨自ら施す能はず、徒に人に從ひ周旋し、此を以て家聲を墮さずと爲すに至らんやと、則、其志以て觀るべし、余嘗て其房を過ぎるに、几上に端明集あるを見る、乃亦、其文に於けるは必しも漢ならず、詩に於けるは必しも唐ならず、將に衆美を集め以て大を成さんとする者なるを知る、退いて其の爲す所を省みるに、文は必しも漢ならざるも、未だ嘗て漢ならずんばあらず、詩は必しも唐ならざるも、未だ嘗て唐ならずんばあらず、而して二者諸を宋に雜ふるに、未だ嘗て宋に墮ちず、則必しも守らざる所と雖、而して遂に未だ家風を以てせざるを得ず。

錦天山房詩話、仲英牛後たるを愧ぢて、家法を墨守せず、七子に追蹤すと雖、步趨少しく異なり、猶ほ口の鼻州に於けるがごとし、其詩精鍊、氣格迥然、上、乃翁に視ぶるに、殆んど過ぎたるあるも、而かも及ばざる無し、克く子たりと謂ふべし。

## 高維馨 卷四十四

字は子式、東里と號す、又、蘭亭と號す、本姓は高石、其

下毛人祖勝昌、遷居東都、改姓高野、廢居治產、父勝春、以善俳諧聯歌有名、號百里居士、維馨生聰敏、四歲能書、六歲從佐支龍兄弟學書、成童見物徂徠、徂徠奇之、目以才抵連城、十七喪明、徂徠勸以專心爲詩、於是盡絕人事、刻意爲詩、與服南郭齊名、從遊甚衆、好著古彝鼎彝洗書畫諸雅、菴治齋室、園庭頗修、又好山水、數遊鎌倉、築草堂於圓覺寺側、就營壽藏、寶曆七年疾卒、年五十四、所著有蘭亭集十卷。

太宰純德夫曰、唐人宋雍、初無令譽、及嬰瘳疾、詩名始彰、吾友高子式、年十七、失明、厥後詩才漸高、豈造物之均邪、令人不兼有其長也、抑造物之慈也、令人失於彼得。

先は下毛の人祖、勝昌、東都に遷居す、姓を高野と改む、廢居して産を治む、父、勝春、俳諧聯歌を善くするを以て名あり、百里居士と號す、維馨生れて聰敏、四歲にして書を能くし、六歲にして佐支龍兄弟に従ひ、書を學び、成童にして、物徂徠を見る、徂徠之れを奇とし、目するに、才、連城に抵るを以てす、十七、明を喪ふ、徂徠勸めて心を専らにして詩を爲るを以てす、是に於て盡く人事を絶ち、刻意、詩を爲る、服南郭と名を齊くす、從遊甚衆し、好んで古彝鼎彝洗、書畫諸雅、菴を著へ、齋室を治め、園庭頗る修む、又山水を好み、鎌倉に遊び、草堂を圓覺寺の側に築き、就いて壽藏を營す、寶曆七年疾んで卒す、年五十四、著す所、蘭亭集十卷あり。

太宰純德夫曰、唐人宋雍、初め令譽なし、瘳疾に嬰るに及び、詩名始めて彰はる、吾友高子式、年十七、明を失ふ、厥の後詩才漸く高し、豈んど造物の均なるや、人をして其長を兼有せざらしむるか、抑造物の慈や、人をして彼に失ふて、此に得しむるか。



於此也。

秋山巖子羽曰、高子式山人達士也、置鬪體杯時時把玩、一死生遺形骸、超然自適焉。

江村綾君錫曰、蘭亭生平所作殆萬首、貴介公子爭延講詩、名聲籍甚于一時、其詩剪裁整密、音韻清暢、雖不及白石、鮫巖、南郭等大家名家、在小家數、則可稱上首者。錦天山房詩話、蘭亭詩貴華彩、尙標致、雖閎博不及南郭、而清潤過之、此其所以分驥而竝騁歟、後閱朝鮮李德懋懋官所著清脾錄、內載余嘗遊平壤、含球門外吳生家、有蘭亭集、日本詩人也、其明妃曲云云、次節錄門人山維熊子祥著慕誌、又曰、讀

秋山巖子羽曰、高子式は山人達士なり、鬪體杯を置き、時々把玩し、死生を一にし、形骸を遺れ、超然として自適せり。

江村綾君錫曰、蘭亭、生平作る所、殆んど萬首、貴介公子争ふて延いて詩を講ぜしむ、名聲、一時に籍甚なり、其詩剪裁整密、音韻清暢、白石、鮫巖、南郭等の大家名家に及ばずと雖、小家數に在りては、則上首と稱すべき者なり。

錦天山房詩話、蘭亭の詩は華彩を貴び標致を尙ぶ、閎博は南郭に及ばずと雖、而も清潤は之れに過ぐ、此れ其驥を分ちて竝び騁する所以か、後、朝鮮、李德懋懋官の著はす所の清脾錄を閱するに、内に載す、余嘗て平壤含球門外吳生の家に遊ぶに、蘭亭集あり、日本の詩人なり、其明妃曲に云云、次に門人山維熊子祥著の慕誌を節録す、又曰、蘭亭の詩及慕誌を讀みて、文風の大に振ふを知るべし、明を失ひて詩を能くす、海外

蘭亭詩及墓誌、可知文風之大振、失明而能詩、海外之唐仲言也、觀此則可知蘭亭詩遠播鷄林矣。

### 谷友信

字文卿、號藍水、又號玄甫、東都人、本姓橫谷氏、自修爲、谷、高祖宗興、至父宗璵、世以善彫鏤著于世、生岐嶷、六歲喪明、常以指畫掌上識字、使人讀書、一聽卽記、初從多紀玉池、學醫、治療頗驗、後師事高蘭亭、專留心於歌詩、詩名大噪、初刻意李滄溟、晚與松延年釋六如交、風調少變、所著藍水詩、率多晚年作、安永七年、歲七十九而卒。

東條孺子藏、曰玄圃、雖以詩歌睥睨關東、

の唐仲言なりと此れを觀れば則蘭亭の詩遠く鷄林に播くをる知べし

### 谷友信

字は文卿、藍水と號す、又玄甫と號す、東都の人、本姓は横谷氏、自ら修して谷と爲す、高祖宗興より父宗璵に至るまで、世、彫鏤を善くするを以て世に著はる、生れて岐嶷、六歳にして疾んで明を喪ふ、常に指を以て掌上に畫し、字を識る人をして書を讀ましめ、一たび聽けば、卽ち記す、初め多紀玉池に從ひ醫を學ぶ、治療、頗驗あり、後高蘭亭に師事し、専ら心を歌詩に留む、詩名、大に噪がし、初め李滄溟に刻意し、晚に松延年、釋六如と交り、調風少しく變す、著す所、藍水詩、率、晚年の作多し、安永七年、歲七十九にして卒す。

東條孺子藏曰、玄圃、詩歌を以て關東に睥睨し、聲價

聲價高於一世、謙讓自將、常謂予性拙於  
 聲音、拙於針按、失明之後、其所學習、百事  
 無所通、惟詞藻比它技、耿耿有線路之明耳。

錦天山房詩話、藍水詩、整齊巧穩、五言排  
 律最其擅長、在譚園社中、罕觀其比、前乎  
 藍水者、有高子式、後乎藍水者、有橋原子  
 山、異曲同工、百年之內、比肩而立、輝映於  
 後、先、何盲者之多才也、噫嘻世之稱詞人  
 者、率多蠡笨、燕淺、滓穢、滿紙、十指如槌、累  
 人捧腹、雖目光如炬、何濟於用乎、視此三  
 人者、其巧拙爲何如哉。

鵜孟 一卷四十五

宇士寧、鵜殿氏、稱左膳、家世親衛騎、采地  
 入一千石、少以父蔭、補職、幼好讀書、修性

一世に高しと雖、謙讓自ら將ゆ、常に謂ふ、予が性、聲  
 音に拙にして、針按に拙なり、失明の後、其の學習す  
 る所、百事通する所なし、惟、詞藻は它の技に比して、  
 耿耿として線路の明あるのみ。

錦天山房詩話、藍水の詩、整齊巧穩、五言排律は、最其  
 擅長なり、譚園社中に在りて、其比を觀る、罕れなり、藍  
 水より前にしては、高子式あり、藍水より後にしては  
 橋原子山あり、異曲同工、百年の内、比肩して立ち、後  
 先に輝映す、何ぞ盲者の多才なるや、噫嘻世の詞人と  
 稱する者、率ね多く蠡笨無淺、滓穢紙に滿ち、十指槌の  
 如く、累人捧腹す、日光炬の如しと雖、何ぞ用を濟さ  
 んや、此三人を視るに、其巧拙何如と爲すや。

鵜孟 一卷四十五

字は士寧、鵜殿氏、左膳と稱す、家世、親衛の騎、采地、  
 一千石を入る、少ふして父の蔭を以て職に補す、幼に  
 して讀書を好み、性理家の學を修め、後、物徂徠の説

理家學、後悅物徂徠之說、嚮注之、遂從服南郭學、刻意李滄溟、題樣句法、一幕倣之、機軸氣韻稍肖焉、嘗屢從大駕、詣紅葉山寢廟、俄頃賦五言長律一首、稿不加點、人嘆其敏捷、爲人簡傲、賜邸在本莊南溝涯、構一樓、讀書於其中、東眺筑波山、西望富士峰、朝暮揖之曰、他無所潤吾目也、學者稱曰本莊先生、安永三年卒、歲六十五、著有桃花園稿、鷄肋集、樓居放言。

### 石正猗

本姓石島、字仲綠、一名藝、字子游、□□人、自號筑波山人、學詩於服南郭、性豪爽、好

を悦び、之れに嚮注し、遂に服南郭に従ふて學ぶ、意を李滄溟に刻し、題樣句法、一に之れに摹倣す、機軸氣韻、稍肖たり、嘗て大駕に扈從し、紅葉山寢廟に詣る、俄頃にして五言長律一首を賦し、稿點を加へず、人其敏捷を嘆ず、人と爲り簡傲、邸を賜ふて本莊南溝の涯に在り、一樓を構へ、書を其中に讀む、東、筑波山を眺み、西、富士峰を望む、朝暮之れを揖して曰、他は吾が目々潤す所なしと、學者稱して本莊先生と曰ふ、安永三年卒す、歲六十五、著に桃花園稿、鷄肋集、樓居放言あり。

### 石正猗

錦天山房詩話、士寧、富貴に生長し、氣岸甚高し、同に黨し、異を伐ち、専ら門戶の見を持、其詩、亦矜氣あり。

本姓は石島、字は仲綠、一名は藝、字は子游、□□の人、自、筑波山人と號す、詩を服南郭に學ぶ、性豪爽、酒を

酒不能爲家、而以詩才雄豪、稱于一時、賀曆戊寅病卒、病間手錄所著詩文十卷、名曰菱荷園集、門人舟正昇叔龍校刊、南郭序、而行于世。

服南郭曰、昔見仲綠於少壯之時、既識其才有餘、卽勸之以篤學、積修有年、蓄積亦富、觀其以運用之才、發之著作之間、煥乎有章、多多益辨、中歲而奄逝、不悉施用其所有、鬱鬱纏其志而沒、亦可悲也。

江村毅君錫曰、仲綠嘗遊京師、作詩曰、敵裘仗劍入西京、自比能文陸士衡、誰見篇章焚筆硯、豈將詩賦讓簪纓、一時羊酪無人問、千里蓴羹動客情、洛下書生誇博物、寥寥未聽茂先名、其狂誕大率類此、其詩

好みて家を爲す能はず、而して詩才雄豪を以て一時に稱せらる、賀曆戊寅病んで卒す、病間に手録し著す所、詩文十卷、名けて菱荷園集と曰ふ、門人舟正昇叔龍校刊し、南郭序して世に行ふ。

服南郭曰、昔、仲綠を見ら、少壯の時に於いて、既に其才餘り有るを識る、卽之れに勸むるに篤學を以てす、積修年あり、蓄積亦富む、其の運用の才を以て之れを著作の間に發するを觀るに、煥乎として章あり、多々益辨す、中歲にして奄逝す、悉く其の有する所を施用せず、鬱々として其志を纏して沒す、亦悲しむべきなり。

江村毅君錫曰、仲綠、嘗て京師に遊び、詩を作りて曰、敵裘劍に仗りて西京に入る、自ら比す能文の陸士衡、誰か篇章を見て筆硯を焚く、豈詩賦を將つて簪纓に譲らんや、一時羊酪人の問ふなく、千里蓴羹客情を動かす、洛下の書生博物に誇る、寥寥未だ茂先の名を聽かず」と、其狂誕、大率ね此れに類す、其詩往々神氣軒轟筆端活動す、若し濟ふに精細を以てせば、則詞壇の

往往神氣軒翥、筆端活動、若濟以精細、則可爲詞壇旌門、惜乎其人輕躁下筆亦復疎率耳、

錦天山房詩話、筑波詩翩翩有逸氣。

鷹見正長 卷四十六

字子方、號爽鳩子、稱三郎兵衛、三河人、本姓石川氏、出爲鷹見定重嗣、因冒其氏、世仕田原侯、爲大夫、生而重腫、讀書二行竝下、右手持筆記帳簿、左手把算盤、爲會計、不敢差乘除、二十一、至江戶、學於物徂徠、好作歌詩、及爲大夫、尤留意於經濟、學博綜和漢典、禮法律、爲政九年、封內大治、享保二十年卒、年四十六、所著有詩筌、或問珍、爽鳩遺稿、其妻即義父定重女、名冬野、

錦天山房詩話下冊

門に旌すべし、惜いかな其人輕躁、筆を下す、亦復疎率なるのみ。

錦天山房詩話、筑波の詩翩翩として逸氣あり。

鷹見正長 卷四十六

字は子方、爽鳩子と號す、三郎兵衛と稱す、三河の人、本姓は石川氏、出で、鷹見定重の嗣と爲る、因て其氏を冒す、世、田原侯に仕へ、大夫と爲る、生れて重腫、讀書二行竝び下る、右手に筆を執りて帳簿に記し、左手に算盤を把りて會計を爲し、敢て乘除を差へず、二十一、江戶に至り、物徂徠に學び好んで歌詩を作る、大夫と爲るに及び、尤意を經濟に留め、學は博く和漢の典禮法律を綜べ、政を爲す九年、封内大に治まる、享保二十年卒す、年四十六、著す所、詩筌、或問珍、爽鳩遺稿あり、其妻は即ち義父定重の女、名は冬野、綠柳女史と號す、頗、婦行あり、又書を讀み、文を臨す、好んで和歌を咏す、尤草書に工みなり。

二七

號綠柳女史、頗有婦行、又讀書屬文、好詠和歌、尤工草書。

錦天山房詩話、爽鳩詩才逸宕、超絕於人、嘗陪侯駕、游赤羽根濱、會網獲一大龜、侯命諸臣賦詩、爽鳩詩云、周室列侯漢功臣、千旄新淹赤羽濱、赤羽濱海三千里、光輝忽添五馬新、漁人喜迎獻大龜、云是聖世伴鳳麟、朝出崑崙、夕碣石、負抵飛梁、度潮汐、壓倒蛟螭、掣鯢鯨、乘濤吹湧、到蓬瀛、蓬瀛十二黃金臺、多少鱗甲相坐迎、三足之龜六眸龜、一時水物皆堪驚、況亦藏六千年壽、再逢至仁保餘生、侯欣然嘉賞、命大張宴於海濱、朱書其詩於龜背而放焉。

岡井孝先

錦天山房詩話、爽鳩詩才逸宕、人に超絶し、嘗て侯の駕に陪し、赤羽根濱に遊ぶ、會網して一大龜を獲たり、侯、諸臣に命じ詩を賦せしむ、爽鳩の詩に云ふ、「周室の列侯漢の功臣、千旄新に淹す赤羽の濱、赤羽の濱海三千里、光輝忽ち五馬を添へて新なり、漁人喜び迎へて大龜を獻す、云ふ是れ聖世鳳麟に伴ふ、朝に崑崙を出で、夕に碣石、飛梁に負抵して潮汐を度る、蛟螭を壓倒して鯢鯨を制す、濤に乘じ湧を吹き蓬瀛に到る、蓬瀛十二黄金臺、多少の鱗甲相坐して迎ふ、三足の龜六眸の龜、一時の水物皆驚くに堪へたり、況んや亦六千年の壽を藏し、再び至仁に逢ふて餘生を保つ」と、侯欣然として嘉賞す、命じて、大に宴を海濱に張り、其詩を龜背に朱書して放つ。

岡井孝先

字仲錫、號嶮州、稱郡太夫、□□人、仕高松侯、爲文學。

錦天山房詩話、嶮州雖入讖社、其詩流利、鮮穠、非株守七子者。

### 千葉玄之

字子玄、號芸閣、稱茂右衛門、江戸人、八歲喪父母、舅氏憫之、畜於其家、自幼好讀書、善詩及古文辭、又游祭酒林公之門、名聲頗著、嘗應某侯聘、爲文學、不得志、即投効去、垂幃杜門、以教授爲業、時從繙流而遊、著有芸閣集。

正二位藤原公亨嘉卿、敍其集曰、子玄居負郭窮巷、讀書講學、教授二十年矣、不問家產、而晏如、蓋以樂道也、雅好古文辭、與

字は仲錫、嶮州と號す、郡太夫と稱す、□□人、高松侯に仕へ、文學となる。

錦天山房詩話、嶮州、讖社に入ると雖、其詩、は流利鮮穠、七子を株守する者に非ず。

### 千葉玄之

字は子玄、芸閣と號す、茂右衛門と稱す、江戸の人、八歲にして父母を喪ふ、舅氏之れを憫み其家に畜ふ、幼より讀書を好み、詩及び古文辭を善くす、又、祭酒林公の門に遊び、名聲頗、著はる、嘗て某侯の聘に應じ、文學と爲る、志を得ず、即ち投効して去り、幃を垂れ門を杜ぎ、教授を以て業と爲す、時に繙流に従ふて遊ぶ、著に芸閣集あり。

正二位藤原公亨嘉卿、其集に敍して曰、子玄は負郭窮巷に居り、讀書講學、教授二十年、家産を問はず、而して晏如たり、蓋、以て道を樂しむなり、雅とより、古文辭を好み、世儒と柄鑿し、傲然として植へず、蓋、吾が



世儒柄鑿、傲然不恤、蓋以從吾所好也、隱約著書、不就聘徵、不汲汲乎名利、蓋以高尚其事也、

關修齡子長曰、子女既嫻古文辭、故往往多瑰偉雄爽之語、古詩豪放自恣、近體則不詞奪於華、法失於略也、

飯田龜朝伯宗曰、邈哉先生、挺然自立、才學竝茂、初九龍盤、雅志彌確、大非世之作、務爲模擬矜誇之比、其格調高古、音吐溫潤、識者必有取焉、

錦天山房詩話、芸閣嘗著詩學小成、雖兔園小冊、然垂惠於幼學、不小、其詩、格不甚高、調不甚古、而溫柔和平、亦自可喜、

平義質卷四十七

好む所に從ふを以てなり、隱約して書を著し、聘徵に就かず、名利に汲々たらず、蓋、以て其事を高尚にするなり。

關修齡子長曰、子女、既に古文辭に嫻ふ、故に往々瑰偉雄爽の語多し、古詩は豪放自恣、近體は則、詞華に奪はれ、法、略に失せず。

飯田龜朝伯宗曰、邈なるかな先生、挺然自立、才學竝び茂り、初九龍盤、雅志彌確、大に世の作者が、務めて模擬矜誇を爲すの比に非ず、其格調高古、音吐溫潤、識者、必、取るあらん。

錦天山房詩話、芸閣嘗て詩學小成を著す、兔園の小冊なりと雖、然も惠を幼學に垂るゝこと小ならず、其の詩格甚高からず、調甚古からず、而も溫柔和平、亦自ら喜ぶべし

平義質卷四十七

字子彬、初名良能、號竹溪、三浦氏、稱平太夫、江戸人、少仕甲斐侯吉保、爲近侍、寶永二年常憲大君臨、侯邸諸學士肄業於御前、子彬進講孟子、道在邇章、言語辨爽、儀容可觀、賞賜時服、年僅十七、後受業物徠、天資穎脫、未數年、徧究群經、見解奇拔、出入意表、又善書、徂徠愛其聰敏、每著書、脫稿、輒使繕寫、故徂徠臨終、屬遺書於子彬、及服子遷、尤留意經濟、精于律學、中年致仕家居、執政濱松侯松平信祝、厚禮聘焉、不就、物金谷強之、而後可、班比上士、爲政府典簿、子彬有吏幹、練達時事、最諳先朝舊典、歷世沿革、人皆敬服焉、寶曆六年卒、年六十八歲、著有射學正宗、律學正宗

字は子彬、初の名は良能竹溪と號す、三浦氏、平太夫と稱す、江戸の人、少ふして甲斐侯吉保に仕へ、近侍と爲る、寶永二年、常憲大君、侯邸に臨む、諸學士業を御前に肆ふ、子彬、進んで孟子の道は邇に在りの章を講ず、言語辨爽、容儀觀る可し、時服を賞賜す、年僅に十七、後業を物徠に受く、天資穎脫、未だ數年ならずして、徧く群經を究む、見解奇拔、人の意表に出づ、又書を善くす、徂徠其聰敏なるを愛し、書を著し稿を脱する毎に、輒ち繕寫せしむ、故に徂徠、終に臨み、遺書を子彬及び服子遷に屬す、尤、意を經濟に留む、律學に精し、中年致仕家居す、執政濱松侯松平信祝、禮を厚ふして聘すれども、就かず、物金谷之れを強め、而して後可す、班、上士に比す、政府の典簿と爲る、子彬吏幹あり、時事に練達す、最先朝の舊典、歷世の沿革を諳んず、人皆敬服す、寶曆六年卒す、年六十八、著に射學正宗、律學正宗、國字解、明律釋義、竹溪集等あり、

國字解、明律釋義、竹溪集等。

錦天山房詩話、江北海曰、徂徠門下稱多才俊、其顯者、春臺、南郭之外、猶數十人、可謂盛也、然細考之、則其中大有軒輊、蓋大名之下、易成名耳、況赫赫東都、非他邦比、或攀龍附鳳、歛託禁衛、或曳裾授簡、長沾侯鯖、假虎威者、附驥尾者、青雲非難致也、加之邦國士人、各從其君往來、結交同盟、遍滿諸藩、褒同伐異、鼓盪扇揚、靡遐僻不屆、是其所以顯赫一時也、退察其私、則羊質而虎文、名過其實者、亦不鮮、箴之洵之後世、自有公論耳、余謂北海之論、可謂深中物門諸子之病也、蓋譏老以雄傑才、駕宏博學、創立門戶、薰灼海內、輕俊之士、爭

錦天山房詩話、江北海曰、徂徠門下才俊多しと稱す、其顯はるゝ者、春臺、南郭の外、猶數十人、盛んなりと謂ふべきなり、然れども細に之れを考ふれば、則其中大に軒輊あり、蓋、大名の下、名を成し易きのみ、況んや赫々たる東都、他邦の比に非ず、或は龍を攀ぢ鳳に附き、歛、禁衛に託し、或は裾を曳き簡を授け、長く侯鯖に沾し、虎威を假る者、驥尾に附する者、青雲致し難きに非ざるなり、之に加ふるに、邦國の士人、各、其君に従ひて、往來し、結交同盟、諸藩に遍滿す、同を褒め異を伐ち、鼓盪扇揚、遐僻として届らざるは靡し、是れ其の一時に顯赫する所以なり、退いて其私を察すれば、則羊質にして虎文、名は其實に過ぐる者亦鮮からず、之れを箴し之れを洵す、後世自ら公論あらんと、余謂ふ、北海の論、深く物門諸子の病に中ると謂ふべきなり、蓋、老は雄傑の才を以て、宏博の學に駕し、門戶を創立し、海内に薰灼す、輕俊の士、争ふて其門に萃る、波流風靡し、彼れ唱へ此れ和す、皆口を開天嘉隆に藉る、而して草に依り木に附くの徒、亦復鈔からず、故に名盛にして實副はざる者多し、今、踞

萃其門、波流風靡、彼唱此和、皆藉口於開  
天嘉隆、而依草附木之徒、亦復不尠、故名  
盛而實不副者多矣、今就護國錄彙中、擇  
其差佳者、他如周南郭等門人、皆附子後、

### 板倉九

字惇叔、號復軒、稱九右衛門、江戸人、奉仕  
文昭大君、潛邸之時爲侍史、及從入西城、  
擢爲司計、無幾爲司計曹長、正徳中爲三  
城留守、初受業於木下順菴、最善物徂徠  
有一貴紳、甚惡徂徠、諷之莫與交、惇叔不  
可、益與之交、使其子受業於門、其在官署、  
曹長疾其謬、諤廉直、陽推有才器、曹務煩  
擾者、悉委之、欲伺其有過而中傷之、而八  
九年間、無覺可乘、性好書、聞人藏奇書、百

鐘天山房詩話下冊

國錄彙中に就いて其差佳なる者を擇ぶ、他、周南  
郭等門人の如きは皆後に附す。

### 板倉九

字は惇叔復軒と號す、九右衛門と稱す、江戸の人、文昭  
大君に奉仕す、潛邸の時、侍史と爲る、從つて西城に入  
るに及んで、擢んでられて司計となる、幾も無くして  
司計曹長と爲る、正徳中、三城留守と爲る、初め業を木  
下順菴に受く、最、物徂徠に善し、一貴紳あり、甚、徂徠  
を惡み、之れを諷して與に交はること莫らしむ、惇叔  
可かず、益、之れと交はる、其子をして業を門に受け  
しむ、其官署に在るや、曹長其謬諤廉直を疾み、陽に  
才器あるを推して、曹務の煩擾なる者は、悉く之れを  
委し、其過あるを伺ひて之れを中傷せんと欲す、而し  
て八九年間、覺の乘すべき無し、性、書を好み、人、奇書  
を藏するを聞けば、百方之れを借り、親しく自ら購寫  
す、凡そ五百八十卷、享保十三年、歳六十四にして卒

方借之、親自謄寫、凡五百八十卷、享保十三年、歲六十四而卒、有三子、長惇行、字敬德、號蘭溪、稱助三郎、夔職、仲美仲、季美叔、皆好學、美仲最有名。

## 板倉安世

字美仲、號璜溪、又號帆丘、稱安右衛門、惇叔、仲子、與弟同學於物徂徠、聰敏絕人、而放蕩不羈、太宰春臺嘗面質於稠人中、美仲自此輕詆春臺曰、一錢不直、謬園之徒、嘗集服部南郭家、春臺獨後至、足過翳美仲之刀、義當頂禮以謝、過而徑坐上頭、不一言以陳謝、美仲恆慍、春臺乖僻、動以苛禮律己、於是特目春臺、自執其刀、加己額、拜之、春臺意色殊惡、美仲教授都下、著有

す、三子あり、長は惇行字は敬德、蘭溪と號す、助三郎と稱す、職を夔く、仲は美仲、季は美叔、皆學を好む、美仲、最、名あり。

## 板倉安世

字は美仲、璜溪と號す、又、帆丘と號す、安右衛門と稱す、惇叔の仲子にして、弟と同じく物徂徠に學ぶ、聰敏、人に絶す、而して放蕩不羈なり、太宰春臺、嘗て稠人中に面質す、美仲此れより春臺を輕詆して曰、一錢に直ひせずと、藤園の徒、嘗て服部南郭の家を集る、春臺獨後れて至る、足過ちて美仲の刀を觸む、義當に頂禮して以て過を謝すべし、而して徑に上頭に坐す、一言以て陳謝せず、美仲恆に春臺の乖僻にして動もすれば苛禮を以て己れを律するを愠る、是に於て特に春臺を目し、自ら其刀を執り、己れの額に加へて之れを拜す、春臺意色殊に惡し、美仲都下に教授す、著に帆丘集あり。

## 帆丘集。

角田簡大可曰、瑣溪恃才蹇傲、愚弄一世、而於服南郭、則必曰赤羽先生、不名也。

錦天山房詩話、帆丘跡弛之士、當時同輩皆避才鋒、想其詩文必有大可觀者、而亡命削籍、韜迹埋名、以故遺集不甚傳、尙待異日甄錄。

## 土屋昌英

字伯曄、號藍洲、豐前中津人、東如江都、學於物徂徠、以詞章稱、游事延岡侯、尋辭祿去、後又以醫仕小倉侯。

平玄中子和曰、土屋藍洲、清如白璧、雄視

無人。

## 墨昭猷

錦天山房詩話下冊

角田簡大可曰、瑣溪、才を恃みて蹇傲、一世を愚弄す、而して服南郭に於ては、則必赤羽先生と曰ふて名いはず。

錦天山房詩話、帆丘は、跡弛の士、當時の同輩皆才鋒を避く、想ふに其詩文必大に觀るべき者あらん、而して亡命して籍を削られ、迹を韜み名を埋む、故を以て遺集甚傳はらず、尙異日を待ちて甄録せん。

## 土屋昌英

字は伯曄、藍洲と號す、豐前中津の人、東江都に如き物徂徠に學ぶ、詞章を以て稱せらる、延岡侯に游事す、尋いで祿を辭して去る、後、又醫を以て小倉侯に仕ふ。

平玄中子和曰、土屋藍洲、清きこと白璧の如し、雄視人なし。

## 墨昭猷

字君徽、號滄浪。

物養松徂徠曰、太氏吾黨之士、東壁既歿、詩唯服平二生與君徽耳。

鳴鳳卿

一名信遍、字歸德、又字子陽、成島氏、邦讀成與鳴同、故假修爲鳴氏、號錦江、又稱芙蓉道人、稱道筑、奥州人、本姓平井氏、幼來江戶、爲成島道雪所養、仕大府爲坊主、元文二年、爲同朋、姓好學、悅物徂徠之說、多與其徒交、爲人弘毅、志尙節概、在職、強力享保中侍講、禮記明律、寵遇日渥、賜十三經二十一史等、乃起芙蓉樓、以儲焉、寶曆十年卒、年七十二、著有芙蓉樓集。

錦天山房詩話、錦江著撰甚夥、祭酒林公

字は君徽、滄浪と號す。

物養松徂徠曰、太氏吾黨の士、東壁既に歿し、詩は、唯服平二生と、君徽とのみ。

鳴鳳卿

一の名は信遍、字は歸德、又の字は子陽、成島氏、邦讀成と鳴と同じ、故に假修して鳴氏と爲す、錦江と號す、又、芙蓉道人と稱す、道筑と稱す、奥州の人、本姓は平井氏、幼にして江戶に來る、成島道雪に養はる、大府に仕へ坊主と爲る、元文二年、同朋と爲る、性、學を好み、物徂徠の説を悦び、多く其徒と交はる、人と爲り弘毅、志尙節概、職に在りて強力、享保中、禮記明律を侍講す、寵遇日に渥し、十三經、二十一史等を賜ふ、乃、芙蓉樓を起し、以て儲ふ、寶曆十年卒す、年七十二、著に芙蓉樓集あり。

錦天山房詩話、錦江、著撰甚夥し、祭酒林公、其孫司直

與其孫司直邦之善、余欲介林公借鈔其遺集、未果、客歲其家不戒火、悉付煨燼、可勝歎哉。

## 菅正朝

字大佐、後改名弘嗣、山田氏、號麟嶼、江戶人、父宗圓、大府醫員、文照大君時爲儲君侍醫、階法眼、大佐生而警悟、甫六歲、能讀國字書冊、賦和歌、亦可誦、七歲讀論孟五經、旁通子史、既而修文辭、操唐音、旁學音律、才益秀、記聞益博、人稱爲神童、名譽益隆、遊物徂徠之門、徂徠稱曰、吾家千里駒、室鳩巢尤器之、以聞大府、享保九年六月、有德大君命執政、試之、於是乃命執政、曰、山田正朝齒尙髫年、才茂而業勤、宜優之、

邦之と善し、余、林公を介して其遺集を借鈔せんと欲し、未だ果さず、客歲其家、火を戒めず、悉く煨燼に付す、歎するに勝ゆべけんや。

## 菅正朝

字は大佐、後、名を弘嗣と改む、山田氏、麟嶼と號す、江戶の人、父、宗圓、大府の醫員たり、文照大君の時に儲君の侍醫と爲り、法眼に階す、大佐、生れて警悟、甫めて六歲、能く國字書冊を讀み、和歌を賦す、亦誦すべし、七歲、論孟五經を讀み、旁、子史に通ず、既にして文辭を修め、唐音を操り、旁、音律を學ぶ、才益秀で、記聞益博し、人稱して神童と爲す、名譽益隆なり、物徂徠の門に遊ぶ、徂徠稱して、吾家の千里駒と曰へり、室鳩巢尤之れを器とし、以て大府に聞す、享保九年六月、有德大君執政に命じ之れを試む、是に於て乃、執政に命じて曰、山田正朝、齒尙ほ髫年、才茂にして業勤む、宜しく之れが饒粟を優にし、以て其成るを玉にすべしと、乃、歲俸米二百石を給し、以て學資と爲す、員に儒官に補す、九月八日召されて、對して關



藪稟以玉其成、乃給歲俸米二百石、以爲學資、補員儒官、九月八日被召對進講關雎一篇、聞者竦聽、屢蒙顧問、大君喩曰、汝說詩亦能解、願聞汝善病、成器培養爲道、自愛、玉音丁寧、在朝人皆嘆羨其遇、是時年僅十三、明年請暇三年、游于京師、見伊藤東涯大悅之、從而學焉、在京闈歲聞、父病、東歸、享保二十年患痘而歿、年僅二十四、著有尙古堂集、麟嶼遺稿、

### 瀧正愷

字彌八、號鶴臺、長門人、本姓引頭氏、出後於瀧氏、幼而英邁、好學、從山縣周南、承祖徠之說、後來江戶、時徂徠已沒、乃遊服南郭門、南郭異其才、不敢弟子視之、既而到

唯一篇を進講す、聞く者竦聽せり、屢顧問を蒙る、大君喩して曰、汝の詩を説く、亦能く頤を解く、聞く汝善く病むと、器を成し培養し、道の爲に自愛せよと、玉音丁寧、在朝の人、皆其遇を嘆羨す、是時、年僅に十三、明年暇を請ひ、三年、京都に遊ぶ、伊藤東涯を見て大に之れを悦び、從ふて學ぶ、京に在りて歳を闋し、父の病を聞き東歸す、享保二十年痘を患ひて歿す、年僅に二十四、著に尙古堂集、麟嶼遺稿あり。

### 瀧正愷

字は彌八、鶴臺と號す、長門の人、本姓は引頭氏、出でて瀧氏に後ちたり、幼にして英邁、學を好み、山縣周南に從ひ、徂徠の説を承く、後江戶に來る、時に徂徠已に歿す、乃、服南郭の門に遊ぶ、南郭、其才を異とし、敢て之れを弟子視せず、既にして京に到り、又、長崎に之き、又江戶に來る、到る處、名聲藉甚、從遊甚多し、

京、又之長崎、又來江戶、到處名聲藉甚、從遊甚多、寶曆癸未、韓使來聘、彌八奉侯命歸鄉、接伴韓使、皆歎其學該博、善書畫醫術、旁精通佛學、太宰春臺稱爲海西第一才子。

紀德民世馨曰、彌八在郷、飲于一權貴、酒酣問曰、凡爲治、和漢孰難、彌八曰、漢難和易、曰何也、曰彼使不學之人居政職、則必恥受其制、我雖不學之人居政職、而下亦不恥受其制、所以彼難我易也、合坐失色、其人以告君、君曰、諷刺公等、唯是此老、又曰、彌八豪邁、不能屈物、然與聞善言美行、淚必交睫、

宇惠

錦天山房詩話下冊

寶曆癸未、韓使來聘す、彌八、侯の命を奉じ郷に歸て、韓使を接伴す、皆、其學の該博を歎す、書畫醫術を善くし、旁ら佛學に精通す、太宰春臺、稱して海西第一の才子と爲す。

紀德民世馨曰、彌八郷に在り、一權貴に飲す、酒酣にして問ふて曰、凡、治を爲す、和漢孰れか難き、彌八曰、漢は難く和は易しと、曰何ぞや、曰、彼は不學の人をして政職に居らしむれば、則必其制を受くるを恥づ、我は不學の人、政職に居ると雖、而も下亦其制を受くるを恥ぢず、彼れ難くして我易き所以なりと、合坐色を失ふ、其人以て君に告ぐ、君の曰、公等を諷刺するは、唯、是れ此の老と、又曰、彌八豪邁にして、物に屈する能はず、然れども善言美行を與り聞けば、淚必睫に交ふ。

宇惠

三九

字子迪、號瀟水、稱惠助、本姓宇佐美、南總人、父習翁好學、子迪年十七、使來江戶、師事物徂徠、居三年、徂徠歿、則與社友相劇、切、攜板美仲歸郷、日資切劇、久之學大進、再來江戶、開門授徒、晚仕于出雲侯、與聞邦政、子迪莊重嚴毅、師道卓然、有列侯請教者、輒先議待己之儀、而後敢往、生平篤信師說、畢力校刻其遺著、雖高足弟子所不及也。

原善公道曰、瀟水以經義爲任、頗有春臺之風、熊耳長技在文章、殆追南郭、而交相善、熊耳謂爲久要有兄弟之誼。

和知棟卿卷四十八

字子蓼、號東郊、稱九郎左衛門、長門人、其

字は子迪、瀟水と號す、惠助と稱す、本姓は宇佐美、南總の人、父、習翁、學を好む、子迪年十七、使して江戸に來り、物徂徠に師事す、居ること三年にして徂徠歿す、則社友と相劇切す、板美仲を攜えて郷に歸る、日に切劇に資す、之れを久しふして學大に進む、再、江戸に來り、門を開き徒に授く、晚に出雲侯に仕へ、邦政を與り聞く、子迪、莊重嚴毅、師道卓然たり、列侯、教を請ふ者あらば、輒ち先づ己を待するの儀を議し、而して後敢て往く、生平篤く師說を信ず、力を畢して其遺著を校刻す、高足の弟子と雖、及ばざる所なり。

原善公道曰、瀟水、經義を以て任と爲す、頗、春臺の風あり、熊耳の長技は文章に在り、殆んど南郭を追ふ、而して交相善し、熊耳謂つて久要、兄弟の誼ありと爲す。

和知棟卿卷四十八

字は子蓼、東郊と號す、九郎左衛門と稱す、長門の人、

七世祖信濃守治郷、事毛利氏、爾後世爲其臣、子蓼二歳而喪父、爲祖母所養、十一歳擢爲世子侍御、在東都九年、世子卒、歸國、心喪三年、享保庚戌爲武庫監、累歷劇職、賢勞不忘、侯嘉其勤敏、數加祿及賜金或衣物、晚年患麻家居、而每有大事輒召問焉、自幼好學、天才俊逸、初山縣周南侍讀、世子、子蓼亦從學焉、一時儕輩皆推服、明和乙酉卒、年六十三、所著青郊集行于世。

物變松茂卿曰、和生才稟諸天、其詩有風翔千仞之勢。

山根清子濯曰、棟卿幼岐嶷穎敏、僅過髻齡、侍祐巖世子側、弱冠既試、吏事爾來出

其七世の祖、信濃守治卿、毛利氏に事ふ、爾後世、其臣と爲る、子蓼、二歳にして父を喪ひ、祖母に養はる、十一歳、擢んでられて世子の侍御と爲る、東都に在ること九年、世子卒す、國に歸り心喪三年、享保庚戌、武庫の監と爲る、累りに劇職を歴、賢勞、怠らず、侯、其勤敏を嘉みし、數、祿を加へ、及び金或は衣物を賜ふ、晚年、麻を患ひて、家居す、而して大事ある毎に、輒ち召して問はる、幼より學を好み、天才俊逸、初、山縣周南、世子に侍讀たり、子蓼も亦從學す、一時、儕輩皆推服す、明和乙酉卒す、年六十三、著はす所、青郊集世に行はる。

物變松茂卿曰、和生の才、諸を天に稟く、其詩、鳳千仞に翔るの勢あり、

山根清子濯曰、棟卿幼にして岐嶷穎敏、僅に髻齡を過ぎて、祐巖世子の側に侍す、弱冠既に吏事に試みら

入樞官劇職、惡能得有問奇詰難之日也、然性之所好、官暇手不廢卷、從吾周南先生、切劇復古之業、若夫遇境觸興、則新篇奇作、動語驚人、而立志高抗、文者西漢已上、詩亦不下開天、文章燦然、既成五色、奈古屋、江忠大夏曰、青郊少小出仕、雖不違寧處也、婆娑乎術藝之場、逍遙乎翰墨之林、是以其文必奇、其詩必麗、

瀧長愷彌八曰、子慕詩、摸擬滄溟、古詩歌行律絕、無不具體、晚年老蒼、頗似弇州、文則學滄溟、酷肖焉、徂徠先生覽其少年之作、歎稱以爲海內才哉、韓客亦嘗誦其古詩歌行、大加賞稱、吾黨之士、無不羨其天縱者、而自少奔走仕途、職事鞅掌、不得博

四二  
る、爾來樞官劇職に出入す、惡を能く奇を問ひ詰難するの日あるを得んや、然れども性の好む所、官暇手、卷を廢せず、吾が周南先生に從ひ、復古の業を切劇す、若し夫れ境に遇ひ興に觸るれば、則新篇奇作、動もすれば、語、人を驚かす、而して志を立つる高抗、文は西漢已上、詩も亦開天を下らず、文章燦然として、既に五色を成す。

奈古屋以忠大夏曰、青郊少小にして、出仕し、寧處に違あらずと雖、術藝の場に婆娑し、翰墨の林に逍遙す是を以て其文は必奇、其詩は必麗

瀧長愷彌八曰、子慕の詩、滄溟を摸擬す、古詩歌行律絶體を具へざるは無し、晚年老蒼、頗弇州に似たり、文は則滄溟を學び、酷肖す、徂徠先生、其少年の作を覽、歎稱して以て海内の才なるかなと爲せり、韓客も嘗て其古詩歌行を誦し、大に賞稱を加ふ、吾黨の士、其天縱の才を羨まざる者無し、而して少より仕途に奔走し、職事鞅掌、博覽精究、以て其の才と力とを竭すことを得ず、抑、命なるか、假令、天、其餘力を假し、少し

覽精究以竭其才之力、抑命乎、假令天假其餘力得小展其志、則輔轍國光、主盟吾黨、接武周南者、非君而誰乎、惜乎哉。

錦天山房詩話、青郊天才縱逸、其古詩歌行頗爲豪放、如祇王歌二百韻、可謂富瞻罕、觀其比矣、然韻法粗略、段解不明、近體亦多失檢處、率如此類、皆屬芟去、蓋才有餘而學不足、信如瀧山諸子之言也、若加以細心精究、則其所造豈遽止于此哉。

### 山根清

字子濯、號華陽、長門人、少補國學弟子員、後官京師、從伊藤東涯受業三年而歸、會山縣周南自東都至、乃就而學、自都講、擢文學、累遷學館祭酒、病免家居、侯時時召

く其志を展ぶるを得ば、則國光を輔轍し、吾黨に主盟たり、武を周南に接する者、君に非ずして誰ぞや、惜いかな。

錦天山房詩話、青郊、天才縱逸、其古詩歌行、頗豪放たり、祇王歌二百韻の如き、富瞻其比を觀るに罕れなりと謂ふ可し、然るに韻法粗略、段解明かならず、近體も亦檢を失ふ處多し、率ね此の如きは、皆芟去に屬す、蓋、才餘り有りて學足らず、信に瀧山諸子の言の如し、若し加ふるに細心精究を以てせば、其造る所豈遽に此に止まらんや。

### 山根清

字は子濯、華陽と號す、長門の人、少ふして國學弟子員に補す、後京師に官す、伊藤東涯に従ひ、業を受け、三年にして歸る、會、山縣周南、東都より至る、乃就いて學び、都講より文學に擢んでられ、累りに學館祭酒に遷る、病んで免し家居す、侯、時々召對顧問す、著す所、華陽文集あり。

對願問、所著有華陽文集。

山根道晉

字世祿、長門人、初號龍山、後更濟洲、家本水軍、幼而孤、童齠襲其職、好學勵精、華陽以同族故、養爲嗣、藩法別仕者、不得脫其籍、而輒他適、長門侯以其才之優、許之、蓋特命也、後稟學館、學於山縣周南、業益進、擢都講、從周南抵東都、見服南郭、以渥洼駒稱焉、性多病、早歿、所著有濟洲遺稿。

白石榮

字子春、平戶人、受業於江南溟、既歸、爲藩文學、會韓人來聘、平戶侯館之于伊岐、榮與彼學士秋月良醫慕庵、議論唱酬、慕庵媿己伎不如、假他事中傷、爲之錮於官矣。

山根道晉

字は世祿、長門の人、初め龍山と號す、後濟洲と更む家、本と水軍、幼にして孤なり、童亂にして其職を襲ぐ、學を好み精を勵ます、華陽、同族の故を以て養ふて嗣と爲す、藩の法に別仕の者は、其籍を脱して輒ち他に適くことを得ず、長門侯、其才の優なるを以て之れを許さず、蓋特命なり、後、學館に稟し、山縣周南に學ぶ、業益進み、都講に擢んでられ、周南に従ひ東都に抵り、服南郭を見、渥洼駒を以て稱せらる、性多病、早く歿す、著す所、濟洲遺稿あり。

白石榮

字は子春、平戶の人、業を江南溟に受く、既に歸り、藩の文學と爲る、會、韓人來聘す、平戶侯、之れを伊岐に館す、榮、彼の學士秋月良醫慕庵と議論唱酬す、慕庵己れの伎の如かざるを媿ち、他事を假りて中傷す之れが爲めに官に錮せらる、著す所、桃花洞遺稿あり。

所著有桃花洞遺稿。

龜井魯道載曰、子春、曠世之才、博以學問、其達足以從政、其嚴足以師人、而僅壯而沒、其學專修古統、一孔老而歸本治國、故務於有爲、講禮東武、肄樂長崎、取學制于長門、觀刑政于南肥、遜志時敏、斯以勤矣、冀異日得以施行焉也、加之自武備曲藝、以至醫藥食貨之末、苟有可以利社稷者、思遺利、必拾闕典、必補。

平賀義憲

字文成、伊勢人、仕桑名侯、所著鳳臺小稿、行于世。

錦天山房詩話、江忠圃曰、文成之詩、結撰全步驟、唐人之域、但雕績未悉、衆體未備、

錦天山房詩話下冊

龜井魯道載曰、子春、曠世之才、博以學問、以て其達以て政に從ふに足り、其嚴以て人に師たるに足れり、而して僅に壯にして没す、其學、専ら古を修む、孔老を統一して、治國に歸本す、故に有爲に務む、禮を東武に講じ、樂を長崎に肄ひ、學制を長門に取り、刑政を南肥に觀る、志を遜し、時に敏くす、斯に以て勤めたり、異日以て施行し得ることを冀ふなり、之れに加ふるに、武備曲藝より、以て醫藥食貨の末に至るまで、苟、以て社稷を利すべき者あらば、遺利を思へば、拾ひ、闕典は必補ふ。

平賀義憲

字は文成、伊勢の人、桑名侯に仕ふ、著す所鳳臺小稿、世に行はる。

錦天山房詩話、江忠圃曰、文成の詩、結撰全く唐人の域に步驟す、但、雕績未だ悉さず、衆體未だ備はらず、然れども斐然たる美錦、觀るべき者あり、之れを裁する



然斐然美錦有可觀者、至所以裁之、則姑待年云爾、按文成之著鳳臺小稿、年尙弱冠、故南溟之言如此、今閱其集、近體雖卑、弱乏變化、尙有可觀者、至古體卑卑不足採矣。

守屋煥明 卷第四十九

字秀緯、號峨眉、業醫、仕大垣侯。

平ま中 子和曰、守屋秀緯、一日千里不可追。

湯淺元禎

字之祥、號常山、稱新兵衛、備前人、父名英、字子傑、幼爲烈公普御、稍長爲使番、數使他邦、無辱君命、後爲目付、備前尤重此職、自祭祀、廷禮、蒐狩、武備、獄訟、賦稅、百爾政

所以至りては、則姑く年を待つと爾か云ふと、按ずるに、文成の鳳臺小稿を著はすや、年尙弱冠、故に南溟の言此の如し、今、其集を閱するに、近體は卑弱にして變化に乏しと雖、尙、觀るべき者あり、古體に至りては、卑々採るに足らず。

守屋煥明卷四十九

字は秀緯、峨眉と號す、醫を業とし、大垣侯に仕ふ。

平ま中 子和曰、守屋秀緯、一日千里、追ふべからず。

湯淺元禎

字は之祥、常山と號す、新兵衛と稱す、備前の人、父名は英、字は子傑、幼にして烈公の普御と爲り、稍長じて使番と爲り、數、他邦に使して、君命を辱むる無し、後、目付と爲る、備前、尤此職を重んじ、祭祀、廷禮、蒐狩、武備、獄訟、賦稅より、百爾の政事まで、預り聞かざるは無し、子傑職に在ること十八年、獄訟を平にし

事、無不預聞、子傑在職十八年、平獄訟、寬囚罪、推賢才、舉淹滯、專修先侯遺法、凡有建言、苟務變更者、一切抑止曰、不有先君令德、昭明者乎、何用此才、謂自喜者爲、自記國事故事典刑數十卷、人皆取法、爲人恭儉、家事整治、性孝、每誦先人遺訓、未嘗不泣下、自壯至老、無聲色之好、生平輕財、好施、在職清白、恪勤、至讓、事常正色、辯論退而不伐、其功告老後、凡六年、閉門不復一出、手種花卉、或圍棋以娛、元文元年卒、年八十三、之祥幼受庭訓、穎悟特達、年二十四、奉父命東遊江戶、受業服南郭、博覽不倦、無幾還鄉、後八年嗣家、受祿四百石、後來江戶、與太宰春臺及井上蘭臺、松崎

囚罪を寛ふし、賢才を推し、淹滯を舉げ、専ら先侯の遺法を修む、凡そ建言して苟も變更を務むる者あらば、一切抑止して曰、先君の令徳昭明なる者あらざるか、何ぞ此才、謂自ら喜ぶ者を用ふることをせんと、自ら國家の故事典刑數十卷を記す、人皆法を取る人、と爲り恭儉、家事整治、性孝にして、先人の遺訓を誦する毎に、未だ嘗て泣下らざるばあらず、壯より老に至るまで、聲色の好なし、生平、財を輕んじ、施を好み、職に在りて、清白恪勤、事を讓するに至りては、常に色を正して辯論す、退いて其功に伐らず、老を告げて後、凡そ六年、門を閉ぢて復一たびも出でず、手づから花卉を種ふ、或は棋を圍み、以て娛む、元文元年卒す、年八十三、之祥、幼にして庭訓を受け、穎悟特達、年二十四、父の命を奉じ、東、江戶に遊び、業を服南郭に受く、博覽倦まず、幾も無くして郷に還る、後八年、家を嗣ぐ、祿四百石を受く、後、江戶に來り、太宰春臺及び井上蘭臺、松崎觀海、諸名士と交を結び、一時嘖々として輿稱あり、性、至孝、父を喪ひ、哀毀禮に過ぎ、喪、以て襚と爲し、三年脱せず、每且往き、其の墓を拜し、慟哭して歸る、二十五月にして止む、母を喪ふ亦然り、官

觀海諸名士結交、一時嘖嘖有與稱、性至孝、喪父、哀毀過禮、衰以爲褌、三年不脫、每旦往拜其墓、慟哭而歸、二十五月而止、喪母亦然、在官方正特立、忘身殉國、數歷要職、其所爲賑貧救窮、詰罷舉、滯或使、認者自恥無言、或焚契券以庇覆衆人、危言刺譏、無所避、終以此被貶黜、從是杜門謝客、著書自娛、雅好武、明於兵法、年老、尙一舞鎗揮刀、每戒子弟曰、苟爲武士者、寧廢文章、勿廢武事、天明年卒、年七十四、所著有常山樓集、常山紀談、常山筆餘、左傳解、東行筆記、西歸日錄、文會雜記等十數種、原善公道曰、常山嘗奉侯命赴讀之丸龜、海上風濤驟起、舟將覆沒、衆皆無生色、常

に在りて、方正特立、身を忘れて國に徇ふ、數、要職を歴、其爲す所、貧に賑はし窮を救ひ、惡を詰り滯を舉ぐ、或は訟者をして、自ら恥ぢて言なからしむ、或は契券を焚き以て衆人を庇覆す、危言刺譏避くる所なし、終に此れを以て貶黜せらる、是より門を杜ぎ客を謝し、書を著し自ら娛む、雅と武を好み、兵法に明かなり、年老いて、尙、一に鎗を舞はし刀を揮ふ、毎に子弟を戒めて曰、苟、武士たる者、寧ろ文章を廢するも、武事を廢する勿れと、天明年卒す、年七十四、著す所、常山樓集、常山紀談、常山筆餘、左傳解、東行筆記、西歸日錄、文會雜記等十數種あり。

原善公道曰、常山嘗て侯の命を奉じ讀の丸龜に赴く海上に風濤驟に起り、舟將に覆沒せんとす、衆、皆、生

山神色自若、朗吟曰、南溟奉使使臣、棧直破長風萬里波、忽值怒濤似奔馬、起提雄劍叱龍鼉、其豪氣如此。

錦天山房詩話、常山姿制清剛、風裁英整、寰桂之性到老愈辣、可謂豪傑之士也、其詩雄放橫厲、有燕趙悲歌之風、殆如其爲人矣。

富逸卷五十

字日休、號富春叟、又號桐江、原田中氏、名省吾、字宗魯、號雪華道人、陸奧人、少好擊劍、後折節讀書、學于物徂徠、以儒仕、甲侯柳澤吉保、一旦辭去、徧遊名山、晚隱居攝之池田、以吟咏自娛、年七十四卒、著有樵漁餘適十五卷、門人木定堅子剛輯錄傳。

色なし、常山神色自若として、朗吟して曰、南溟使を奉ず使臣の棧、直に長風萬里の波を破る、忽、怒濤の奔馬に似たるに値ふ、起ちて雄劍を提けて龍鼉を叱すと、其豪氣此の如し。

錦天山房詩話、常山姿制清剛、風裁英整、寰桂の性老に到りて愈、辣、豪傑の士と謂ふ可し、其詩雄放橫厲、燕趙悲歌の風あり、殆んど其人と爲りの如し。

富逸卷五十

字は日休、富春叟と號す、又桐江と號す、原、田中氏、省吾と名づく、字は宗魯、雪華道人と號す、陸奥の人、少にして擊劍を好み、後、節を折りて書を讀み、物徂徠に學ぶ、儒を以て甲侯柳澤吉保に仕へ、一旦辭し去り、徧く名山に遊ぶ、晩に攝の池田に隱居し、吟咏を以て自ら娛む、年七十四にして卒す、著に樵漁餘適十五卷あり、門人木定堅子剛、輯錄して世に傳ふ。

于世。

錦天山房詩話、日休、即徂徠集中所稱省吾者也、其仕甲侯時、有嬖臣、佞諛陰賊、流毒上下、省吾乘間刺之、匿徂徠家、安藤東野、太宰春臺、細井廣澤等、護送出江都、因變姓名、蓋忼慨尙氣節之人、其詩亦頗有氣。

田良暢

字子舒、號蘭陵、田中氏、稱武助、江戸人、少孤、爲叔父富春叟所養、歲十二三、常侍側、觀叟所業、默有所記、叟時試之、應對如流、叟奇之、使受業於物徂徠、萬護社六年、日夜憤厲研究經義、其所論著、一機軸於已、不敢依先修成說、與板帆丘、菅麟嶼、岡嶽

錦天山房詩話、日休は、即、徂徠集中に稱する所の省吾といふ者なり、其甲侯に仕ふる時、嬖臣あり、佞諛陰賊、毒を上下に流す、省吾、間に乘じて之れを刺し、徂徠の家に匿る、安藤東野、太宰春臺、細井廣澤等、護送して江戸を出でしめ、因て姓名を變ず、蓋、忼慨にして氣節を尙ぶの人、其詩も亦頗る氣あり。

田良暢

字は子舒、蘭陵と號す、田中氏、武助と稱す、江戸の人、少にして孤なり、叔父富春叟に養はる、歳十二三にして常に側に侍し、叟の所業を觀、默して記する所あり、叟、時に之れを試むるに、應對流るゝが如し、叟之れを奇とし、業を物徂徠に受けしむ、護社に寓すること六年、日夜憤厲し、經義を研究す、其論ずる所は、一機軸を己に著し、敢て先修に依りて説を成さず、板帆丘、菅麟嶼、岡嶽洲と名を齊ふす、人稱して護社妙年の四傑と爲す、徂徠常に代りて經を諸侯邸に説かしむ、

洲齊名、人稱爲護社妙年四傑、徂徠常使代說、經於諸侯邸嘗謂人曰、吾死後羽翼我業者、太宰生、服部生耶、生前能知我心者、莫如三浦生、田中生、後僑居白山、講說爲業、氣古行高、磨礪鑿切、期以海內之名、好飲酒、鯨吸盡斗、享保十九年卒、年三十六、先是安藤東野、亦居白山、亦早歿、鄉人情之、語曰、文史勞東野、豪飲病蘭陵、著有謀野集、刪考、修辭考、蘭陵遺稿。

### 餘承裕

字子綽、號熊耳、稱忠太夫、大内氏、陸奥人、自幼嗜學、年十七、負笈來江戶、就秋子帥問業、因介子帥謁物徂徠、既而至京、見東涯、遂赴長崎、留講業、始得李滄溟集、讀而

嘗て人に謂つて曰、吾が死せる後、我業を羽翼する者は、太宰生、服部生か、生前に能く我心を知る者は、三浦生、田中生に如くなしと、後、白山に僑居し、講説して業と爲す、氣古く行高し、磨礪鑿切するに海内の名を以てす、好んで酒を飲み、鯨吸斗を盡す、享保十九年卒す、年三十六、是より先き安藤東野も、亦白山に居り、亦早く歿す、郷人之れを惜み、語して曰く、文史東野を勞し、豪飲蘭陵を病ましむ」と、著に謀野集、刪考、修辭考、蘭陵遺稿あり。

### 餘承裕

字は子綽、熊耳と號し、忠太夫と稱す、大内氏、陸奥の人、幼より學を嗜み、年十七、笈を負ひ、江戶に來り、秋子帥に就きて業を問ふ、因て子帥を介し物徂徠に謁す、既にして京に至り東涯に見ゆ、遂に長崎に赴き留りて業を講ず、始めて李滄溟集を得て、讀みて之れを喜び、即自ら臚寫し、日夜誦讀す、居ること十年、去

喜之、即自寫牘、日夜誦讀焉、居十年、去復來、江戸、教授于淺草、於是名聲藉甚、唐津侯、辟爲文學、素慕徂徠之學、尤工脩古文辭、時人目曰、當今于鱗、服南郭、屢稱曰、熊耳於文章、刻意于滄溟、故殆肖之、方今秉筆擬李者、皆不能及也。

原善公道曰、熊耳於南郭、雖不取贊、每承其督、文章尤得南郭刪潤而長進、故其集中於南郭、必推尊之、以先生稱之。

錦天山房詩話、熊耳刻意于鱗、摹其色相、按其音節、頗得其摹仿形似、此時護社諸子、凋謝過半、故其聲名炫燿、推爲護園後勁、亦云幸矣。

りて復た江戸に來り、淺草に教授す、是に於いて、名聲藉甚なり、唐津侯辟して文學と爲す、素より徂徠の學を慕ひ、尤工みに古文辭を脩む、時人目して當今の于鱗と曰ふ、服南郭、屢稱して曰、熊耳、文章に於いて滄溟に刻意す、故に殆んど之れに肖たり、方今筆を乘りて李に擬する者、皆及ぶ能はざるなり。

原善公道曰、熊耳、南郭に於いて贊を取らずと雖、毎に其督を承く、文章尤、南郭の刪潤を得て長進す、故に其集中、南郭に於て必之れを推尊し、先生を以て之れを稱す。

錦天山房詩話、熊耳、于鱗に刻意し、其色相を摸す、其音節を按じ、頗、其摹仿形似を得、此の時、護社諸子、凋謝半に過ぐ、故に其聲名炫燿し、推して、護園の後勁と爲す、亦云に幸なり。

字士新、本姓宇野、稱三平、號明霞軒、近江人、父安治、屬角倉與市、司運漕、鼎少好學、淡於榮利、始受章句於向井滄洲、後無所師承、與弟子朗、奮激讀書、杜門掃軌、切磋甚勤、足不識戶闕者、十有餘年、於是業大成、遂持海內文柄、年四十八病沒、所著明霞遺稿、論語考、姓氏解等、行於世。

服元喬子遷曰、二字固難得之才也。

石川正恆伯卿曰、字子性介而氣英、惟其介也、學是以精覈、惟其英也、說是以瑰偉、兼此二物、濟之以博洽、出之以雅馴、與昌運爭衡、則其辭也、惜哉、○按、辭也、下天不之假、年、論著有緒不遂矣、似有脫字、

餘承裕子綽曰、字氏兄弟乘大業復古之

字は士新、本姓は宇野、三平と稱す、明霞軒と號す、近江の人、父、安治、角倉與市に屬し、運漕を司る、鼎少にして學を好み、榮利に淡し、始め章句を向井滄洲に受く、後師承する所なし、弟子朗と奮激して書を読み門を杜ち軌を掃ひ、切磋甚勤む、足、戸闕を踏えずる者、十有餘年、是に於いて業大に成る、遂に海内の文柄を持す、年四十八、病んで沒す、著す所明霞遺稿、論語考、姓氏解等世に行はる。

服元喬子遷曰、二字固より得難き之才なり。

石川正恆伯卿曰、字子性介にして氣英、惟其れ介なり、學是を以て精覈なり、惟其れ英なり、說是を以て瑰偉なり、此二物を兼ね、之れを濟すに博洽を以てし、之れを出だすに雅馴を以てす、昌運と衡を爭ふ則其辭や、惜いかな、天之れに年を假さず、論著緒ありて遂けず、

餘承裕子綽曰、字氏兄弟、大業復古の運に乗じ、雁行



運、靡行而漸風靡一時、以雪戰國五百年斯文之抑鬱、則亦可謂一振也、

江村縵君錫曰、士新詩、紀律精詳、一字不苟下、遂能以此建旗鼓於一方、蓋亦詞壇雄、加之緊苦力學、志節凜凜、聞其風者、庶可小興起、惜乎資性褊窄、規模甚隘、其詩亦得之苦思力索、是以規度合而變化不足、聲調勻而神氣離、

原善公道曰、士新撰上杉謙信傳、雖偶然、其立志創業、士新有髣髴之者、夫謙信生戰國之際、自少不御內、天資驍勇、兵勢大奮、將以撥保平以降之亂、更立霸業、而年四十九、功不成卒、然世皆知其力不必滅、信長秀吉、士新生穢業之世、未嘗置妻妾、

して漸く一時を風靡し、以て戰國五百年斯文の抑鬱を雪ぐ、則亦一振と謂ふべきなり、

江村縵君錫曰、士新の詩、紀律精詳、一字苟も下さず、遂に能く此を以て旗鼓を一方に建つ、蓋亦、詞壇の雄なり、之れに加ふるに緊苦力學、志節凜々たり、其風を聞く者、庶くば小しく興起すべし、惜いかな資性褊窄、規模甚隘し、其詩亦之れを苦思力索に得、是を以て規度合して變化足らず、聲調勻ふて神氣離る、

原善公道曰、士新、上杉謙信の傳を撰す、偶然と雖、其立志創業、士新、之れに髣髴する者あり、夫れ謙信は戰國の際に生れ、少きより内を御せず、天資驍勇、兵勢大に奮ふ、將に以て保平以降の亂を撥し、更に霸業を立てんとす、而して年四十九、功ならずして卒す、然るに世皆其力の必しも信長秀吉に滅せざるを知る、士新、穢業の世に生れ、未だ嘗て妻妾を置かず、志厚く氣邁、強學人に越ゆ、將に以て漢魏以來の諸説を統

志厚氣邁、強學越人、將以統漢魏以來諸說、別立一家、而年四十八、志不酬沒、然世皆知其學不必讓仁齋徂徠。

錦天山房詩話、明霞詩雖乏華彩、句格老成、絕無鉛粉之飾、亦自一時之傑。

### 字鑒

字士茹、改字士朗、稱兵介、士新同母弟、與士新友、愛篤至、其學充實、不相讓、世稱平安二字先生、嘗來江戶、入護園之社、與周南南、郭金華輩交、無何而歸于京、年僅三十一、先士新卒、人皆惜焉、士新序遺稿云、余與士朗同學者、十餘年、而自顧所成、曾未能如士朗、士朗誠才哉、且余以疾、故省思慮、一精神不操、觸者久之、則其先、余嗣

べ、別に一家を立てんとす、而して年四十八、志酬ひずして没す、然れども、世、皆其學の必しも仁齋徂徠に譲らざるを知る。

錦天山房詩話、明霞の詩華彩に乏しと雖、句格老成、絶えて鉛粉の飾なし、亦自ら一時の傑。

### 字鑒

字は士茹、字を士朗と改む、兵介と稱す、士新の同母弟、士新と友愛篤く至る、其學、充實、相譲らず、世に平安の二字先生と稱す、嘗て江戶に來り護園の社に入り、周南南郭金華の輩と交り、何もなくて京に歸る、年僅に三十一、士新に先だちて卒す、人皆惜む、士新、遺稿に序して云ふ、余、士朗と同學する者十餘年、而して自ら顧ふに、成る所、曾ち未だ士朗の如くなる能はず、士朗誠に才なるかな、且、余、疾を以ての故に、思慮を省き精神を一にし、軀を操らざる者之れを久ふす、則、其余に先だちて翻々たるは固より宜し、而して宜く先だつべからざる者の先だつは獨何ぞや。

翺固宜而不宜先者之先、獨何歟。

芥煥彦章曰、絕句之義、迄無定義、謂截近體首尾、或中二聯、恐不足憑、吾友宇士朗謂絕句者、謂一句一絕、律詩句句聯排、絕句不然、故絕句對律詩之稱耳、此說明白可據、古人未曾言及。

錦天山房詩話、士朗詩不多傳、五絕清潤、足媲美伯氏。

澤村維顯卷五十二

宇伯揚、號琴所、稱宮內、其先伊賀人、平內左衛門家長之裔、山城守某爲織田氏所滅、遺族四散、有才八者、事細川侯、以勇聞、有全道者、事彥根侯、關原之役、獲島津豐前守、東照大君召見、賜佩刀黃金、增祿至

芥煥彦章曰、絕句の義、迄に定義なし、謂へらく、近體の首尾、或は中二聯を截すと、恐らくは憑るに足らず、吾友、宇士朗謂ふ、絶句とは、一句一絶を謂ふ、律詩は句句聯排、絶句は然らず、故に絶句は律詩に對するの稱のみと、此の説、明白據る可し、古人未だ曾て言及せず。

錦天山房詩話、士朗の詩多く傳はらず、五絶清潤、美を伯氏に媲美に足れり。

澤村維顯卷五十二

宇は伯揚、琴所と號す、宮内と稱す、其先は伊賀の人、平内左衛門家長の裔、山城守某、織田氏に滅ぼさる、遺族四散す、才八といふ者あり、細川侯に事ふ、勇を以て聞ふ、全道といふ者あり、彥根侯に仕ふ、關原の役、島津豊前の守を獲たり、東照大君召見し、佩刀黄金を賜ひ、祿を増して千石に至る、子、之清、又祿を増して二千石に至る、子孫祿を襲ぐ、祖之子に二子あり、少

千石、子之清又增祿至二千石、子孫襲祿、祖之辰有二子、少曰之章、號廓山、伯揚卽其長子也、年十四以蔭補警御、年十七罹心疾而辭仕、藩法嘗有心疾者、削籍不得復仕、於是絕意仕官、慨然立志、閉戶讀書、既而疾亦瘳、遂赴京、研究理學、盡通其說、舅族石井雄峯、奇愛其才、勸再遊京、遂從伊藤東涯學、居其塾一年而歸、自是盡棄舊習、專攻古義、及後得物徂徠之書、讀之、確信其說、日夕研磨、築松雨亭於松寺村、聚徒講經、從遊日多、其學以經濟爲主、修己爲本、彥根侯使人勸再起、固辭不應、然愛國之志未嘗以出處貳之、嘗著桓公問對富強錄、皆救時要務、識者稱之、又精兵

歸天山房時話下冊

を之章と曰ふ、廓山と號す、伯揚は卽ち其長子なり、年十四、蔭を以て警御に補す、年十七、心疾に罹りて仕を辭す、藩法に營て心疾ある者は、籍を削りて復仕ふることを得ず、是に於て志を仕官に絶つ、慨然として志を立て、戸を閉ぢて書を読む、既にして疾亦瘳ゆ、遂に京に赴き理學を研究し、盡く其說に通ず、舅族、石井雄峯、其才を奇愛し、再び京に遊ばんことを勸む、遂に伊藤東涯に從ひて學ぶ、其塾に居ること一年にして歸る、是より盡く舊習を棄て、専ら古義を攻む、後、物徂徠の書を得るに及んで、之れを讀み、其說を確信す、日夕研磨し、松雨亭を松寺村に築き、徒を聚めて經を講ず、從遊日に多し、其學、經濟を以て主と爲す、己を修むるを本と爲す、彥根侯、人をして再起を勸めしむ、固辭して應ぜず、然るに愛國の志、未だ嘗て出處を以て之れを貳にせず、嘗て桓公問對富強錄を著す、皆、救時の要務なり、識者之れを稱す、又、兵法に精しく、八陣本義二卷あり、發明する所多し、内行修潔、其妻を喪ひしより、復た婦人を近づけず、又好んで貧窮を賑恤し、家の有無を問はず、儻石屢、空しきも、晏如たり、自ら言ふ吾固より一善狀なし、唯、貸色

法有八陣本義二卷、多所發明、內行修潔、自喪其妻、不復近婦人、又好賑恤貧窮、不問家有無、儲石屢空、晏如也、自言吾固無一善狀、唯貨色二者、未有對人不可言者也、元文四年正月九日卒、年五十四、所著有井家新書、軍國要覽、軍士要覽、彥陽和歌集、閑窓和歌集、琴所稿刪等。

宇鼎士新曰、琴所之詩、瀟瀟多唐調、高者初盛、下者亦中唐、未嘗墮於晚唐、若宋、佳哉其文、立意雅正、造語明白、質而不野、暢而不冗、文之善者。

野公、養子賤曰、琴所先生、嘗遊于洛、受業於紹述先生之門、及至晚年、讀徂徠先生之書、而甚悅之、深憫世之君子沈淪舊習、

の二者、未だ人に對して言ふべからざる者あらざるなりと、元文四年正月九日卒す、年五十四、著す所、井家新書、軍國要覽、軍士要覽、彥陽和歌集、閑窓和歌集、琴所稿刪等あり。

宇鼎士新曰、琴所の詩、瀟々として唐調多く、高き者は初盛、下き者も亦中唐、未だ嘗て晚唐若くば宋に墮ちず、佳なるかな其文、立意雅正、造語明白、質にして野ならず、暢にして冗ならず、文の善なる者なり。

野公養子賤曰、琴所先生、嘗て洛に遊び、業を紹述先生の門に受く、晩年に至るに及んで徂徠先生の書を讀みて、甚之れを悦ぶ、深く世の君子、舊習に沈淪して、自ら出ること能はざるを憫み、居恒一先生の道を

而不能自出也。居恆稱二先生之道以誨人。諄諄弗倦而世猶且不之能信。明月之璧、夜光之珠、動輒按劍以視焉。先生乃退與一二同志修其所學、講習日勤、研究月精、十數年而後其化之所及、士大夫乃稍稍霽其風。於是吾伊估畢、比屋相聞、先生之業不亦偉乎。

錦天山房詩話、琴所有志之士、其詩淡而有味、雖奉護園、然與夫一味餽釘摸擬者、異撰矣。

### 三浦晉

字安貞、號梅園、又號攀山、又號洞仙、豐後杵築人、父義一、醫、安貞幼穎敏、從綾部綱齋而學、年十七如豐前中津遊、藤貞一

錦天山房詩話下冊

稱し、以て人を誨へて諄々として、倦まず、而して世猶且つ之れを信ずる能はず、明月の璧、夜光の珠、動もすれば輒ち劍を按じて以て視る、先生乃退いて、一二の同志と、其學ぶ所を修め、講習日に勤め、研究月に精し、十數年にして後、其化の及ぶ所、士大夫乃稍稍其風に霽ふ、是に於て、吾伊估畢、比屋相聞ゆ、先生の業亦偉ならずや。

錦天山房詩話、琴所は有志の士、其詩、淡にして味あり、護園を奉ずと雖、然も夫の一味餽釘摸擬する者と撰を異にせり。

### 三浦晉

字は安貞、梅園と號す、又攀山と號す、又洞仙と號す、豐後杵築の人、父義一、醫を業とす、安貞、幼にして穎敏、綾部綱齋に従ふて學ぶ、年十七、豐前中津に如き、藤貞一の門に遊ぶ、俊才を以て稱せらる、恆に天地造

之門、以俊才稱、恆欲窮天地造化之理、思之不得、至於忘寢食、年三十、始知天地有條理、乃謂曰、天地唯是一氣物也、氣外無物、物外無氣、一條妙理、貫徹宇宙、玄界無際、神化不測也、自是志益堅、學彌進、著玄語十餘萬言、論陰陽消長之度、氣物融化之道、又著贅語、盡其餘蘊、自謂二語未及性命之理、乃作敢語、以述先聖之道、謂之梅園三語、嘗曰、既有玄、故謂之贅、雖然、既有天地、玄亦贅也、已矣、自奉節儉、有贏必施、又釀米錢、歡歲出貸、豐年入息、由是免飢寒者多矣、孝子順孫、節婦忠奴、湮沒無聞者、安貞爲稱揚之、或告之于官、使得褒賜、或募之鄉邑、以爲救助、又自餽米鹽、日

六〇

化の理を窮めんと欲し、之れを思ふて得ず、寢食を忘るゝに至る、年三十、始めて天地あるを知る、乃謂つて曰、天地は唯々是れ一氣の物なり、氣外に物なく、物外に氣なし、一條の妙理、宇宙に貫徹し、玄界際なく、神化測られずと、是より志益堅く、學彌進む、玄語十餘萬言を著し、陰陽消長の度、氣物融化の道を論ず、又、贅語を著し、其餘蘊を盡くす、自ら謂ふ二語未だ性命の理に及ばずと、乃、敢語を作り、以て先聖の道を述ぶ、之れを梅園三語と謂ふ、嘗て曰、既に立あり故に之れを贅と謂ふ、然りと雖、既に天地あり、玄も亦贅のみと、自ら奉すること節儉、贏あれば必施す、又米錢を釀し、歡歲に出貸し、豐年に息を入れしむ、是に由りて飢寒を免るゝ者多し、孝子順孫、節婦忠奴、湮沒聞ゆるなき者、安貞爲に之れを稱揚す、或は之れを官に告げ、褒賜を得しめ、或は之れを郷邑に募り、以て救助を爲す、又自ら米鹽を餽り、日に月に相給す、閭閻の子弟、小善あれば必褒む、小惡あれば必誡む、是を以て人皆其嚴を憚り、其惠に懐く、嘗て十數村民、連合騒擾し、將に城府に入らんとするあり、安貞之れを塗に要し、解喻再三、事乃平く、又神祝と寺僧と訟

月相給、閩閩子弟、有小善、必褒焉、有小惡、必誡焉、是以人皆憚其嚴、懷其惠、嘗有十數村民、連合騷擾、將入城府、安貞要諸塗、解諭再三、事乃平、又神祝與寺僧訟、結黨相仇、縣吏不能制、安貞又居間解之、自是鄉邑爭訟多就取決、夙尙嘉遜、諸侯累辟、皆辭、天明癸卯、杵築侯新立、召見安貞、待以殊禮、每進見、輒諮政事、眷遇益優、事親孝、親歿、其墓在舍南數百步、壯歲拜謁者日三、到老日二、以爲常、雖寒暑風雨、未嘗廢也、寬政元年卒、年六十七歲、安貞新爲一家言、自稱條理學、旁能詩善書、所著三語之外、有詩轍、寓意、梅園詩集、長子黃鶴、字修齡、起家爲郡宰、攝儒職、次子玄龜、字

え、黨を結びて相仇し、縣吏制する能はず、安貞又、間に居て之れを解く、是より郷邑争訟、多くは就いて決を取る、夙に嘉遜を尙ふ、諸侯累に辟すも皆辭す、天明癸卯、杵築侯新に立ちて、安貞を召見し、待つに殊禮を以てす、進見する毎に、輒政事を諮ひ、眷遇益優なり、親に事へて孝、親歿す、其墓は舍南數百歩に在り、壯歲には拜謁する者日に三たび、老に到りては日に二たび、以て常と爲す、寒暑風雨と雖、未だ嘗て廢せざるなり、寬政元年卒す、年六十七歲、安貞、新に一家言を爲し、自ら條理學と稱す、旁ら詩を能くし書を善くす、著す所三語の外、詩轍、寓意、梅園詩集あり、長子黃鶴、字は修齡、家より起り、郡宰と爲り、儒職を攝す、次子玄龜、字は大年。



大年。

錦天山房詩話、梅園行義卓然、自堪不朽、而留意辭藻、亦足以角逐藝苑。

### 高舜

字君乘、號陽谷、渡邊氏、本姓高階、稱忠藏、長崎人、父寬字春庵、擢爲譯士、君乘襲其職、而不喜之、從釋大潮學詩、寬延中遊平安、與諸名士交、聲價稍重、人稱爲高無二、在京六年、而歸崎、結芙蓉詩社、聲振遠邇、性豪邁、高自標置、明和三年、年四十五、患毒瘡而卒、屬纊之前、十餘日、病惱發狂、而語言發于夢寐、恍惚中者、率皆韻語成體、自傍錄之、積成小冊子、名曰病榻草、最後所作曰鐵壁城崩不作聲、孤身方壓萬精

### 高舜

錦天山房詩話、梅園行義卓然、自堪不朽、而留意辭藻、亦足以角逐藝苑。

字は君乘、陽谷と號す、渡邊氏、本姓は高階、忠藏と稱す、長崎の人、父寛字は春庵、擢んでられて、譯士と爲る、君乘、其職を襲ぐ、而して之れを喜ばず、釋大潮に從ひ、詩を學ぶ、寛延中、平安に遊び、諸名士と交り、聲價稍、重し、人稱して高無二と爲す、京に在ること、六年、而して崎に歸り、芙蓉詩社を結び、聲、遠邇に振ふ、性豪邁、高く自ら標置す、明和三年、年四十五、毒瘡を患ひて卒す、屬纊の前、十餘日、腦を病みて狂を發す、而して語言の夢寐恍惚中に發する者、率皆韻語成體を成す、傍より之を録し、積んで小冊子を成せり、名づけて病榻草と曰ふ、最後に作る所に曰、一鐵壁城崩れて聲を作さず、孤身方に壓す萬精兵、天鷲一握東方白し、耳を側つれば分明飢を助けて鳴る」と、著に蓬齋樓集、五經音義補、樂府變、詠物詩稿、瓊浦社草、陽谷

兵、天鷄一嘔、東方白、側耳分明助、凱鳴、著  
有蓬壺樓集、五經音義、補樂府變、詠物詩  
雋、瓊浦社草、陽谷詩稿。

龍公美君玉曰、陽谷結交行等諸作、典雅  
整密、高華綺縟、不在井白石服南郭之下。  
角田簡大可曰、陽谷聰明奇拔、詩學適上、  
以老杜爲標準、性豪誕、蔑視一世、龜井南  
溟少時與僧大同、攜詩乞正、陽谷吟誦一  
再、走筆塗抹曰、公等可教矣、大潮師老悖  
不知詩有法、大謾公等才子、余欲布所業  
海內、使學詩有知所據、嗚呼宇宙之大、獨  
有老杜一人、先我著鞭、其狂誕類如此。

東條耕子藏曰、陽谷著詩鈔二卷、請批評  
清人沈漁石、漁石、南京人、屢從互市商船、

歸天山房詩話下冊

詩稿あり。

龍公美君玉曰、陽谷、結交行等の諸作、典雅整密、高華  
綺縟にして、井白石、服南郭の下に在らず。

角田簡大可曰、陽谷、聰明奇拔、詩學適上、老杜を以て  
標準と爲す、性豪誕、一世を蔑視す、龜井南溟、少時僧  
大同と詩を携えて正を乞ふ、陽谷吟誦一再、筆を走り  
して塗抹して曰、公等教ふべし、大潮師老悖詩に法あ  
るを知らず、大に公等才子を誤る、余所業を海内に布  
き、詩を學ぶものに據る所を知るあらしめんと欲す、  
嗚呼宇宙の大、獨、老杜一人あり、我に先だちて鞭を著  
くと、其狂誕類むね此の如し。

東條耕子藏曰、陽谷、詩鈔二卷を著し、批評を清人沈  
漁石に請ふ、漁石は南京の人、屢、互市の商船に従ひ

六三

來於崎者也、嘗稱陽谷詩曰、我中國王漁洋施愚山外難爲之伍矣。

錦天山房詩話、陽谷嘗修書幣及詩託諸清商、贈沈德潛、乞爲序其集、竝贈詩於王鳴盛、吳泰來等七子、德潛拒而不答、商乃倩龔生者僞造德潛書詩、及七子和詩、傳致陽谷、陽谷大喜、居恆矜誇示人、終身不覺其詐焉、及後沈氏集來、其事始露、嗚呼、陽谷自信之銳、求名之過、取侮賈豎貽笑藝林、足以爲噉名者之戒矣、然如其詩文、自足凌躐一世、非如龍艸廬輩、沾沾自喜比也、按角田大可、近世叢語、載陽谷寄書德潛、其爲猾商所欺、事則諱而不著、東條子藏續先哲叢談登載、累二千餘言、極其

て、崎に來る者なり、嘗て陽谷の詩を稱して曰、我中國、王漁洋、施愚山の外、之れが伍を爲し難しと。

錦天山房詩話、陽谷嘗て書幣及詩を修し、諸を清商に托し、沈德潛に贈り、爲めに其集に序せんことを乞ふ、竝に詩を王鳴盛、吳泰來等七子に贈る、德潛拒んで答へず、商乃、龔生といふ者を倩ひ、德潛の書詩及び七子の和詩を僞造し、陽谷に傳致す、陽谷大に喜び、居恆矜誇して人に示す、終身其詐を覺らず、後、沈氏の集來るに及んで、其事始めて露はる、嗚呼、陽谷自信の銳、求名の過、侮りを賈豎に取り、笑を藝林に貽す、以て噉名者の戒と爲すに足れり、然れども其詩文の如きは、自ら一世を凌躐するに足れり、龍草廬輩の沾々自ら喜ぶが如きの比に非ず、角田大可の近世叢語を按ずるに、陽谷、書を德潛に寄するを載せ、其の猾商に欺かるゝ事は則諱んで著せず、東條子藏の續先哲叢談に登載し、二千餘言を累ね、其詆誣を極む、何ぞ其の煩を憚らざるや。

誣謔、何其不憚煩也。

烏山輔寬卷五十三

字碩夫、號芝軒、又號鳴春、又號逃禪居士、稱左太夫、攝津人、或云伏水人、世仕于朝、弱冠致仕、居於伏陽豐橋、後移居於大阪、性嗜酒、工詩、善書、講說、授徒、著有芝軒吟稿、享保己亥、太上皇聞其善詩、命采其集、備乙夜之覽、甚嘉褒焉、學者榮之、物徂徠評其詩曰、晚唐宗匠、初碩夫所居軒前生靈芝九莖、故號瑞芝軒、既歿、其子輔門、及門人戶田方弼等、編次其遺稿、三木近有省吾、寄其集於朝鮮學士申維翰、周伯請敘、竝贈詩曰、占得茅軒呼瑞芝、斯人千古稿猶遺、寄來爲問雞林客、孰與香山居士

錦天山房詩話下冊

烏山輔寬卷五十三

字は碩夫、芝軒と號す、又、鳴春と號す、又逃禪居士と號す、左太夫と稱す、攝津の人、或云ふ伏水の人と、世朝に仕ふ、弱冠にして致仕し、伏陽豐橋に居り、後に居を大阪に移す、性、酒を嗜み、詩に工みなり、書を善くす、講說して徒に授く、著に芝軒吟稿あり、享保己亥、太上皇、其詩を善くするを聞き、命じて其集を采り、乙夜の覽に備えしめ、甚嘉褒す、學者之れを榮とす、物徂徠其詩を評して晚唐の宗匠と曰ふ、初の碩夫居る所の軒前に靈芝九莖を生ず、故に瑞芝軒と號す、既に歿す、其子輔門、及び門人戶田方弼等、其遺稿を編次す、三木近有省吾、其集を朝鮮學士申維翰周伯に寄せ、敘竝に贈詩を請ふて曰、茅軒を占め得て瑞芝と呼ぶ、斯人千古稿猶遺る、寄せ來りて爲めに鷄林の客に問ふ、香山居士の詩に孰與ぞと、維翰爲めに其首に題して曰、烏山氏の詩を爲る、則必用ひて心を師とし、而して津筏を捨て、一古人の面目を作さず、又一今人の意態を作さず、外、象に足り、而して内、思に

詩維翰爲題其首曰、烏山氏之爲詩、則必用師心而舍律筏、不作一古人面目、又不作一今人意態、所以外足於象、而內足於思、繇是而爲芝菌之色、繇是而爲琅玕之響、繇是而爲蕙桂之味、卽令婆娑漫淫、白首窮途、不肯北面而交、一二年賈名聲于都人士者、皆是之爲也、可謂亦善狀芝軒矣。

錦天山房詩話、寶永享保之際、詩人大率慕倣嘉隆七子、以高華和矜、故刻飾雖美、鉅釘可厭、其弊也、黃茅白葦、彌望皆是也、獨芝軒取材於晚唐宋元、不爲流俗所染、不爲聲調所縛、避穢纏而就和平、深婉冲淡、類發乎心性所得、而真情流出、卓然可

足る所以なり、是れに繇りて、芝菌の色と爲り、是れに繇りて琅玕の響と爲り、是れに繇りて蕙桂の味と爲る、卽婆娑漫淫せしむるも、白首窮途、肯て北面して交はらず、一二年、名聲を都人士に賈ふ者、皆是れを之れ爲すなりと、亦善く芝軒を狀すと謂ふべし。

錦天山房詩話、寶永享保の際、詩人大率、嘉隆七子を慕倣し、高華を以て相矜る、故に刻飾、美なりと雖、鉅釘厭ふべし、其弊や、黃茅白葦、彌望皆是なり、獨、芝軒を晚唐宋元に取り、流俗の染むる所と爲らず、聲調の縛する所と爲らず、穢纏を避けて、和平に就く、深婉冲淡、類ね心性の得る所に發す、而して真情流出し、卓然傳ふべき者なり。

傳者也。

益田助卷五十四

字伯鄰、號鶴樓、稱助右衛門、其先相州人、北條氏據八州日、世掌財貨交易買賣估價、督察奸非、催驅賦徭事、國初徙相州豪於都下、其高祖友嘉率其族而來、遂爲江戶人、初永祿丙寅有吳舶來泊三浦、友嘉奉北條氏命、掌其事、因受五靈齋方於吳估、試之果驗、求者日多、遂致財巨萬、有子男三人、女一人、助、卽其季子之後也、少讀書、學詩於新井白石、與梁景鸞、釋法霖爲詩友也、所著有鶴樓遺編三卷、性喜客、坐賓恆滿、酒肉雜陳、晝夜相繼、無有間斷、伯鄰坐起其間、醉則假寐、寤則酣暢、不必爲

益田助卷五十四

字は伯鄰、鶴樓と號す、助右衛門と稱す、其先は相州の人、北條氏の八州に據る日、世、財貨交易買賣估價して、奸非を督察し、賦徭を催驅する事を掌る、國初、相州の豪を都下に徙す、其高祖友嘉、其族を率ひて來り、遂に江戸の人と爲る、初め永祿丙寅、吳の舶の來りて三浦に泊する有り、友嘉、北條氏の命を奉じ、其事を掌る、因て五靈齋の方を吳估に受く、之れを試むるに果して驗あり、求むる者日に多し、遂に財巨萬を致せり、子男三人、女一人あり、助は卽其季子の後なり、少ふして書を讀み、詩を新井白石に學ぶ、梁景鸞、釋法霖と詩友たり、著す所、鶴樓遺編三卷あり、性、客を喜び坐賓恆に滿ち、酒肉雜陳し、晝夜相繼ぐ、間斷あることなし、伯鄰、其間に坐起し、醉へば則假寐し、寤むれば則酣暢し、必しも賓主の禮を爲さず、客も亦其眞率を悦び、至れば則己れの家に在るが如し。

賓主禮客亦悅其真率。至則如在己家。

室直清師禮曰、益田生學詩於白石先生、先生之詩、俊逸清新、直與唐人上下、而益田生得其清雅、韓使之來聘也、生與之唱和、而韓使亦深稱之、生之詩初若無可喜者、徐而見之、清婉可愛、而最善近體律詩。原善公道曰、白石以經世爲任、故雖詩至工妙、固不欲以教人、稱門人者至寡矣、田鶴樓獨以詩稱弟子、白石與之交、終始不渝、與佐久間洞巖書云、吾故人莫鶴樓如焉、中秋月三十一年必償賞之、今年攜二子來、有詩云、滿堂明月中秋色、歸路清風十里程。

東條耕子藏曰、鶴樓雖以詩被稱於世、葆

室直清師禮曰、益田生、詩を白石先生に學ぶ、先生の詩、俊逸清新、直に唐人と上下す、而して益田生、其清雅を得たり、韓使の來聘するや、生之れと唱和し、而して韓使亦深く之れを稱す、生の詩、初め喜ぶべき者なきが若くなるも、徐にして之れを見れば、清婉愛すべし、而して最、近體律詩に善し。

原善公道曰、白石、經世を以て任と爲す、故に詩は工妙に至ると雖、固より以て人に教ふるを欲せず、門人と稱する者至りて寡し、田鶴樓、獨、詩を以て弟子と稱す、白石之れと交り、終始渝らず、佐久間洞巖に與ふる書に云ふ、吾が故人は鶴樓に如くはなし、中秋の月、三十一年、必償に之れを賞す、今年二子を携えて來る、詩あり云ふ、滿堂の明月中秋色、歸路の清風十里程と。

東條耕子藏曰、鶴樓詩を以て世に稱せらるゝと雖

光脫落、不欲屑屑以文藝徒而自居、則曰  
 一賣藥翁、豈欲沾沾自喜求人聚慕、且效  
 韓伯休好名之甚、刻苦逃名之爲哉、爲之  
 醜也、唯可與飲耳、無朝無暮、無時不醉、素  
 善三絃技、好世所謂長唱者、每會客席、必  
 奏其曲、或一日人不至、僮僕乃憂鶴樓之  
 不樂、竊詣其常相善者招之、必邀而止、以  
 爲常。

### 江兼通

字子徽、號若水、攝津人、其家世以釀酒致  
 資千金、子徽幼好讀書、學詩於烏山芝軒、  
 年未四十、屬家政於其子、益買異書、以自  
 娛、隱居嵐山、從緇林耆弱而遊、日以吟咏  
 爲事、享保乙酉卒、著有西山樵唱。

錦天山毋詩話下冊

葆光脫落、屑々、文藝の徒を以て自ら居らず、則曰く、  
 一賣藥翁、豈沾々として自ら喜び、人の聚慕を求むる  
 を欲せんや、且、韓伯休が名を好むの甚しき、刻苦し  
 て名を逃るゝの爲に效はんや、之れを爲すは醜な  
 り、唯、與に飲むべきのみ、朝となく暮となく、時とし  
 て酔はざるはなし、素より三絃の技を善くし、世の謂  
 はゆる長唱といふ者を好み、客を會する席毎に、必其  
 曲を奏す、或は一日人至らざれば、僮僕、乃、鶴樓の樂  
 まざるを憂ひ、竊に其常に相善き者に詣りて之れを  
 招き、必邀へて止む、以て常と爲す。

### 江兼通

字は子徽、若水と號す、攝津の人、其家世、釀酒を以て  
 資千金を致す、子徽、幼にして讀書を好み、詩を烏山  
 芝軒に學ぶ、年未だ四十ならずして、家政を其子に屬  
 し、益、異書を買ひ、以て自ら娛しむ、嵐山に隱居し、  
 緇林耆弱に従ひて遊ぶ、日に吟咏を以て事と爲す、享  
 保乙酉卒す、著に西山樵唱あり。



物雙松茂卿曰、江翁詩莫有耿介處士之風、酒能冲澹其辭、荀穆其趣、雋永乎其味之也、莫有遊閒公子之好、迺能樂其利安、其分、優猶乎其言之也、其調雖未得超中晚而上之、迺能句而順、字而協、髣髴乎唐音也。服元喬子遷曰、江山人、隱于嵐山十年矣、以詩稱焉、蓋其爲人天真橫出、蟬蛻方之外、故其詩也身與之化、觸機立應、不啻承鯛、其幽也道流僧侶、無乃友之所輔乎、其奇也大嶽、巨川、無乃神之所助乎、其觀物寄巧也、艸木風雨之變、鳥獸魚鼈之態、其將奪造化之蘊乎。

富逸日休曰、亡友江若叟、一生精力盡於詩矣、每臨雅筵、筆端縱橫、詩腸無燥、自匪

物雙松茂卿曰、江翁の詩、耿介處士の風あること莫し、酒、能く其辭を冲澹にし、其趣を荀穆し、雋永乎として、其之れを味ふなり、遊閒公子の好あることなし、酒能く其利を樂み、其分に安んじ、優猶乎として、其之れを言ふなり、其調未だ中晚を超えて而して之に上るを得ずと雖、酒、能く句にして順ひ、字にして協ひ、唐音に髣髴するなり。

服元喬子遷曰、江山人、嵐山に隱るゝこと十年、詩を以て稱せらる、蓋、其人と爲り、天真橫出、方の外に蟬蛻す、故に其詩や身之れと化し、機に觸れて立どころに應ず、嘗に承鯛のみならず、其の幽なるや、道流僧侶乃ち友の轉くる所なる無らんか、其の奇や、大嶽巨川、乃ち神の助くる所なる無らんか、其物を觀、巧を寄するや、草木風雨の變、鳥獸魚鼈の態、其れ將に造化の蘊を奪はんとするか。

富逸日休曰、亡友江若叟、一生の精力詩に盡く、雅筵に臨む毎に、筆端縱橫、詩腸燥くこと無し、得る所の

有所得者能如此乎、爲人恢拓不護影迹、肆口資毀無所趨避、且無百玩好之奢、噓志。

申維翰周伯曰、浪華之山川城郭、草樹煙霞、卽君肺腑中物、所與逍遙遊者、竝日東名勝吾固一把袂而喚作黃庭仙也、再展卷而知爲玄圃珍也。

東龜年卷五十五

字龜年、號藍田、伊東氏、稱金藏、江戸人、學於物金谷、仕尾藩、未幾有故致仕、以講說爲業、以善文著聞、當此時護園老宿彫落殆盡、龜年與岳東海維持其遺教、獎誘後進、文化六年卒、年七十六歲、著藍田文集、瀨觀子瀾曰、先生詩、以文成、合轍於漢魏

者あるに匪る自りは、能く此の如くならんや、人と爲り恢拓にして影迹を護らず、肆口資毀して趨避する所なし、且、百玩好の噓志を奪ふ無し。

申維翰周伯曰、浪華の山川城郭、草樹煙霞は卽君の肺腑中の物なり、與に逍遙して遊ぶ所の者は、竝に日東の名勝なり吾れ固より一把袂を把り、而して喚んで黃庭仙と作せり、再び卷を展べて玄圃の珍たるを知るなり。

東龜年卷五十五

字は龜年、藍田と號す、伊東氏、金藏と稱す、江戸の人物金谷に學び、尾藩に仕ふ、未だ幾くならず、故ありて致仕す、講説を以て業と爲す、文を善くするを以て著聞す、此の時に當りて、護園の老宿、彫落殆んど盡く、龜年、岳東海と其遺教を維持し、後進を獎誘す、文化六年に卒す、年七十六歲、藍田文集を著す。

瀨觀子瀾曰、先生の詩は文を以て成る、轍を漢魏六朝

六朝比蹤於開天嘉隆體裁森嚴意氣激烈豈可與今之以真弱纖麗爲巧者一律而論哉。

錦天山房詩話藍田詩浮響多而實際少。

丘融

字子陽號東海號太仲三河人從餘熊耳而學徙居江戸享和三年卒年六十九歲著有東海文稿。

錦天山房詩話子陽詩驕穉疎野句調滯澁蓋沿於時習而才不至者耳。

野本公臺

字子賤號東臯稱新左衛門江州人世仕彦根侯初奉宋儒後讀物徂徠書大悅之悉棄其舊學而學焉又就澤村琴所服部

に合し、蹤を開天嘉隆に比す、體裁森嚴、意氣激烈、豈今の真弱纖麗を以て巧と爲す者と一律にして論すべけんや。

錦天山房詩話、藍田の詞、浮響多く、而して實際少し。

丘融

字は子陽、東海と號す、太仲と稱す、三河の人、餘熊耳に從ふて學ぶ、居を江戸に徙し、享和三年卒す、年六十九歲、著に東海文稿あり。

錦天山房詩話、子陽の詩、驕穉疎野、句調滯澁、蓋時習に沿ふて、而して才に至らざる者のみ。

野本公臺

字は子賤、東臯と號す、新左衛門と稱す、江州の人、世仕彦根侯に仕ふ、初め宋儒を奉じ、後、物徂徠の書を読み、大に之れを悦び、悉く其の舊學を棄て、學ぶ、又澤村琴所、服部南郭に就て學ぶ、昔く物門諸子と交る、是

南郭而學、普與物門諸子交、先是江人皆奉中江藤樹三宅尙齋等學、子賤始唱物氏說、說經一主古注疏、學風爲之一變、天明四年卒、年六十八歲、著有襄園集。

松崎維時君脩曰、子賤生藩國、不繇師承、潛心六經、達觀古今、特信物子學、爲洙泗之後一人、當其凝神專思、雖物子所論定、於心少有不妥、必刻覈剴濯、不苟阿其所好、視之耳食者、奚啻霄壤、其操觚、文足以立言、言足以達意、意不犯法、法不傷意、庀材於秦漢、得則於韓柳、未始襲王李一語、褒然異乎世俗之撰、可不謂豪傑之士哉。

劉維翰文翼曰、子賤能厭朱明諸名家之境、翻翻奮其羽、葳蕤婉轉、所向靡不若意、

より先き江人皆中江藤樹三宅尙齋等の學を奉ず、子賤始め物氏の說を唱へ、經を説く、一に古注疏を主とす、學風之れが爲めに一變す、天明四年卒す、年六十八歲、著に襄園集あり。

松崎維時君脩曰、子賤、藩國に生れ、師承に繇らず、心を六經に潛め、古今を達觀し、特に物子の學を信じ、洙泗の後一人と爲す、其凝神專思に當りては、物子の論定する所と雖、心に於いて少しくも安からざるあらば、必刻覈剴濯し、苟、其の好む所に阿らず、之れを耳食の者に視ぶるに、奚啻霄壤のみならず、其觚を操るや、文、以て言を立つるに足り、言、以て意を迷するに足れり、意、法を犯さず、法、意を傷らず、材を秦漢に庀へ、則を韓柳に得、未だ始めより王李の一語を襲はず、褒然として世俗の撰に異なり、豪傑の士と謂はざるべけんや。

劉維翰文翼曰、子賤能く朱明諸名家之境を厭ひ、翻々として其羽を奮ふ、葳蕤婉轉向ふ所意の若くならず

短而用長、氣勝而逸、磨巧自檢、其文健而無粉飾、要刻意昌黎河東二家。

源康純少卿曰、子賤蚤篤志道、藝究經論、義皓首弗衰、餘力遊戲、翰墨文則取法昌黎河東、而裁詞於諸家之雋、詩則仰範盛唐諸流、而資材明諸才子、賤之業比諸今諸作家、大有逕庭者也。

錦天山房詩話、東阜詩、清潤而不靡。

五味國鼎卷五十六

字伯耳、甲斐人、受業於太宰春臺、學成歸鄉、教授、著有釜川遺稿。

菊池貞叔成曰、伯耳抱偉傑之資、生幽僻之地、耽學不倦、高尚養素、其文議論確然、多經世家之言、可謂不恥其師矣、詩亦清

るは靡し、短にして而して長を用ひ、氣勝ち而して逸す、巧を磨して自ら檢す、其文健にして粉飾なし、要するに昌黎河東の二家に刻意す。

源康純少卿曰、子賤蚤く志を道藝に篤くし、經を究め義を論じ、皓首まで衰へず、餘力、翰墨に遊戯す、文は則法を昌黎河東に取り、而して詞を諸家の雋に裁し、詩は則範を、盛唐諸流に仰ぎ、而して材を明の諸才子に資る、子賤の業、諸を今の諸作家に比するに、大に逕庭ある者なり。

錦天山房詩話、東阜の詩、清潤にして靡ならず。

五味國鼎卷五十六

字は伯耳、甲斐の人、業を太宰春臺に受く、學成り郷に歸りて教授す、著に釜川遺稿あり、

菊池貞叔成曰、伯耳、偉傑の資を抱き、幽僻の地に生れ、學に耽りて倦まず、高尚、素を養ふ、其文、議論確然、經世家の言多し、其師に恥ぢずと謂ふべし、詩亦清雅、格正しく、調高し、諸を世の軌範麗藻、虛飾自ら

雅、格正調高、觀諸世之醜、醜麗藻、虛飾自  
美者、自有逕庭焉。

錦天山房詩話、釜川詩、音節和平、上視其  
師、不啻出藍。

安脩 卷五十七

字文仲、號清河、下毛人、初爲烏山千本里  
玉泉觀司祀、因稱玉泉道士、名字慶、字吉  
甫、七歲受句讀於兄榮亮、尤好讀詩、暗誦  
唐詩正聲詩刪等、人稱爲神童、稍長從、宇  
都宮文學松章甫學、後來東都、受業於服  
南郭、與鶉士寧、服仲英、板美仲、石仲綠交、  
乃自變名字爲儒、築室讓葉街、詩名大振、  
方是時、服門諸子、凋謝殆盡、獨文仲在焉、  
故自貴介公子、至草野蒞藪之徒、四方屬

美にする者に觀るに、自ら逕庭あり。

錦天山房詩話、釜川の詩、音節和平、上、其師に視ぶる  
に、嘗に出藍のみにあらず。

安脩卷五十七

字は文仲、清河と號す、下毛の人、初め烏山千本里、玉  
泉觀の司祀たり、因て玉泉道士と稱す、名は字慶、字  
は吉甫、七歲にして句讀を兄榮亮に受く、尤好んで詩  
を讀む、唐詩正聲、詩刪等を暗誦す、人稱して神童と  
爲す、稍、長じて宇都の宮の文學松章甫に從ひて學ぶ、  
後、東都に來り、業を服南郭に受け、鶉士寧、服仲英、  
板美仲、石仲綠と交り、乃自ら名字を變じ儒と爲る、  
室を讓葉街に築き、詩名大に振ふ、是の時に當り、服  
門の諸子、凋謝殆んど盡く、獨、文仲在り、故に貴介公  
子より、草野蒞藪の徒に至るまで、四方より屬至し、  
受業を請ふ者、絡繹として絶えず、谷玄圃と名を齊ふ  
す、人稱して讓洲の二大家と爲す、寛政四年卒す、年  
六十七歲、平生著作甚だ富む、著す所の市隱草堂集、世

至、請受業者絡繹不絕、與谷玄圃、齊名、人稱爲諷洲二大家、寛政四年卒、年六十七歲、平生著作甚富、所著市隱草堂集、行於世、子有恆、字士芳、維和、字士厚、皆早沒、錦天山房詩話、文中時、赤羽餘流既竭、故獨享大名、然學殖空疎、譏刺者以爲不直半文也、嘗作一詩、中有厭人間字、謬作飽人間、蓋因厭與飽邦讀同、而誤也、輕薄者因謂、意是夜叉之詩、啖人而飽、非夜叉、而何傳以爲笑焉、今閱其集、專尙格調、剽剝七子、間有得其形似者、不全若識者之言、但應酬極多、累重可厭、如刪存十一、則庶幾爲一名家。

川治義豹 卷五十八

に行はる、子、有恆、字は士芳、維和、字は士厚、皆早く没す。

錦天山房詩話、文中の時、赤羽の餘流既に竭く、故に獨大名を享く、然るに學殖空疎、譏刺する者以て半文に直ひせずと爲すなり、嘗て一詩を作る、中に人間に厭くの字あり、謬りて人間に飽くに作る、蓋厭と飽と邦讀同じきに因りて誤るなり、輕薄者、因て謂ふ、意ふに是れ夜叉の詩なり、人を啖ふて飽く、夜叉に非ずして何ぞと、傳へて以て笑と爲す、今其集を閱するに、専ら格調を尙び、七子を剽剝し、間、其形似を得る者あり、全く識者の言の若くならず、但、應酬極めて多し、累重厭ふべし、如し刪りて十一を存せば、則、一名家たるに庶幾し。

川治義豹 卷五十八

字伯玄、號南山、稱秦藏、□□人、宮川侯文學、初受業、鶡士寧、又學于服仲山、所著有高眠亭錄稿。

安倫文仲曰、伯玄詩、融暢高華、事論混成、然不見斧鑿之迹、又且幾不失溫柔敦厚之旨矣。

服元雅□□曰、先生論詩曰、天縱之才姑置焉、如擬古樂府、譬之罔兩捉影、暗中摹形也、假使能捉之、摹之、亦但不可辨其似與不似也、且原既多不可讀、況於氣韻乎、如四言五言古、自西漢至魏晉、選已拔其萃也、不可以尙焉、而今於學之非務精、摸擬于字句、則不得惟肖之譽焉、今可專用工力於斯道者、莫如古之唐詩也、取標準

字は伯立南山と號す、秦藏と稱す、□□の人、宮川侯の文學たり、初め業を鶡士寧に受く、又、服仲山に學ぶ、著す所、高眠亭錄稿あり。

安倫文仲曰、伯玄の詩、融暢高華、事論混成、然も斧鑿の迹を見ず、又、且、溫柔敦厚の旨を失はざるに幾し。

服元雅□□曰、先生、詩を論じて曰、天縱の才は姑く置く、擬古樂府の如きは、之れを罔兩が影を捉へ、暗中に形を摹するに譬ふなり、假ひ能く之を捉り之れを摹せしむるも、亦但、其似と不似とを辨すべからず、且、原既に多く讀むべからず、況んや氣韻に於てをや、四言五言古の如きは、西漢より魏晉に至るまで、選已に其萃に拔けり、以て尙ぶべからず、而して今之れを學ぶに於て、務めて摸擬を字句に藉るに非れば、則惟れ肖たりの譽を得るを得ず、今、專、工力を斯道に用ふべき者は、古の唐詩に如くはなし、標準を開天に取り、羽翼を嘉隆に假る、而して後ち、庶幾くば與に詩



於開天、假羽翼於嘉隆、而後庶幾可與可

言詩已矣。○按、下可字似衍。

### 繩維直

字溫卿、稱準可、江都人、少就安清河而學、社中人推爲領袖、清河目爲千里駒、仕大府爲江都尹屬吏、而非其好、終以疾辭去、閉門謝客、大肆力吟咏、聲益著、著有桂林集六卷、烏山藤侯忠侯爲敘其首。

瀧川 利雅 肅之曰、溫卿者、安子高第弟子、爲人雅思敏才、能守師教、別成一家、溫雅宏麗、亦能儀刑、安子中道而立、可謂入門正、立志高者也。

山維祺 君壽曰、溫卿氏少則慨然有立言不朽之志矣、以其富有之才、加之精力過

を旨ふ可きのみ。

### 繩維直

字は溫卿、準藏と稱す、江都の人、少ふして安清河に就きて學ぶ、社中の人、推して領袖と爲す、清河目して千里駒と爲す、大府に仕え、江都尹の屬吏と爲る、而して其好みに非ず、終に疾を以て辭し去る、門を閉ぢ客を謝し、大に力を吟咏に肆にす、聲益著はる、著に桂林集六卷あり、烏山藤侯(忠侯)爲に其首に敘す。

瀧川利雅肅之曰、溫卿は安子の高第の弟子なり、人と爲り、雅思敏才、能く師教を守り、別に一家を成す、溫雅宏麗、亦儀刑を能くす、安子中道にして立つ、入門正しく、立志高き者と謂ふべきなり。

山維祺君壽曰、溫卿氏少ふして、則、慨然として立言不朽の志あり、其富有の才を以て、之れに加ふるに精

絶人也、業亦日進、社中諸賢、無不爲避三舍者也、初爲小吏而非其志、乃歎曰、大丈夫、當適志、豈復碌碌與刀筆吏作伍乎、終以疾辭去、時以清河翁新沒、衆推以爲主盟、辭不可、乃與二三同志、續修舊業、業益廣矣、殆有出藍之名云。

陰山雍 卷五十九

字文熙、號豐洲、稱忠右衛門、江戸人、小山侯文學、著松桂園集。

釋口口古梁曰、文熙陰先生、業已視古修文、清廟遺音、調高和寡、當今之時、麗嘈相濫、嘈嘈背憎、先生地獨守素業、詩而亡舉、大曆以下、文亡修、東京以還、如夫時論、固弗遑恤矣、昔楊盈川謂、王子安詩、壯而不

力人に過絶す、業も亦日に進む、社中の諸賢、爲に三舍を避けざる者なし、初め小吏と爲る、而して其志に非ず、乃歎じて曰、大丈夫、當に志に適すべし、豈復た碌々として刀筆の吏と伍を作さんやと、終に疾を以て辭し去る、時に清河翁新に没するを以て、衆推して以て主盟と爲す、辭すれども可かれず、乃、二三同志と、舊業を續修し、業益廣し、殆んど出藍の名あり。

陰山雍卷五十九

字は文熙、豐洲と號す、忠右衛門と稱す、江戸の人、小山侯の文學たり、松桂園集を著す。

釋口口古梁曰、文熙陰先生、業已に古を視文を修む、清廟の遺音、調高く和寡し、今の時に當り、麗嘈相濫し、嘈嘈背憎す、先生塊獨、素を守り、詩を業とし、而して大曆以下を舉ぐる亡し、文は東京以還を修する亡し、如し夫れ時論は、固より恤ふるに違あらず、昔、楊盈川謂ふ、王子安の詩、壯にして虚ならず、剛にして能く潤ひ、雕にして碎ならず、按して彌、堅し、諸を先生にす、煇るに、吾未だ其溢なるを觀す。

虛、剛而能潤、雕而不碎、按而彌堅、婉諸先生、吾未觀其溢焉。

錦天山房詩話、寬政已降、世崇宋調、詩風一變、赤羽餘韻、幾乎滅息、其僅存者皆卑瑣齷齪、貽笑大方、獨文熙卓然不更故調、其詩質而不俚、華而不媚、絕句最深婉、有唐人風致、可謂中流砥柱。

秋山儀 卷六十

一名定政、字子羽、號玉山、又號青柯、稱儀右衛門、肥後人、世仕本藩、從父需庵、以醫仕本藩、子羽出爲之後、早習其技、又少好學博覽、宿學皆驚歎、於是侯命更養他子、嗣醫、使子羽專爲儒學、後扈侯駕來江戶、從林鳳岡學、鳳岡奇愛其才、久之業大進、

錦天山房詩話、寬政已降、世崇宋調、詩風一變、赤羽之餘韻、滅息に幾し、其僅に存する者、皆卑瑣齷齪笑を大方に貽す、獨文熙は、卓然として故調を更めず、其詩、質にして俚ならず、華にして媚ならず、絶句は最深婉にして、唐人の風致あり、中流の砥柱と謂ふべし。

秋山儀

一に定政と名づく、字は子羽、玉山と號す、又青柯と號す、儀右衛門と稱す、肥後の人、世、本藩に仕ふ、從父需庵を以て本藩に仕ふ、子羽、出で、之れが後たり、早に其技を習ふ、又、少ふして學を好み、博覽なり、宿學皆驚歎す、是に於いて侯命じて更に他の子を養ひて醫を嗣ぎ、子羽をして専ら儒學を爲さしむ、後、侯の駕に扈して、江戶に來り、林鳳岡に從ひて學ぶ、鳳岡、其才を奇愛す、之れを久ふして業大に進む、其國に歸るに及んで、贊を執り門に及ぶ者、蓋千を踰ゆ、

及其歸國、執贄及門者、蓋踰千、寶曆乙亥、建議、親時習館於國都、子羽爲之提學、揭學規十三則、薦俊才、教子弟、於是藩中斐然嚮化、加賜祿二百石、爲人體貌豐舒、眉宇秀發、少美風儀、性磊落奇偉、不喜飾、行街名、丁父母憂、服喪六年、時人難之、其爲學極尙該博、不欲自建門戶、工詩古文辭、嘗登富士山爲詠、三千餘言、其文朗粲、人爭傳誦、其爲詩、一字不苟、其或不穩、沉思累年、定後出之、嘗語人曰、天下不乏作者、不如余之善思也、其在東都、高松日出宇土諸侯、樂山公子、爭延爲上客、交道甚廣、與服南郭父子、高蘭亭、井太室、瀧鶴臺、紀平洲輩、最懽、其藩老以下、皆待以師禮、性

寶曆乙亥、建議して時習館を國都に擢む、子羽之れが提學と爲り、學規十三則を掲げ、俊才を薦め子弟を教ゆ、是に於て藩中斐然として化に嚮ふ、祿二百石を加賜す、人と爲り體貌豐舒、眉宇秀發、少くして風儀美なり、性磊落奇偉、行を飾り名を銜ふを喜ばず、父母の憂に丁り、喪に服すること六年、時人之れを難んず其學たる、極めて該博を尙び、自ら門戸を建つるを欲せず、詩、古文辭に工みなり、嘗て富士山に登り、記を爲る、三千餘言、其文朗粲、人争ふて傳誦す、其詩を爲るや、一字苟せず、其或は穩ならざるあれば、沈思累年、定めて後之れを出だす、嘗て人に語けて曰、天下、作者に乏からざるも、余の善く思ふに如かざるなりと、其東都に在るや、高松、日出宇土諸公、樂山公子、争ふて延いて上客と爲す、交道甚廣し、服南郭父子、高蘭亭、井太室、瀧鶴臺、紀平洲輩と最懽す、其藩老以下皆待つに師禮を以てす、性客を好み、來訪者あれば、必、待つに酒食を以てし、談笑竟日、厭倦の色なし、請ふあれば必往き、懽を盡くして歸る、故に人々皆子羽己に厚くすと謂へり、寶曆十三冬、疾あり、枕上に吟哦を廢せず、病革まり、扶けられ起きて端坐し、紙筆を

好客有來訪者、必待以酒食談笑、竟日無厭倦色、有請必往、盡懽而歸、故人、人皆謂子羽厚己、寶曆十三冬有疾、枕上不廢吟哦、病革、扶起端坐、索紙筆、大書清鏡無底、水月似我八字、擲筆而歿、年六十二、嘗語人曰、吾少有三願焉、登富嶽、建學宮、二願遂矣、人問其一、笑而不答、著有玉山集、服元喬子遷曰、子羽爲人磊落不屑一世、其詩豁達而有法、亦若其人。

岡井孝孝先錫曰、子羽世仕細川侯爲士大夫之矜式、才氣甚高、博聞強識、其詩以超乘爲志、不局促轅下、然遣辭溫雅、詔令瀟灑、唐音哉、嚮者子羽從五馬歸肥也、握手相別、酒後耳熱、語及藝苑、高談雄辯、務

索め「清鏡底、無なく、水月我に似たり」の八字を大書し、筆を擲つて歿す、年六十二、嘗て人に語けて曰、吾少より三の願あり、富嶽に登る、學宮を建つ、二の願遂けたりと、人其一を問ふ、笑つて答へず、著に玉山集あり。

服元喬子遷曰、子羽、人と爲り、磊落一世を屑とせず、其詩豁達にして法あり、亦其人の若し。

岡井孝先仲錫曰、子羽世、細川侯に仕へ、士大夫の矜式と爲る、才氣甚高し、博聞強識、其詩、超乘を以て志と爲し、轅下に局促せず、然るに辭を遣る温雅、詔令瀟々として唐音なるかな、嚮者に子羽、五馬に従ひ肥に歸るや、手を握りて相別る、酒後耳熱す、語、藝苑に及べば、高談雄辯、務めて彼の剽竊雷同して詩を爲る者を排す、迺、子羽の詩、知る可し。

排彼剽竊雷同爲詩者、迺子羽之詩可知矣。

井幸徳子章曰、子羽實奇才、古人中所希觀也、方其下筆之際、心不奇其境、不就言不得其奇、不發及其未得之、疾首蹙頰似欲逃坐者、至心與境合、言得所須、如瀉瀑水于千尋之壑、千萬之字下筆便成、不求法于前、而法具其中、不求媚于時、而爲時所悅、是余之所見其藝也、唐也宋也元明也、無不取、而所根柢有焉、而不好積字成句、累句成篇也、是余之所聞其論也。

紀德民世馨曰、先生之於文辭也、天機所發、躍如乎常度之表、且其儒宗于大邦也、其績固多、而至建學館、立學政、搜索丘林、育英、選俊、最爲尤異之事、而文教加於

井幸徳子章曰、子羽は實に奇才、古人中に稀れに觀る所なり、其筆を下すの際に方りて、心其境を奇とせざれば就らず、言其奇を得ざれば發せず、其未だ之れを得ざるに及んでは、首を疾ましめ頰を蹙め、坐を逃れんと欲する者に似たり、心、境と合し、言、須ふる所を得るに至れば、瀑水を千尋の壑に瀉ぐが如く、千萬の字筆を下して便ち成る、法を前に求めず、而して法、其中に具はる、媚を時に求めず、而して時の悦ぶ所と爲る、是れ余の見る所其藝や唐なり宋なり元明なり、取らざる無し、而して根柢とする所は焉れ有り、而して字を積み句を成し、句を累ね篇を成すを好まざるなり、是れ余の其論に聞く所なり。

紀德民世馨曰、先生の文辭に於けるや、天機發溢する所常度の表に躍如たり、且其大邦に儒宗たり、其績固より多し、而して學館を建つるに至り、學政を立て丘林を搜索し、英を育ひ俊を選び、最、尤異の事と爲す、而して文教鄰邦に加はる。

邦矣。

江村綾君錫曰、肥後近時有藝文之稱、秋

玉山名聲煥發、詩才可嘉。

原善公道曰、玉山以詩文已冠冕一時、又

工作字、雖短章片墨、爲人所傳、赤松國鸞

與三上宗順書曰、秋玉山詩一首、卽所其

手書、詩固超乘、書亦不凡、遺以供清玩、玉

山海內一名家、僕嘗辱忘年交、今則亡矣。

錦天山房詩話、玉山不專建門戶、博綜衆

家、掇菁咀英、其取友於當世、亦猶是也、苟

有可取者、則不問其同與否矣、故其詩經

營揮灑、頗極變化、歌行最琳琅可誦、一氣

孤行、獨開生面、因悟夫專主一家、單局一

格者、假令有所成就、亦不過偏詣耳、況未

江村綾君錫曰、肥後、近時、藝文之稱あり、秋玉山の名聲煥發す、詩才可嘉みすべし。

原善公道曰、玉山、詩文を以て已に一時に冠冕たり、又工みに字を作る、短章片墨と雖、人の傳ふる所と爲る、赤松國鸞の三上宗順に與ふる書に曰、秋玉山詩一首、卽ち其の手書する所、詩は固より超乘、書も亦凡ならず、遺りて以て清玩に供す、玉山は海内の一名家、僕嘗忘年の交を辱くす、今は則亡しと。

錦天山房詩話、玉山、専ら門戸を建てず、衆家を博綜し、菁を掇り英を咀ふ、其、友を當世に取る、亦猶は是のごとし、苟、取るべき者あれば、則、其同と否とを問はず、故に其詩、經營揮灑して、頗、變化を極む、歌行は、最琳琅として誦すべし、一氣孤行し、獨、生面を開く、因て悟る、夫の専ら一家を主とし、單に一格に局する者は、假令、成就する所あるも、亦偏詣に過ぎざるのみ、況や未だ至らざる者をや。

至者乎。

## 藪懸 卷六十一

字士厚、號孤山、稱茂次郎、慎庵季子也、少力學、博涉經史、能詩文、鬱然有聲、寶曆二年、熊本侯歲賜白銀二十錠、以爲學資、七年春、命游學江都、遂游京師、與關鐸、西依周行、河野子龍等、締交留學三年而歸、時年僅踰弱冠、十一年擢時習館訓導、又除助教、賜俸米百五十包、明和五年陞教授、後遊京攝、與中井竹山兄弟、賴春水、尾藤約山等、定交、藩侯甚貴重之、益俸米、至六百包、天明七年、字士厚入承宗國、勵心庶政、方嚮儒術、眷注甚篤、寬政元年、患風痺、乞辭職、納俸、不許、明年疾篤、仍申前請、乃

## 藪懸 卷六十一

字は士厚、孤山と號す、茂次郎と稱す、慎庵の季子なり、少ふして學を力む博く經史に涉り詩文を能くし、鬱然として聲あり、寶曆二年、熊本侯、歲、白銀二十錠を賜ひ、以て學資と爲す、七年春、命ぜられて江都に遊學し、遂に京師に遊ぶ、關鐸、西依周行、河野子龍等と交を結び、留學三年にして歸る、時に年僅に弱冠を踰ゆ、十一年時習館訓導に擢んでられ、又、助教に除し、俸米百五十包を賜ふ、明和五年、教授に陞る、後、京攝に遊び、中井竹山兄弟、賴春水、尾藤約山等と交を定む、藩侯、甚だ之れを貴重す、俸米を益し、六百包に至る、天明七年、字士厚入りて宗國を承け、心を庶政に勵まし、方に儒術に嚮ふ、眷注甚篤し、寬政元年、風痺を患ひ職を辭し、俸を納れんことを乞ふ許されず、明年疾篤し、仍りて前請を申ぬ、乃之れを許さる、其子素記に俸米四百包を賜ひ、又、養老俸二十口を賜ひ、以て之を優す、未だ幾ばくならずして卒す、門人島田貞孚、其遺稿に序して云ふ、教授孤山藪先生、



許之、賜其子泰記俸米四百包、又賜養老俸二十口、以優之、未幾而卒、門人島田貞孚序其遺稿云、教授孤山藪先生、自少受家學、尊崇程朱、學術既正矣、而又天資穎悟、洞達時勢、通曉人情、實有爲之士也、故誨弟子、鑄鍛不偏、能知其才之所長、從而有成焉、故門下之士、有以德行稱者、有以文學鳴者、或以政事著、或以經術聞、其餘論兵擊劍醫卜浮屠之類、遠邇請益者、日月滋衆、先生應接懇到、誨之不倦、人咸悅服、各有所得者、以先生有爲之才、能鑄鍛之也。

錦天山房詩話、孤山詩五古、頗近韋柳、清而能麗、綺而不靡、深得唐賢之遺、雖差遜

少より家學を受け、程朱を尊崇し、學術既に正し、而して又、天資穎悟、時勢を洞達し、人情に通曉す、實に有爲の士なり、故に弟子を誨ふる、鑄鍛偏せず、能く其才の長ずる所を知り、従つて成るあり、故に門下の士、德行を以て稱する者あり、文學を以て鳴る者あり、或は政事を以て著はれ、或は經術を以て聞ゆ、其餘、論兵擊劍醫卜浮屠の類、遠邇益を請ふ者、日に月に滋衆し、先生應接懇到、之れを誨えて倦まず、人咸悅服し、各、得る所の者あり、先生有爲の才を以て、能く之れを鑄鍛すればなり。

錦天山房詩話、孤山の詩、五古、頗、韋柳に近し、清にして能く麗、綺にして靡ならず、深く唐賢の遺を得た

秋玉山之痛快、而高華過之、前後比肩、固無愧色。

錦天山房詩話、肥後先公篤嗜國雅、擅名藝苑、後嗣相承、世愛文雅、崇尚儒術、風教所覃、文才鬱起、秋玉山、藪孤山以外、操觚之士、千百成辟、二子皆宗唐音、故國中詩皆平易暢達、無鉤吻棘唇之態、今就孤山所編樂泮集中、摘錄其較佳者、而付二子後、以著一方風氣之所由爾。卷六十二

### 池邊匡卿

字匡卿、號蘭陵、稱平太郎、肥後人、世仕熊本侯、父盛唯、號鶴林、爲藩文學、匡卿天才秀發、敏捷絕世、幼受句讀、僅半大學、乃釋卷起曰、兒能矣、請無復事、帖畢、試讀後半、

錦天山房詩話下冊

り、差、秋玉山の痛快に遜ると雖、而して高華は之れに過ぐ、前後肩を比するに、固より愧色なし。

錦天山房詩話、肥後先公、篤く國雅を嗜み、名を藝苑に擅にし、後嗣相承け、世、文雅を愛し、儒術を崇尚す、風教の覃ぶ所、文才鬱として起る、秋玉山、藪孤山以外、操觚の士、千百、群を成す、二子皆唐音を宗とす、故に國中の詩、皆平易暢達、鉤吻棘唇の態なし、今孤山の編する所の樂泮集中に就いて、其較佳なる者を摘録し、而して二子の後に付し、以て一方風氣の由る所を著すこと爾り。卷六十二

### 池邊匡卿

字は匡卿、蘭陵と號す、平太郎と稱す、肥後の人、世、熊本侯に仕ふ、父盛唯、鶴林と號す、藩の文學と爲る、匡卿、天才秀發、敏捷、世に絶す、幼にして句讀を受け、僅に大學を半にして、乃、卷を釋て起ちて曰、兒能くせり、請ふ復帖學を事とする無れと、試に後半を讀ま

琅琅如素習者未嘗學書能書未嘗學詩能賦自是觀覽日博著述日富比及成童屹然成家矣父卒命繼其職泮宮成擢爲訓導以教國子弟居職三十餘年以訓導匪懈甄陶多士褒賞數次食采百石班至上士天明二年九月二日疾卒年五十七歲。

藪憲士厚曰先生讀書自經藝以下至諸子百家稗官小說莫不該綜而目之所觸終身不遺其作文章歌詩皆一氣呵成頃刻千百言如河決龍門下呂梁奔放奮迅不可禦也每諸彥盛集分題探韻衆皆沉思獨先生飲啖笑傲傍若無人遽把筆一揮珠玉滿幘而神趣妙造迥出常情殆非

しむるに、琅々として素習する者の如し、未だ嘗て書を學ばずして能く書し、未だ嘗て詩を學ばずして能く賦す、是より觀覽日に博く、著述日に富む、成童に及ぶに比んで、屹然として家を成せり、父卒す、命じて其職を繼がしむ、泮宮成り、擢んでられて訓導と爲り、以て國の子弟を教ゆ、職に居ること三十餘年、訓導懈らず、多士を甄陶せるを以て褒賞數次、食采百石、班至上士に至る、天明二年九月二日疾んで卒す、年五十七歲。

藪憲士厚曰、先生讀書、經藝より以下、諸子百家稗官小説に至るまで、該綜せざるは莫し、而して目の觸るる所終身遺れず、其文章歌詩を作るに、皆一氣呵成し、頃刻、千百言、河の龍門を決して呂梁に下るが如し、奔放奮迅、禦ぐべからざるなり、諸彥盛集、題を分ち韻を探る毎に、衆皆沉思す、獨、先生飲啖笑傲し、傍人なきが若し、遽に筆を把り一揮すれば、珠玉幘に滿つ、而して神趣妙造、迥に常情に出づ、殆んど探索經營の及ぶ所に非ず、余、詩人を閱する多し、未だ先生の捷且工なるが如き者あらざるなり。

探索經營之所及也、余閱詩人多矣、未有如先生之捷且工者也。

原偉文 卷六十五

字偉文、號天目、甲州人、任津山侯。

錦天山房詩話、天目詩雖不脫赤羽窠白、亦自矯矯。

尾芝質

字文彬、播磨人、號靜所、著一夜百詠、彼弼序而行之。

錦天山房詩話、文彬格不甚高、而間有佳句。

平義綱

字紀宗、號滄池、近江人、遊宦於越、未久辭去、屏居逢阪。

錦天山房詩話下冊

原偉文 卷六十五

字は偉文、天目と號す、甲州の人、津山侯に仕ふ。

錦天山房詩話、天目の詩、赤羽の窠白を脱せずと雖、亦自ら矯々たり。

尾芝質

字は文彬、播磨の人、靜所と號す、一夜百詠を著す、彼弼序して之れを行ふ。

錦天山房詩話、文彬格甚高からず、而して間、佳句あり。

平義綱

字は、紀宗、滄池と號す、近江の人、越に遊宦し、未だ久しからずして辭去し、逢阪に屏居す。

錦天山房詩話、滄池詩平坦、善道實際。

小西續

字伯熙、號松江、稱與右衛門、丹後淺邑人。其先石見守正智、永正中據小西城、以勇悍聞、後世失邑、以運船爲業、伯熙好學多才藝、家素豪富、而性磊落不羈、築聚景樓於松江之上、日夕吟哦其上、客至輒置酒款待、琴詩酒書畫禪、隨其所好、莫不歡洽、人稱爲琴詩酒書畫禪道人、遂以自號、嘗游京攝、從江村北海而學詩、與萬子琴田子明片孝秩岡公翼賴千秋、皆禮卿輩交、名聲頗著、著有松江近體詩。

皆川鳳伯恭曰、伯熙自少好學、長于詩、其詩不必事摹擬、而其風流蘊藉之超實與。

錦天山房詩話、滄池の詩、平坦、善く實際を道ふ。

小西續

字は伯熙、松江と號す、與右衛門と稱す、丹後淺邑の人、其先、石見守正智、永正中、小西城に據る、勇悍を以て聞ゆ、後世、邑を失ひ、運船を以て業と爲す、伯熙學を好む才藝多く、家素と豪富、而して性磊落不羈、聚景樓を松江の上に築き、日夕、其上に吟哦す、客至れば輒置酒款待し、琴詩酒書畫禪、其好む所に隨ひ、歡洽せざる者なし、人稱して琴詩書畫禪人と爲す、遂に以て自ら號とす、嘗て京攝に遊び、江村北海に従ひて詩を學び、萬子琴、田子明、片孝秩、岡公翼、賴千秋、皆禮卿輩と交り、名聲頗著る、著に松江近體詩あり。

皆川鳳伯恭曰、伯熙少より學を好み、詩に長ず、其詩必しも摹擬を事とせず、而して其風流蘊藉の超たる、

古人合此固足列作者之林以傳于後世、  
 從應暹安道曰、伯照常坐聚景樓、言詠不  
 倦、朝暉夕陰、變易乎外、雨奇晴好、吟哦乎  
 中、亦頗得江山之助、更互秀發。

太田象伯巍曰、伯照詩、富麗瀟灑、體裁興  
 致、隨境而變。

錦天山房詩話、伯照詩不甚多、而一時名  
 流、自菅博士胤長以下十數人、皆有題言、  
 卷末又附錄諸人贈言唱和、蓋生長於僻  
 邑、饒於資、而急於名者爾。

### 白木彰

字有常、西讚人、所著有半山集。

錦天山房詩話、半山詩纖弱、微有風致。

### 藤義鄰

實に古人と合す、此れ固より作者の林に列し、以て後  
 世に傳ふるに足れり。

從應暹安道曰、伯照常に聚景樓に坐し、言詠、倦まず  
 朝暉夕陰、外に變易し、雨奇晴好、中に吟哦し、亦頗江  
 山の助を得、更に互に秀發す。

太田象伯巍曰、伯照の詩、富麗瀟灑、體裁興致、境に隨  
 ふて變ず。

錦天山房詩話、伯照の詩甚多からず、而して一時の名  
 流菅博士胤長より以下十數人、皆題言あり、卷末に又  
 諸人の贈言唱和を附録す、蓋僻邑に生長し、資に饒に  
 して名に急なる者のみ。

### 白木彰

字は有常、西讚の人、著す所半山集あり。

錦天山房詩話、半山の詩纖弱なるも、微しく風致あり。

### 藤義鄰

字季德、號峨眉。

錦天山房詩話、峨眉詩淺易、然如鴈影雲

連、水一聯、可稱佳句。

山田君豹卷六十六

字文蔚、號月洲、稱喜三右衛門、薩摩人、仕

于本藩、初學川口靜齋、後學伊東澹齋、二

人竝鳩巢高足弟子、

王文治 禹卿曰、諸作取材漢魏、脫骨三唐、

氣體清高、神韻凝永、駸駸乎去古不遠矣、

若夫言微旨達、語淺情深、朱絃疏越之音、

清廟明堂之奏、則存乎閉戶者之多歲月、

耳、江楓單句亦足以稱海外之奇也。

錦天山房詩話、月洲詩、工力深厚、句響而

字穉、才秀而氣逸、近世作者未見其比、而

字是季德、峨眉と號す。

錦天山房詩話、峨眉の詩は淺易なり、然れども「鴈影、雲水に連る」の一聯の如き、佳句と稱すべし。

山田君豹卷六十六

字は文蔚、月洲と號す、喜三右衛門と稱す、薩摩の人、本藩に仕ふ、初め川口靜齋に學ぶ、後伊東澹齋に學ぶ、二人竝に鳩巢の高足弟子。

王文治 禹卿曰、諸作、材を漢魏に取り、骨を三唐に脱し、氣體清高、神韻凝永、駸々乎として古を去ること遠からず、若し夫れ言微に旨達し、語淺く情深し、朱絃疏越の音、清廟明堂の奏は、則閉戶者の多歲月に存するのみ、江楓單句、亦以て海外の奇と稱するに足る。

錦天山房詩話、月洲の詩、工力深厚、句響にして字穉、才秀て氣逸す、近世作者未だ其比を見ず、而して其名甚

其名不甚著何也、得無非由其居僻遠而然乎、其在鄉也、會王夢樓來聘于琉球、月洲寄其集、而乞評、夢樓亟稱焉、余訪求其集多年、頃日始獲諸其鄉人、即其手書者、夢樓評語宛在、而塵蠹狼藉、前後斷爛、殆不可讀、如更遲數年、則將朽腐漸滅、難復辨識焉、劍埋豐城、珠沉滄海、精光衝斗、神物復出、豈非其精神所注有鬼神呵護、雖暫湮晦而終不可磨滅乎。

### 宮重信義

錦天山房詩話、信義以下四人、未詳何人、蓋川口靜齋門人、余於故紙堆中、得其草稿一冊、即彙集乞靜齋刪正者、不忍其湮滅、故各錄一二首、以附月洲後。

錦天山房詩話下冊

著はれざるは何ぞや、其居の僻遠に由りて然るに非ざる無きを得んや、其郷に在るや、王夢樓の琉球に來聘するに會ふ、月洲、其集を寄せて評を乞ふ、夢樓亟稱す、余其集を訪求すること多年、頃日始めて諸を其郷人に獲たり、即、其手書する者、夢樓の評語、宛として在り、而して塵蠹狼藉、前後斷爛、殆んど讀むべからず、如し更に數年を遅くせば、則將に朽腐漸滅して、復辨識し難からんとす、劍豐城に埋まれ、珠、滄海に沈む、精光斗を衝き、神物復出つ、豈、其精神の注ぐ所、鬼神の呵護するあり、暫、湮晦すと雖、終に磨滅す可からざるに非ずや。

### 宮重信義

錦天山房詩話、信義以下四人、未だ何人なるを詳にせず、蓋川口靜齋の門人なり、余、故紙堆中に於て、其草稿一冊を得たり、即彙集して靜齋の刪正を乞ふ者、其湮滅に忍びず、故に各、一二首を録し、以て月洲の後に附す。



## 岡長祐

字子申、號長洲、讚岐人、髫髻已識聲韻、弱冠詩名冠於一州、負笈東遊、學林祭酒門、詩名益振、後遊京師、會讚岐懷侯、廣召才藝士、辟爲文學、所著詩亡、虛數千首、晚年燬火、沒後、其子伯憲拾摭燼餘、校刊行於世。

錦天山房詩話、余閱來青軒詩稿、衆體頗備、其五絕小品、最雋永、有味、亦近世之矯矯者、後藤世鈞守中曰、其出處去就、動息悲歡、一見之篇、詠良、芸之伯耕曰、子申之詩、若青山綠水、生流流通、化功自然、而無斧鑿、二子之言、雖不無過譽、要頗得其勢、勢云。

## 岡長祐

字は子申、長洲と號す、讚岐の人、髫髻已に聲韻を識る、弱冠にして詩名一州に冠たり、笈を負ふて東遊し、林祭酒の門に學ぶ、詩名益振ふ、後、京師に遊ぶ、讚岐懷侯が廣く才藝の士を召くに會ふ、辟されて文學と爲る、著す所の詩、亡、虚數千首、晩年火に燬く、没後、其子伯憲、燼餘を拾摭し、校刊して世に行ふ。

錦天山房詩話、余來青軒詩稿を閱するに、衆體頗備、其五絕小品、最雋永にして味あり、亦近世の矯々たる者、後藤世鈞守中曰、其出處去就、動息悲歡、一に之を篇詠に見はずと、良、芸之伯耕曰、子申の詩、青山綠水の若し、生々流通し、化功自然、而して斧鑿なしと、二子の言、過譽無きにあらずと雖、要するに頗其勢を得たりと云ふ。

小瀬良正

加賀人。

江村綾君錫曰、此詩、○按指咏海風陽時白石鳩巢二

先生極稱其工緻、以故傳播一時、到今膾

炙人口、其詳見金澤披抄。

山脇敬美以下五人竝金澤作者、當時鳩

巢先生爲藩文學、陶化之美可觀。

石川正恆卷六十七

字伯卿、號麟洲、稱平兵衛、平安人、自幼好

學、負才氣、先輩皆期其有成、初從柳滄洲、

堀南湖、學、比弱冠、其父拉來江戶、見某生、

生卽出修辭家所作難澀文試之、伯卿一

目便能成誦、生驚歎、及壯應小笠原侯徵、

誘掖後進、其啓迪作興之功尤多、嘗著辨

小瀬良正

加賀の人。

江村綾君錫曰、此詩白石鳩巢二先生、極めて其工緻を稱す、故を以て一時に傳播し今に到るまで人口に膾炙す、其詳なるは金澤披抄に見ゆ。

山脇敬美以下五人、竝に金澤の作者、當時鳩巢先生は藩の文學たり、陶化の美觀るべし。

石川正恆卷六十七

字は伯卿、麟洲と號す、平兵衛と稱す、平安の人、幼より學を好み、才氣を負ひ、先輩、皆其成るあるを期す、初め柳滄洲、堀南湖に従ふて學ぶ、弱冠の比ひ、其父拉して、江戸に來り、某生に見ゆ、生、卽、修辭家の作る所の難澀の文を出して、之れを試む、伯卿、一目して便ち能く誦を成す、生驚歎す、壯に及び、小笠原侯の徵に應じ、後進を誘掖す、其啓迪作興の功尤多し、嘗て辨道解蔽を著して、徂徠を彈刺す、寶曆己卯、父を京

道解蔽、彈刺徂徠、寶曆己卯省父于京、會疾作、遂不起、年五十三。

江村綬君錫曰、伯卿爲人謹恪、而藻思亦蔚然矣。

錦天山房詩話、麟洲遺詩不甚多、而句格秀整、宜乎其不敢低頭於護園也。

### 上柳美啓

字公通、平安人、學於向井滄洲、所著有蘊古堂詩藁六卷。

錦天山房詩話、余嘗得蘊古堂集而讀之、意象之超越、音韻之清婉、匠意鑄詞、色具體備、洵足稱近世名家矣、惜其人履歷不詳、名字僅存、而蛙鳴蟬噪之徒、喧聒於一時、孤芳無援、抱香自死、若非有遺集、則將

に省し、會疾作り、遂に起たず、年五十三。

江村綬君錫曰、伯卿、人と爲り謹恪、而して藻思亦蔚然たり。

錦天山房詩話、麟洲遺詩、甚多からず、而して句格秀整、宜なるかな、其敢て護園に低頭せざることや。

### 上柳美啓

字は公通、平安の人、向井滄洲に學ぶ、著す所、蘊古堂詩藁六卷あり。

錦天山房詩話、余、嘗て蘊古堂集を得て之れを讀む、意象の超越、音韻の清婉、匠意鑄詞、色具體備、洵に近世の名家と稱するに足る、惜むらくは其人履歷詳ならず、名字僅に存す、而して蛙鳴蟬噪の徒、一時に喧聒し、孤芳擧らるゝ無く、香を抱きて自ら死す、若し遺集有るに非ざれば、則將に名字を併せて湮没せんとす、噫。

## 併名字而瀕沒焉噫

小栗元愷卷六十八

字子佐、號鶴臯、若狹人、其先宗丹、以善畫著、其子宗栗、徙居小濱、子佐、即宗栗七世孫也、幼而好學、嗜詩、遂負笈遊京、學詩柳川滄洲、滄洲奇稱其才、復客游尾張、變姓名、稱佐木才八、岡崎荊谷二侯前後並辟、皆辭疾不就、亡幾還鄉、屏跡負郭、孝奉二親、教授諸生、明和丙戌九月病卒、無子、門人吹田定孝繼志、與其養子尙素編其遺藁、名曰鶴臯遺稿。

江村綴君錫曰、鶴臯實丹其頂者、九臯仙禽矣、使鶴臯當時在護園詩社、彼此煽揚、則聲名到今、煥炳于海內、而鶴臯不爲之

小栗元愷卷六十八

字は子佐、鶴臯と號す、若狹の人、其先宗丹、畫を善くするを以て著はる、其子宗栗、居を小濱に徙す、子佐は、即宗栗の七世の孫なり、幼にして學を好み、詩を嗜む、遂に笈を負ひ京に遊ぶ、詩を柳川滄洲に學ぶ、滄洲其才を奇稱す、復た尾張に客游し、姓名を變じ、佐々木才八と稱す、岡崎荊谷二侯、前後並に辟す、皆疾と辭して就かず、幾ばくもなくして郷に還る、負郭に屏跡し、二親に孝奉し、諸生に教授す、明和丙戌九月病んで卒す、子なし、門人吹田定孝志を繼ぎ、其養子尙素と、其遺藁を編し、名づけて鶴臯遺稿と曰ふ。

江村綴君錫曰、鶴臯は實に其頂を丹にする者、九臯の仙禽なり、鶴臯をして、當時、護園詩社にあらしめば、彼此煽揚し、則聲名今に到るまで、海内に煥炳せん、而して鶴臯之れを爲さず、其人、北海の濱に僻在し、

焉其人僻在北海濱、懷壁衝門、九阜清嘖、人無聞知、悲夫。

那波師曾 孝卿曰、鶴阜於詩、傲者也、傲至其極、可以擬所、傲也、置諸明季嘉隆之際、以法與詞、通其志焉、則未知驪珠屬於誰家耳。

西依景翼 翼夫曰、鶴阜之詩、一據清麗閒暇之格、而不尙雕刻纂組之工、是以雖不足勁健驚人、而又無容冶調笑之體、鶴阜之於詩、可謂非常流者也。

錦天山房詩話、鶴阜近體詩、優柔雅正、頗近唐音、假令居通邑大都、銜燿聲華、則自足雄長詞壇、而屏跡海濱、不近名利、其高情逸韻、實可嘉尙也。

壁を衝門に懷く、九阜の清嘖人、聞知する無し、悲いかな。

那波師曾 孝卿曰、鶴阜の詩に於けるは傲ふ者なり、傲ふて其極に至らば、以て傲ふ所に擬すべきなり、諸を明季嘉隆の際に置き、法と詞とを以て、其志を通せば、則未だ驪珠の誰が家に屬するかを知らざるのみ。

西依景翼 翼夫曰、鶴阜の詩は、一に清麗閒暇の格に據りて、而して雕刻纂組の工を尙ばず、是を以て勁健人を驚かすに足らずと雖、而も又容冶調笑の體なし、鶴阜の詩に於ける、常流の者に非ずと謂ふべし。

錦天山房詩話、鶴阜の近體詩は、優柔雅正、頗唐音に近し、假し令通邑大都に居り聲華に銜燿せしめば、則自ら詞壇に雄長たるに足らん、而して跡を海濱に屏け、名利に近かず、其高情逸韻、實に嘉尙すべきなり。

福世謙

字益夫、號紫山、又號觀瀾、泉南人、任岸和

田侯、爲監察、著有石室詩鈔七卷。

錦天山房詩話、益夫自題其集云、東海芙蓉

蓉之山巖有石室、是余不朽之宅也、古人

著書必藏諸名山、以俟千載之知者、豈徒

高尙其事也、與哉、蓋欲無是非於當世也、

余意在焉、今閱其集、亦祖述嘉萬而小異、

其體裁者、而刻意處頗駢美、古人宜乎其

高自標置也。

香山彰

字吉甫、號適園、又號三樂、平安人、少受業

武梅龍、後從江村北海遊、又就源栲亭、質

問經義、竝以精敏見賞、性溫雅、篤好詩及

福世謙

字は益夫、紫山と號す、泉南の人、岸和田侯に仕へ、監  
察と爲る、著に石室詩鈔七卷あり。

錦天山房詩話、益夫自ら其集に題して云ふ、東海芙蓉  
の山巖に石室あり、是れ余の不朽の宅なり、古人書を  
著せば、必、諸を名山に藏し、以て千載の知を俟つ者  
は、豈徒に其事を高尙にするのみならんや、蓋、當世  
に是非なからんことを欲するなり、余が意焉に在り、  
今、其集を閱するに、亦嘉萬を祖述し而して小しく其  
體裁を異にする者、而して意を刻する處、頗美を古人  
に勝ぶ、宜なるかな、其高く自ら標置するや。

香山彰

字は吉甫、適園と號す、又、三樂と號す、平安の人、少  
ふして業を武梅龍に受け、後、江村北海に従ふて遊  
ぶ、又、源栲亭に就き、經義を質問し、竝に精敏を以て  
賞せらる、性、溫雅、篤く詩及び書を好み、廣福親王

書畫仕廣福親王爲侍讀、春遇甚優、天明戊申、京師大火、其家亦罹災、乃買地、維東鷲麓之野、葺小屋以居、命曰東隴菴、日延諸友、詠吟以爲娛、王特賜資爲刻其集、卽今所傳東隴菴集者也。

源之熙君續曰、吉甫之詩、大氏所尙、在氣與體、掄材不以世、取其所長、以爲己有、一掃軌近腐勦之弊、自成一家。

柴邦彦彦輔曰、吉甫之詩、奇麗閑雅、養之以洛納風月、其響琅然、清而揚、又其所題詠、山水花木、皆余所曾習觀、而牽戀者矣、故詩至輒必風簷燒香而誦之、未嘗不如身在其間、相與酬對優游也。

太田象伯魏曰、吉甫博學洽聞、篤嗜辭藻、

に仕へて侍讀と爲る、春遇甚優る、天明戊申、京師大火、其家亦災に罹る、乃、地を東隴菴麓の野に買ひ、小屋を葺し、以て居り、命じて東隴菴と曰ふ、日に諸友を延き、詠吟して以て娛と爲す、王特に資を賜ひ、爲に其集を刻す、卽今傳ふる所の東隴菴集といふ者なり。

源之熙君續曰、吉甫の詩、大氏尙ぶ所は、氣と體とに在り、材を掄る、に世を以てせず、其所長を取り、以て己れの有と爲し、軌近腐勦の弊を一掃し、自ら一家を成す。

柴邦彦彦輔曰、吉甫の詩、奇麗閑雅、之れを養ふに洛納の風月を以てす、其響琅然として、清く揚る、又、其題詠する所、山水花木、皆余の曾て習觀して牽戀する所の者なり、故に詩至れば、輒必風簷に香を燒きて之れを誦し、未だ嘗て身、其間に在り、相與に酬對優游するが如くならずんばあらず。

太田象伯魏曰、吉甫、博學洽聞、篤く辭藻を嗜み、兼て

兼善書畫、平素口占吟行、觸境而樂矣、以故藻思虎變、雄視于詞壇、文陣辭鋒之士、厥角惟崩矣。

江村綾君錫曰、吉甫之詩不規規于唐宋元明、不拘拘于氣格聲律、而所作自是海西之詩、雖一章一句絕無海東之俗習、是其至者、卽可以不朽也。

柚木 太淳 中素曰、適園香山先生、胸著天地精靈之氣、其觸興隨感、爲詩爲歌、爲文爲賦、粲爛芬濃、鮮妍清幽、與四時之所發洩、同見造化之妙用、行止俯仰、咸得適意矣、適園之名、寔其然哉。

杉岡 道啓 公曙曰、吉甫體製格力、推奉韓柳、苞括百家、綺縮繡錯、玄機在握、卓識所

書畫を善す、平素、口占吟行、境に觸れて樂む、故を以て藻思虎變し、詞壇に雄視し、文陣辭鋒の士、厥角惟れ崩る。

江村綾君錫曰、吉甫の詩、唐宋元明に規々たらす、氣格聲律に拘々ならず、而して作る所自ら是れ海西の詩、一章一句と雖、絶えて海東の俗習なし、是其至れる者、卽以て不朽なるべし。

柚木 太淳 中素曰、適園香山先生、胸に天地精靈の氣を著へ、其興に觸れ、感に隨ひ、詩と爲り歌と爲り、文と爲り、賦と爲る、粲爛芬濃、鮮妍清幽、四時の發洩する所と、同じく造化の妙用を見る、行止俯仰、成な意に適するを得たり、適園の名、寔に其れ然るかな。

杉岡 道啓 公曙曰、吉甫體製格力、韓柳を推奉し、百家を苞括す、綺縮繡錯、玄機握に在り、卓識存する所、流



存、不爲流弊所煽動焉、且詩妍華緻密、坦坦露地、能出新奇不止。

錦天山房詩話、適園五七言律、清麗旖旎、頗臻其妙、佳句殊夥、香豔動人、古體雖微遜焉、亦自淡雅可悅、我每閱他人集、輒苦其多、讀未過半、已生欠伸、如此集、則忠其易終編也、嗚呼才之不可已有如此哉。

## 伊藤縉卷六十九

字君夏、號錦里、又號鳳陽、稱莊治、平安人、龍洲長子、幼學於家庭、以經藝著聞、與伊藤東所齊名、人呼曰京師兩伊藤、雖婦女無不知其名者、資性慎重、不好近名、有請謁者、一皆謝絕之、襲父爲越前侯文學、在職四十餘年、雖數祇役、江戶若福井、奉職

弊の煽動する所と爲らず、且詩、妍華緻密、坦々露地、能く新奇を出だして止まず。

錦天山房詩話、適園五七言律、清麗旖旎、頗其妙に臻り、佳句殊に夥く、香豔人を動かす、古體は微しく遜ると雖、亦自ら淡雅悦ぶ可し、我毎に他人の集を閲するに、輒其多きに苦しむ、讀んで未だ半を過ぎざるに、已に欠伸を生ず、此集の如きは、則其編を終へ易きを患ふるなり、嗚呼、才の已むべからざる此の如きあるかな。

## 伊藤縉卷六十九

字は君夏、錦里と號す、又鳳陽と號す、莊治と稱す、平安の人、龍洲の長子、幼にして家庭に學び、經藝を以て著聞す、伊藤東所と名を齊しくす、人呼んで京師の兩伊藤と曰ふ、婦女と雖、其名を知らざる者なし、資性慎重、名に近づくを好まず、謁を請ふ者あれば、一に皆之れを謝絶す、父に襲ぎて越前侯の文學と爲る、在職四十餘年、數江戶若くば福井に祇役すと雖、奉職惟謹み、外交を爲さず、休暇に當り、京に在り經を説

惟謹不爲外交、嘗休暇在京說經授徒、足不踰國、所居壁上書志士不忘在溝壑之語、以自警、常訓子弟曰、爲士者不可不念此、又嘗云、終日不省己過、便絕聖賢之旨、終日喜言人過、便傷天地之和、與二弟北海儋叟聲價高於一時、錦里以經藝聞、北海以歌詩儋叟以文章、博士佩蘭清公稱爲伊藤氏三珠樹、安永元年卒、年六十三、私諡文恪、著有遊翠館集、尋海草、尋山草、錦天山房詩話、錦里華彩不及二弟、然亦自典雅。

### 江村綬

字君錫、號北海、稱傳左衛門、播磨人、伊藤龍洲第二子、出爲江村毅庵後、因冒其氏、襲

錦天山房詩話下冊

き徒に授く、足、國を踰えず、居る所の壁上に、志士は溝壑に在るを忘れずの語あり、以て自ら警む、常に子弟に訓へて曰、士たる者、此れを念はざるべからずと、又嘗て云ふ、終日、己の過を省みざれば、便ち聖賢の旨を絶つ、終日喜んで人の過を言へば、便ち天地の和を傷つくと、二弟、北海儋叟と、聲價一時に高し、錦里は經藝を以て聞え、北海は歌詩を以てし、儋叟は文章を以てす、博士、佩蘭清公、稱して伊藤氏の三珠樹と爲す、安永元年卒す、年六十三、私に文恪と諡す、著に遊翠館集、尋海草、尋山草あり。

錦天山房詩話、錦里華彩は二弟に及ばず、然ども亦自ら典雅なり。

### 江村綬

字は君錫、北海と號す、傳左衛門と稱す、播磨の人、伊藤龍洲の第二子、出で、江村毅庵の後と爲る、因て其氏を冒す、職を襲きて官津に仕ふ、初め龍洲の家、災に

職仕宮津、初龍洲家罹災、妻河村氏、寓其兄家、生君錫於播磨、比弱冠在舅氏許、未嘗知學、好爲俚歌、時人目爲錦心繡腸、赤石梁蛻巖一見愛其才、勸使學、謂曰、以子才氣、專心吟咏、必有盛名、君錫大感悟、始志於學、晝夜研鑽、手不釋卷、名亞兄、錦里尤長於談論、其講經史、剖析窈眇、精義入神、人稱爲三珠樹中第一、以文學仕宮津、九年、其君知有吏才、擢爲京邸留守、兼掌錢穀出納、後侯移封郡上、欲大用之、不果而卒、於是致仕、築對梢館於平安室町、以翰墨自娛、諸侯聘問、一皆謝絕、其說經一從朱子、又述家祖專齋剛齋之遺說、未嘗自發一說、常譏世人以己意駁朱說者、其

罹る、妻河村氏其兄の家に住し、君錫を播磨に生む、弱冠の比、舅氏の許に在り、未だ嘗て學を知らず、好んで俚歌を爲る、時に人目して錦心繡腸と爲す、赤石の梁蛻巖一見して其才を愛し、勸めて學ばしむ、謂つて曰、子の才氣を以て心を吟咏に專にせば、必盛名あらんと、君錫大に感悟し、始めて學に志す、晝夜研鑽し、手に卷を釋かず、名、兄に亞ぐ、錦里尤も談論に長ず、其經史を講ずる、窈眇を剖析し、精義神に入る、人稱して三珠樹中の第一と爲す、文學を以て宮津に仕ふ、九年、其君、吏才あるを知り、擢んでられて京師の留守と爲り兼ねて錢穀出納を掌る、後、侯封を郡上に移す、大に之れを用ひんと欲す、果さずして卒す、是に於て致仕し、對梢館を平安の室町に築き、翰墨を以て自ら娛む、諸侯の聘問、一に皆謝絶す、其經を説く、一に朱子に従ひ、又、家祖、專齋、剛齋の遺說を述べ、未だ曾て自ら一說を發せず、常に世人が己の意を以て朱說を駁する者を譏る、其歌詩は遺邇に播揚す、

歌詩播揚遠邇、四方慕悅者甚多、才俊之士、多出其門、時大阪片山猷、孝秩、江戶入江貞子實、竝號北海、當時稱曰三都三海、以江村氏爲之冠云、天明八年二月二日卒、年七十六、著有蟲諫、樂府類解、授業編、諸子擲英、日本詩史、日本經學考、杜律刪注、北海詩文鈔等十數種。

那波 師曾 孝卿曰、君錫存志乎詩書、寓辭乎詠歌、余每輒謂彼其資性發達、英華醜郁、不假思練、不費刻畫、如騶虞之不殺、如竊脂之不殺、不學而成、不勉而得、未幾聞其改舊聯也、心竊感焉、漸見其衣袖皆穿、唇吻生花、爬羅剔抉、弗得弗措、更問所製、則肆而不放、樂而不流、雅生深粹、愈足可

四方慕悅する者甚多し、才俊の士、多く其門に出づ、時に大阪の片山猷、孝秩、江戸の入江貞子實、竝に北海と號す、當時、稱して三都の三北海と曰ふ、江村氏を以て之れが冠と爲すと云ふ、天明八年二月二日卒す、年七十六、著に蟲諫、樂府類解、授業編、諸子擲英、日本詩史、日本經學考、杜律刪注、北海詩文鈔等十數種あり。

那波 師曾 孝卿曰、君錫、志を詩書に存し、辭を詠歌に寓す、余、毎に輒謂ふ、彼、其の資性發達、英華醜郁、思練を假らず、刻畫を費さず、騶虞の不殺の如く、竊脂の不殺の如く、學ばずして成り、勉めずして得、未だ幾くならずして、其舊聯を改むるを聞き、心竊に感ず、漸く見るに、其衣袖皆穿ち、唇吻花を生ず、爬羅剔抉、得ざれば措かず、更に所製を問へば、則肆して放たず、樂しんで流れず、雅止深粹、愈々喜ぶべきに足る、試みに世の摸擬竊、青を取り白を妃し、肥皮厚肉、柔

喜試與世之模擬竄竊、取青妃白、肥皮厚肉、柔筋脆骨、力屈體疲而止者、視之猶奏金石以破蟋蟀之鳴、蟲飛之聲、要之君錫之於詩、性類神徹、其才高者耳。

錦天山房詩話、北海罷官後、以商榷風雅、誘掖後進爲己任、廣通聲氣、喧聒一世、輕薄之徒藉其成名、故其得譽、全在於此、其取毀亦在於此矣、要之有詩才而無詩學、故集中雖多佳句、惜其體在弱、局於方程、不能展拓。

## 清絢

字君錦、初字元瑛、號儋叟、又號孔雀樓主人、清田氏、稱文興、平安人、伊藤龍洲季子、龍洲以出冒伊藏氏、使君錦復本姓、蚤學

筋脆骨、力屈體疲れて止む者と、之れを視ふれば、猶ほ金石を奏し、以て蟋蟀の鳴、蟲飛の聲を破るがごとし、之れを要するに、君錫の詩に於ける、性類神徹、其才高き者のみ

錦天山房詩話、北海官を罷むる後、風雅を商榷し、後進を誘掖するを以て己れの任と爲す、廣く聲氣に通じ一世に喧聒す、輕薄の徒、其成名を藉る、故に其譽を得る、全く此に在り、其毀を取るも亦此に在り、之れを要するに、詩才ありて詩學なし、故に集中佳句多しと雖、惜むらくは、其體在弱、方程に局せられて、展拓すること能はず。

## 清絢

字は君錦、初の字は元瑛、儋叟と號す、又孔雀樓主人と號す、清田氏、文興と稱す、平安の人、伊藤龍洲の季子、龍洲出で、伊藤氏を冒する以て、君錦をして本姓に復せしむ、蚤く家庭に學び、父の蔭を以て擲でられ

于家庭、以父蔭擢爲越藩儒官、優遇與錦里均、總角時訪梁蛟巖於赤石、寓于其家、數十日、及歸、蛟巖有贈言曰、勿慕曠達而棄彝倫、勿耽藻繪而廢大業、君錦終身誦此、後與齋靜齋講究物氏學、喜古文辭、後悟其非、經義一以朱子爲主、文章專以歐蘇爲法、晚年喜讀稗官小說、尤精於象胥學、深懲其初年從事時習、屢語門人曰、才生於學、學不由才、將作僞唐詩乎、黃金鑄歷下生、將作眞唐詩乎、鐵鞭打歷下生、爲首長爲奴隸、在其人而已、性不好酒、酷嗜糖菓、晚年以食糖之多、終得痰塞之病、天明五年卒、歲六十七、著有史記律、資通治鑑批評、五雜俎纂注、唐詩府藝苑談、藝苑

て越藩の儒官と爲る。優遇、錦里と均し、總角の時、梁蛟巖を赤石に訪ひ、其家に寓す、數十日、歸るに及び、蛟巖贈言あり、曰、曠達を慕ふて彝倫を棄ること勿れ、藻繪に耽りて大業を廢すること勿れと、君錦終身此れを誦す、後ち齋靜齋と、物氏の學を講究す、古文辭を喜び、後、其非を悟る、經義一に朱子を以て主と爲す、文章は専ら歐蘇を以て法と爲す、晚年喜んで稗官小説を讀み、尤、象胥の學に精し、深く其初年時習に従事するに懲り、屢、門人に語けて曰、才は學に生ず、學は才に由らず、將に僞唐詩を作らんとするか、黃金歷下生を鑄よ、將に眞唐詩を作らんとするか、鐵鞭歷下生を打て、首長と爲り、奴隸と爲る、其人に在るのみと、性、酒を好まず、酷、糖菓を嗜む、晩年に糖を食ふの多きを以て終に痰塞の病を得たり、天明五年卒す、歲六十七、著に史記律、資通鑑批評、五雜俎纂注、唐詩府、藝苑談、藝苑譜、孔雀樓筆記、孔雀樓集あり。

譜孔雀樓筆記孔雀樓集

錦天山房詩話僖叟詩爽豁高朗在三珠樹中固屬第一不唯文章爲然也。

平長孺卷七十

字仲和號雷首尾張人少受業於紀平洲遊學江都後仕伊勢某侯不合辭去下帷京師以教授爲業性卓犖不羈好諧謔遊於縉紳間皆得其驩心著有蠶烟焦餘集

琴希聲春樵曰仲和服巾蕭散不復有經

濟意詩筆縱橫或能雜諧謔談鸚鵡羣處許以陪筵鳳皇池邊幾於入彀每有賢主招邀衆賓會集金樽綠滿銀燭紅燃未嘗不含杯而拈鬚擊臙而裁錦也。

源龜□□曰仲和曩時卓落不惜千金揮

錦天山房詩話僖叟の詩爽豁高朗三珠樹中に在りて、固より第一に屬す、唯文章を然りと爲すのみにあらず。

平長孺卷七十

字は仲和、雷首と號す、尾張の人、少ふして業を紀平洲に受く、江都に遊學し、後、伊勢某侯に仕ふ、合はずして辭去す、帷を京師に下し、教授を以て業と爲す、性、卓犖不羈、諧謔を好み、縉紳の間に遊ぶ、皆其の驩心を得たり、著に蠶烟焦餘集あり。

琴希聲春樵曰、仲和、服巾蕭散、復た經濟の意あらず、詩筆縱橫、或は能く諧謔の談を雜ゆ、鸚鵡群る處、許すに陪筵を以てす、鳳皇池邊人彀に幾かり、賢主招邀し、衆賓會集するある毎に、金樽に綠滿ち、銀燭に紅燃ゆ、未だ嘗て杯を含みて鬚を拈り、臙を擊きて錦を裁せずんばあらざるなり。

源龜□□曰、仲和、曩時卓落、千金を惜まず、揮霍して

霍致産業傾圮、既出仕而又不合、近移京而年已邁矣、而身志與少壯者無異、馳逐吟哦、毫無萎蕤之氣象、蓋內有自怡者也。摩島長弘子毅曰、翁之淡出乎天、夫淡則奇也、奇則淡也、淡者自然之謂也、自然則其觸而發者、真機活潑、無往而不奇矣。

錦天山房詩話、仲和好遊王公大人間、故日野藤公資愛、博士清公宣明以下、皆序其集、頗極推重、然其詩卑促、殊不稱。

龍公美 卷七十四

字君玉、一名元亮、字子明、號草廬、松菊主人、竹隱、吳竹翁、明窗、綠蘿洞、皆其別號、稱彦次郎、後稱衛門、伏見人、少孤、聰慧負奇氣、初業賈、傍研究經史、嘗謁宇明、受

産業の傾圮を致せり、既に出仕して、又合はず、近ころ京に移りて、年已に邁けり、而して身志、少壯者と異なるなし、吟哦に馳逐し、毫も萎蕤の氣象なし、蓋内自ら怡ぶ者あるなり。

摩島長弘子毅曰、翁の淡は天に出づと、夫れ淡は則奇なり、奇は則淡なり、淡は自然を之れ謂ふなり、自然は則其觸れて發する者、真機活潑、往くとして奇ならざるは無し。

錦天山房詩話、仲好んで王公大人の間に遊ぶ、故に日野藤公資愛、博士清公宣明以下、皆其集に序し、頗推重を極む、然るに其詩卑促、殊に稱はず。

龍公美卷七十四

字は君玉、一に元亮と名づく、字は子明、草廬と號す、松菊主人、竹隱、吳竹翁、明々窗、綠蘿洞は、皆其の別號なり、彦次郎と稱す、後、衛門と稱す、伏見の人、少ふして孤なり、聰慧にして奇氣を負ふ、初め賈を業とす、傍、經史を研究す、嘗て宇明に謁し、其誨督を受く、



其誨督好讀唐明諸家集專以歌詩爲事明霞以其徒留意於浮華絕之於是發憤力學改業爲儒下帷授徒性寬緩溫雅博綜衆技從遊之士四方雲集寬延三年遊事彥後根賜宅於彥根城中而移焉恩禮頗優在彥根十八年抗疏乞骸骨退居於東山菊谷杜門謝客專事著述晚年深悔爲虛名所誤雖有請其詩文及書字者皆辭不應生平雖尸祝物徂徠祖述其說步趨少異於唐則推李青蓮岑嘉州於明則取劉青田謝四溟最善書寬政四年卒年七十八所著有毛詩證論語詮名錄典餘貴貞志日本志刪辭略伏水志南遊草龍氏筆乘草廬集等

好んで唐明諸家集を讀む専ら歌詩を以て事と爲す明霞其徒に意を浮華に留むるを以て之れを絶す是に於て發憤力學業を改め儒と爲り帷を下して徒に授く性寬緩溫雅博く衆技を綜べ從遊の士四方より雲集す寬延三年彥根侯に遊事す後宅を彥根城中に賜ひ而して移る恩禮頗優なり彥根に在ること十八年抗疏して骸骨を乞ひ退いて東山菊谷に居る門を杜き客を謝し専ら著述を事とす晚年虛名の誤る所となるを悔ひ其詩文及び書字を請ふ者ありと雖皆辭して應ぜず生平物徂徠を尸祝し其説を祖述すと雖步趨少しく異なり唐に於いては則李青蓮岑嘉州を推し明に於いては則劉青田謝四溟を取る最善を著くす寬政四年卒す年七十八著す所毛詩證論語詮名錄典餘貴貞志日本志刪辭略伏水志南遊草龍氏筆乘草廬集等あり

東條耕子藏曰、草廬養於母氏。一年、家資殆盡、不衣食、偶有平安筆匠某見而啓之、乞養爲子、攜歸平安、母氏守寡在郷、每月贈其費資、曾作思郷詩云、總角辭家客洛陽、秋風一望白雲長、歸心不爲尊鱸美、衰白慈親在故郷、時年十三也。

錦天山房詩話、草廬風流儒雅、傲睨一時、聲名藉甚、然學術空疎、名過於實、故其詩多浮響、而少實際。

葛張 卷七十五

字子琴、號蠶庵、又號小園叟、橋本氏、稱貞元、浪華人、業醫、少聰慧、最善詩、平生善祇南海詩、後入片北海混沌社、名聲大振、寛政中卒、諸友私諡曰、檜園詩老、所著葛氏

東條耕子藏曰、草廬、母氏に養はるゝこと一年、家資殆んど盡く、衣食せず、偶平安の筆匠某あり、見て之れを啓み、乞ふて、養ふて子と爲す、携へて平安に歸る、母氏寡を守りて郷に在り、毎月、其費資を贈る、曾て郷を思ふ詩を作りて云ふ、「總角家を辭して洛陽に客たり、秋風一望白雲長し、歸心は尊鱸の美の爲にあらず、衰白の慈親は故郷に在り」と、時に年十三なり。

錦天山房詩話、草廬風流儒雅、一時に傲睨す、聲名藉甚、然るに學術空疎、名實に過ぐ、故に其詩、浮響多く、而して實際少なし。

葛張 卷七十五

字は子琴、蠶庵と號す、又小園叟と號す、橋本氏、貞元と稱す、浪華の人、醫を業とす、少ふして聰慧、最詩を善くす、平生、祇南海の詩を喜び、後片北海の混沌社に入り、名聲大に振ふ、寛政中卒す、諸友私に諡して檜園詩老と曰ふ、著す所の葛氏漫草小園摘稿は、皆其徒の輯録する所なり。

漫草小園摘稿、皆其徒所輯錄。

江村綬君錫曰、靈庵初學詩於兄臧宗者、  
甘谷不啻出藍也。

龜井魯道載曰、高陽谷嘗爲余品隲海內  
作家曰、浪華有葛張・合離、陽谷抱負極高、  
而稱詩如是、二子之能可知也、晚近京攝  
間、杼柚一變、務爲艱深纖巧之語、大傷體  
格、雖二子不能無染汗之患、亦醉明季初  
清厭陳喜新者之毒耳。

孔文雄

字世傑、號生駒山人、又號鳴鶴、河内日下  
鄉人、卽日下首之裔也、中世改族、稱若松、  
又更森、至世傑、復舊姓、日下一作孔舍衛、  
故修爲孔氏、稱真藏、家世農夫、世傑好學、

江村綬君錫曰、靈庵、初め詩を兄臧宗者甘谷に學ぶ、  
嘗に出藍のみにあらざるなり。

龜井魯道載曰、高陽谷、嘗て余が爲に海内の作家を品  
隨す、曰、浪華に葛張・合離ありと、陽谷、抱負極めて  
高く、而して詩を稱する是の如し、二子の能知るべき  
なり、晚近、京攝の間、杼柚一變し、務めて艱深纖巧の  
語を爲す、大に體格を傷る、二子、染汗の患なき能は  
ずと雖、亦明季初清、陳を厭ひ新を喜ぶ者の毒に醉  
ふのみ。

孔文雄

字は世傑、生駒山人と號す、又鳴鶴と號す、河内日下  
郷の人、卽ち日下首の裔なり、中世族を改めて若松と  
稱す、又森と更む、世傑に至り、舊姓に復す、日下一に  
孔舍衛に作る、故に修して孔氏と爲す、真藏と稱す、  
家世農夫、世傑、學を好み、古文辭に巧みなり、著に慶

巧古文辭、著有慶延文斷及生駒山人集、  
寶曆二年卒、年四十一。

元維寧 卷七十八

字文邦、號淡淵、稱曾七郎、三州人、本姓福尾氏、出贅中西氏、中西者原秋元氏庶族、故修爲元、仕尾藩上卿竹腰氏、食祿二百石、童亂時、從父縱觀、韓使過尾府、正使書記姜耕牧見之、謂譯士曰、此兒有異相、他日必以文學名、與筆墨而去、弱冠志學、刻勵讀書、倦輒隱几生睡、竟不就寢、容貌魁梧、垂手過膝、資性溫和、動止縝重、府文學木蘭阜稱曰、亮節偉望、足以敦天下之鄙後、辱其君來、江戶、請業者日益多、君命築講堂於芝三島街、曰叢桂社、其講經不拘、

延文斷及生駒山人集あり、寶曆二年卒す、年四十一。

元維寧 卷七十八

字は文邦、淡淵と號す、曾七郎と稱す、三州人、本姓は福尾氏、出で、中西氏に贅す、中西は原と秋元氏の庶族、故に修して元と爲す、尾藩の上卿竹腰氏に仕ふ、祿二百石を食む、童亂の時、父に従ひて、韓使の尾府を過ぐるを縦觀す、正使書記姜耕牧之れを見、譯士に謂つて曰、此兒異相あり、他日必文學を以て名あらんと、筆墨を與へて去る、弱冠學に志し、刻勵して書を讀み、倦めば輒ち几に隱りて睡を生ず、竟に寢に就かず、容貌魁梧、手を垂るれば膝を過ぐ、資性溫和、動止縝重、府の文學木蘭阜稱して曰く、亮節偉望、以て天下の鄙を敦くするに足ると、後、其君に辱して江戶に來る、業を請ふ者日に益多し、君命じて講堂を芝三島街に築き、叢桂社と曰ふ、其經を講ずる、漢宋に拘執せず、常に學者に謂つて曰、聖人の道は、學問の深淺に在らず、全く徳を成し才を育し、其器用を盡くすに在るのみと、人と爲り敦厚沈默、人と競はず、交遊極

執漢宋常謂學者曰聖人之道不在學問  
 深淺全在成德育才盡其器用耳爲人敦  
 厚沈默與人不競交遊極寡雖有盛名行  
 不由本者皆辭不見常以名節相勸門人  
 若南宮大湫伊藤冠峯紀平洲河天門飛  
 圭洲慈東柯皆著聞於世寶曆二年七月  
 十五日疾卒歲四十四臨疾革舉平生所  
 著書悉燒之。

錦天山房詩話淡淵文集余未及觀之諸  
 選家錄者亦甚寥寥豈其人不屑以詩賦  
 傳後抑翰墨非其所長乎。

## 南宮岳

字喬卿號大湫又號煙波釣叟稱彌六信  
 濃人本姓井上氏父勝字子克世仕尾張

めて寡し、盛名ありと雖行、本に由らざる者、皆辭  
 して見ず、常に名節を以て相勸む、門人南宮大湫伊藤  
 冠峯紀平洲河天門飛圭洲慈東柯の若き、皆世に著  
 聞す、寶曆二年七月十五日疾んで卒す、歲四十四、疾  
 革るに臨んで、平生著す所の書を舉げて、悉く之れを  
 燒く。

錦天山房詩話、淡淵文集、余未だ之れを觀るに及ばず、  
 諸選家錄する者亦甚寥寥たり、豈んど其人、詩賦を以  
 て後に傳ふるを屑とせざるか、抑翰墨は其所長に非  
 ざるか。

## 南宮岳

字は喬卿、大湫と號す、又、煙波釣叟と號す、彌六と稱  
 す、信濃の人、本姓は井上氏、父勝、字は子克、世、尾張

上卿竹腰氏少孤從元淡淵學蚤有神童之稱官遊平安無幾去教授伊勢桑名從遊甚衆學既淵茂立志以篤實忠誠自勵其教子弟抑浮華而先德行其自處履實理而無虛動居止進退動依禮義不苟言笑鄰近化其德皆以爲真君子年四十東遊江戶教授生徒王侯士庶請業者闐溢門庭四方生徒寓其塾者常二三十人三都名士莫不與締交最與紀平洲交善安永七年三月三日卒享年五十一所著有論語說述義孝經指解補注今文尙書定本纂禹貢指掌圖考學庸旨考春秋三傳批考守成編勸學編講餘獨覽積翠閑言病餘瑣言芸窗放言漁翁私言大湫集

の上卿竹腰氏に仕ふ少ふして孤なり元淡淵に從ふて學ぶ蚤に神童の稱あり平安に官遊す幾くもなくして去りて伊勢桑名に教授す從遊甚衆し學既に淵茂志を立つるに篤實忠誠を以て自ら勵む其子弟を教ふるに浮華を抑えて德行を先にす其自ら處するには實理を履んで虛動なし居止進退動もすれば禮義に依り苟言笑せず鄰近其德に化し皆以て真君子と爲す年四十東江戶に遊び生徒に教授す王侯士庶の業を請ふ者門庭に闐溢し四方の生徒其塾に寓する者常に二三十人三都の名士與に締交せざるは莫し最紀平洲と交はり善し安永七年三月三日卒享年五十一著す所論語說述義孝經指解補注今文尙書定本纂禹貢指掌圖考學庸旨考春秋三傳批考守成編勸學編講餘獨覽積翠閑言病餘瑣言芸窗放言漁翁私言大湫集あり

錦天山房詩話大湫詩和平、如其爲人、祇王詞雖少傷繁弱、然較諸服南郭小督詞、似贏一籌、先是和知青郊有祇王曲、不及大湫遠甚矣。

## 紀德民

字世馨、細井氏、號平洲、又號如來山人、稱甚三郎、小字外衛、尾張人、系出于紀長谷雄孫雄文、隱于河州細井郷、子孫因氏焉、裔孫岑克移參州、其曾孫雄貞、奉仕東照大君、姊河之役有功、後退隱於尾之平洲、邑業農、慶長中徵之不起、雄貞玄孫正長、稱甚十郎、生二子、季卽世馨也、當母娠時、數夢三辰、世馨生有黑痣、在眉鬢之間、自然成七星象、幼好讀書、歲十六遊學京師、

錦天山房詩話大湫の詩和平、其人と爲りの如し、祇王詞少しく繁弱に傷ふと雖、然も諸を服南郭の小督詞に較ぶるに、一籌を贏するに似たり、是より先き和知青郊、祇王曲あり、大湫に及ばざる遠きこと甚し。

## 紀德氏

字は、世馨、細井氏、平洲と號す、又、如來山人と號す、甚三郎と稱す、小字は外衛、尾張の人、系、紀の長谷雄の孫雄文に出づ、河州細井郷に隱る、子孫因て氏とす、裔孫岑克、參州に移る、其曾孫雄貞、東照大君に奉仕す、姊河の役に功あり、後、尾の平洲邑に退隱し、農を業とす、慶長中之れを徵せども起たず、雄貞の玄孫正長、甚十郎と稱す、二子を生む、季は卽世馨なり、母娠める時に當り、數三辰を夢む、世馨生れて黑痣あり、眉鬢の間に在り、自然に七星の象を、成す、幼にして讀書を好み、歲十六、京師に遊學す、會、元淡淵、叢桂社を尾に結ぶ、世馨、其風を聞いて之を説び、遂に之

會元淡淵結叢桂社於尾、世馨聞其風說之、遂師事之、後遊長崎、日夜研精講業、居三年、聞母疾、卽東歸、淡淵先徙居東都、世馨乃往從之、遂家東都、下帷教授、從游日盛、安永九年、尾侯召見、命爲侍讀、班列親衛隊將、廩米三百包、禮遇日厚、進兼明倫堂督學、乃薦國耆儒及弟子若干人、以充學職、學政大振、後益賜百包、又改爲歲祿四百石、超數等進、班親衛騎將上、寬政二年、兼世子侍讀、時米澤侯上杉治憲、尤尊信其學、請尾侯、邀世馨於其國、以賓師遇之、創立學館、討論政治、百廢悉舉、閩國靡然嚮風、米澤治教之績、顯聞海內、皆世馨之力云、享和元年六月二十九日疾卒、

れに師事す、後、長崎に遊び、日夜研精して業を講ず、居ること三年、母の疾を聞き、卽ち東歸す、淡淵先に居る東都に徙す、世馨乃往て之れに従ふ、遂に東都に家す、帷を下して、教授す、從遊日に盛んなり、安永九年、尾侯召見し、命じて侍讀と爲す、親衛隊將に班列し、廩米三百包を賜ひ、禮遇日に厚し、進んで明倫堂督學を兼ね、乃、國の耆儒及び弟子若干人を薦め、以て學職に充つ、學政大に振ふ、後百包を益し賜ふ、又改めて歲祿四百石と爲す、數等を超え、親衛騎將の上に進班す、寬政二年、世子侍讀を兼ね、時に米澤侯上杉治憲、尤其學を尊信し、尾侯に請ひ、世馨を其國に邀え、賓師を以て之れを遇し、學館を創立し、政治を討論し、百廢悉く舉る、閩國靡然として風に嚮ふ、米澤治教の績海内に顯聞するは、皆、世馨の力と云ふ、享和元年六月二十九日疾んで卒す、年七十四、著す所、詩經、考詩經古傳、毛鄭異同、猷芹錄、平洲小語、遊松島記、櫻嶋集等あり、米澤侯從四位下侍從上杉治憲、□□



年七十四所著有詩經夷考、詩經古傳、毛鄭異同考、獻芹錄、平洲小語遊松島記、鳴館集等。米澤侯從四位下侍從上杉治憲、口口誌其墓曰：先生風格清貴、威儀可仰、其接人溫恭、居家安靜、未嘗疾言遽色、每讀書、少焉則沉思、語門人曰：學思相須、先聖之教也。故先聖常雖小事、熟思不苟、至機得理到、則雖大事、必勇往不疑、其說經、一守師訓、而其獨得處、卓然則有見矣。平生好稱人美、不容于口、聞惡而不言、其教人循循有序、諸生有過、必從容諷諭、以待自悔悟、先生之學、尤長政事、諸侯延受業者、必問以政、然其所爲謀、終身措口不言、往復之書、不存其稿、故無知其詳。

其墓に誌して曰、先生風格清貴、威儀仰ぐ可し、其人に接する溫恭、居家安靜、未だ嘗て疾言遽色せず、毎に書を読み、少焉あつて則ち沈思し、門人に語けて曰、學思相須つは、先聖の教なりと、故に先聖は、常に小事と雖、熟思して苟せず、機得、理到るに至りては、則大事と雖、必勇往して疑はずと、其經を説く、一に節訓を守る、而して其獨得の處は、卓然として則見あり、平生好んで人の美を稱して、口に容れず、惡を聞いては言はず、其人を教ふる循々として序あり、諸生過あらば、必從容諷諭、以て自ら悔悟するを待つ、先生の學、尤政事に長ず、諸侯延いて業を受くる者、必問ふに政を以てす、然して其爲に謀る所、終身措口して言はず、往復の書、其稿を存せず、故に其詳を知る無し。

小河鼎士鉉曰、先生講業東都五十年矣、諸侯之國賴焉以起學、以興政者甚多、從遊之士、業成道通、各矜式其國、若高尚不仕、下帷稱育英者、不可勝數也、其卒也、自米澤西條人吉諸列侯、降封爵之尊、修師弟之分、篤服心喪、以終制焉、他可知也。

樺島公禮世儀曰、先生爲學、一守師訓、其讀書主提大義、不拘拘乎字句、講經姑据古注爲解、而至其獨得之見、則超然別有不屑諸注者、嘗謂有天地而有人、有人而有聖人、有聖人而有聖經、聖人之於人類也、今以其類讀其書、有不言之妙存于其間矣、夫妙可思而得焉、不可揭而示之於人也、故古今注家、謂之釋章句、則可矣、謂

小河鼎士鉉曰、先生業を東都に講ずる五十年、諸侯の國、焉に賴て以て學を起し以て政を興す者甚多し、從遊の士、業成り道通じ、各其國に矜式す、若くは高尚にして仕えず、帷を下して育英と稱する者、勝けて數ふべからず、其卒するや米澤西條人吉、諸列侯より、封爵の尊を降り師弟の分を修め、篤く心喪に服し、以て制を終る、他知るべきなり。

樺島公禮世儀曰、先生、學を爲す、一に師訓を守り、其讀書、主として大義を提けて、字句に拘々たらず、經を講ずるには姑く古注に据りて解を爲す、而して其獨得の見に至りては、則超然として別に諸注を屑とせざる者あり、嘗て謂ふ、天地ありて而して人あり、人ありて而して聖人あり、聖人ありて而して聖經あり、聖人の人に於けるは類なり、今、其類を以て其書を讀む、不言の妙、其間に存するあり、夫れ妙は思ふて得べし、掲げて之れを人に示すべからず、故に古今の注家、之れを章句を釋くと謂はざると則、可なり、之れを經を釋くと謂ふは則不可なり、之れを經を釋くと謂へば則可なり、其以て今日に施すべきに至ては則未だ

之釋經則不可也、謂之釋經則可矣、至其可以施于今日則未盡也、又曰、聖學之要在子成德、不在學流、故各學其學、各道其道、搖唇鼓舌與人爭門戶、吾不取也、又曰、凡育人才、宜如農夫養菜、不要如愛菊者養菊、養菜美惡兼培、各有所用、養菊者見不如己意者、必刈而棄之、其槩如此、故先生之門、學無區域、使人人從所好、講之、務在子成材德、

錦天山房詩話、士之讀書學道、不得行抱負之萬一、抑鬱齋志、以歿千古同歎、獨平洲奮於田間、而一旦爲諸侯師、得君行道、四方風動、所至之國、其君擁篲倒屣、不敢抗禮、儒者之得志、近古未見、其比焉、是雖

蓋さどるなりと、又曰、聖學の要は徳を成すに在り、學流に在らず、故に各、其學を學とし、各、其道を道とす、唇を搖かし舌を鼓し、人と門戶を争ふは、吾れ取らざるなりと、又曰、凡そ人才を育ふは、宜しく農夫の菜を養ふが如くなるべし、菊を愛する者の菊を養ふが如くなるを要せざれば、菜を養ふには、美惡兼ねて培ふ、各、用ふる所あり、菊を養ふ者は、己れの意の如くならざる者を見れば、必刈りて之れを棄つと、其槩此の如し、故に先生の門、學に區域なし、人々をして好む所に從ひ、之れを講せしめ、務めは材徳を成すに在り。

錦天山房詩話、士の書を讀み道を學び、抱負の萬一を行ふことを得ず、抑鬱志を齎して歿するは、千古同歎なり、獨、平洲は田間に奮ひ、而して一旦諸侯の師と爲る、君を得、道を行ふ、四方風動し、至る所、國、其君、篲を擁し屣を倒にし、敢て抗禮せず、儒者の志を得る、近古未だ其比を見ず、是れ其才學大に人に出づる者あるに由ると雖、亦其時に遇ふなり、其詩は南宮大

由其才學有大出乎人者、亦遇其時也、其詩與南宮大湫相伯仲、整練不及、而多自得之趣、固似勝之。

伊藤一元卷七十九

字吉甫、號冠峯、伊勢人、家世巨商、少尙質素、不修儀容、日夜讀書、淡於勢利、以家產委之兄弟、遊學尾張、受業於元淡淵、又好醫、在尾五年、後遊歷諸州、晚年隱居於美濃笠松里、買田數頃、而自養、徜徉山水、讀書講業、教授子弟、動止以禮、鄉里慕悅、其在尾、與南宮喬卿情交尤密、元淡淵東行之後、其門人從事經義者、推喬卿、操練歌詩者、推吉甫、有醫生玄澤者、家素富豪、頗

湫と相伯仲す、整練及ばざるも、而も自得の趣多し、固より之れに勝るに似たり。

伊藤一元卷七十九

字は吉甫、冠峯と號す、伊勢の人、家世、巨商、少ふして質素を尙び、儀容を修めず、日夜書を讀み、勢利に淡し、家産を以て、之れを兄弟に委ね、尾張に遊學し、業を元淡淵に受く、又、醫を好み、尾に在ること、五年後、諸州に遊歷し、晚年、美濃笠松の里に隱居し、田數頃を買ひて自ら養ふ、山水に徜徉し、書を讀み業を講ず、子弟を教授し、動止禮を以てす、郷里慕悅す、其尾に在る、南宮喬卿と情交尤密なり、淡淵、元東行の後、其門人、經義に従事する者は、喬卿を推し、歌詩を操練する者は吉甫を推す、醫生玄澤といふ者あり、家素と富豪、頗、學を好み、吉甫の才を愛し、妹を以て之れに妻し、贊襄して益其業を修めしむ、意、喬卿を壓するに在り、吉甫、其意を悟り、目疾ありと稱して業を廢し其

好學、愛吉甫才、以妹妻之、養襄使益修其業、意在壓番卿、吉甫悟其意、稱有目疾、而廢業、使其門人皆從學于番卿、遂辭而歸郷、移居江戸、以妻奴託於族人、約使人迎之、而番卿罹災、無力迎之、吉甫乃典田宅、得金十五兩爲妻擊治裝、使人護送、番卿感其義、還其金、辭而不受、性謙虛、番卿屢勸徙居江戸、爲教授、不肯、紀平州亦欲薦諸尾府、爲儒員、又不肯、辭曰、抗顏稱儒者、非吾所能及也、常謂居足以容膝、衣足以覆體、食足以滿腹、樂足以忘憂、我日安、豈願其餘哉、天明中年七十餘而卒、著有自放編、冠峰文集、綠竹園詩集。

江村毅君錫曰、使冠峰身在都下、馳騁藝

門人をして、皆番卿に従學せしむ、遂に辭して郷に歸る、彼番卿、居を江戸に移し、妻孥を以て族人に託し、人をして之れを迎えしむるを約す、而して番卿災に罹り、力之れを迎ふるなし、吉甫、乃田宅を典し、金十五兩を得、妻孥の爲に裝を治め、人をして護送せしむ、番卿其義に感じ、其金を還す、辭して受けず、性謙虛、番卿屢、居を江戸に徙し、教授を爲さんことを勸む、肯んぜず、紀平州も亦諸を尾府に薦め、儒員と爲さんと欲す、又肯んぜず、辭して曰、抗顏、儒者と稱するは、吾が能く及ぶ所に非ざるなりと、常に謂ふ、居は以て膝を容るゝに足る、衣は以て體を覆ふに足る、食は以て腹に滿つるに足る、樂みは以て憂を忘るゝに足る、我日、に安す、豈其餘を願はんや、天明中、年七十餘にして卒す、著に自放編、冠峰文集、綠竹園詩集あり。

江村 君錫曰、冠峯をして身都下に在りて、藝苑に馳

范、則其歌詩之名不讓於赤羽護洲之諸子、惜哉。

錦天山房詩話、輒近俗濟、友道不古、陽相厚而陰相排、擠坑下石、滔滔皆是也、況文人相輕、不但今日、如冠峯之大湫、實曠世美事、足以激濁勸頑、豈辭章之云乎哉。

### 赤松鴻

字國鸞、號滄洲、本姓大川、稱鴻平、播磨人、遊學平安、從字明霞、受業、以講說爲業、赤穗侯辟爲文學、享和元年卒、年八十一、著有周易便覽、尙書獨斷論語省解、讀孟子一得錄、靜思亭集等。

錦天山房詩話、滄洲詩雖乏警拔、間有佳句。

聘せしめば、則其歌詩の名、赤羽護洲の諸子に譲らざらん、惜ひかな。

錦天山房詩話、輒近俗濟、友道古ならず、陽に相厚ふして、陰に相排し、坑に擠し石を下だす、滔滔皆是れなり、況んや文人相輕んずるは、但に今日のみならず、冠峯と大湫との如きは、實に曠世の美事、以て濁を激し頑を勸ますに足れり、豈辭章を之れ云はんや。

### 赤松鴻

字は國鸞、滄洲と號す、本姓は大川、鴻平と稱す、播磨の人、平安に遊學し、字明霞に従ひ、業を受け、講說を以て業と爲す、赤穗侯辟して文學と爲す、享和元年卒す、年八十一、著に周易便覽、尙書獨斷論語省解、讀孟子一得錄、靜思亭集等あり。

錦天山房詩話、滄洲の詩は警拔に乏しと雖、間、佳句あり。

## 井通熙

## 井通熙

字叔、號蘭臺、又號圃南、井上氏、稱嘉膳、江戶人、父通翁、字玄璠、大府醫員、幼聰敏、好學、弱冠從天野曾原學、既而入林鳳岡之門、享保中、鳳岡奉命、授官庫書、通熙亦與焉、元文五年、備前侯辟爲教授、其爲學不專、主伊洛、自成一家、頗似徂徠、自少絕姪欲、其於婦人、無老少、不欲交、一語訪人、雖

字は叔、蘭臺と號す、又、圃南と號す、井上氏嘉膳と稱す、江戸の人、父通翁、字は玄璠、大府の醫員、幼にして聰敏、學を好み、弱冠、天野曾原に從ひて學ぶ、既にして林鳳岡の門に入る、享保中、鳳岡、命を奉じて、官庫の書を授す、通熙、亦與れり、元文五年、備前侯辟して教授と爲す、其學たる、専ら伊洛を主とせず、自ら一家を成す、頗、徂徠に似たり、少より姪欲を絶つ、其婦人に於ける、老少となく、一語を交ふるを欲せず、人を訪ふて、宴飲方に酣なりと雖、婦女出づれば速に辭し去る、著に山陽行錄北越行錄圃南稿あり。

宴飲方酣、婦女出則速辭去、著有山陽行錄、北越行錄、圃南稿。

原善公道曰、蘭臺年十二、元日賦詩云、天邊雲物改、海上日華新、先酌屠蘇酒、趨庭獻老親、父異之、期以他日盛名。

原善公道曰、蘭臺、年十二、元日に詩を賦して云ふ、天邊雲物改り、海上日華新なり、先づ屠蘇の酒を酌み、庭に趨りて老親に獻すと、父之れを異とし、期するに他日の盛名を以てす。

錦天山房詩話、蘭臺壽躋耆者、講誦不輟、

錦天山房詩話、蘭臺、壽耆者に躋り、講誦輟まず、世推

世推爲醇儒詩特其緒餘耳。

### 皆川愿

字伯恭、號淇園、又號筇齋、稱文藏、京師人、生而穎異、四五歲能識字、其父試書少陵秋興八首授之、不日成誦、由是課讀書一過卽記、弟成章亦夙慧、父多蓄書籍、使二子縱觀、又使遍交耆宿、於是業益進、年甫十五、與成章見韓客而倡和、及長潛思、字學恆謂不知字義、則文不能作、書不能解、而字書訓詁往往假借、乃類集古人用字之例、又取諸象形、求諸聲音、字義既通、文理始晰、而後讀古人之書、則明自如、揭日矣、作名疇六篇及易詩書儀禮戴記春秋語孟釋解、以立一家學、弟子著籍者凡三

して醇儒と爲す、詩は特に其緒餘のみ。

### 皆川愿

字は伯恭、淇園と號す、又、筇齋と號す、文藏と稱す、京師の人、生れて穎異、四五歳にして能く字を識る、其父試みに少陵の秋興八首を書して之れを授く、日ならずして誦を成す、是に由りて讀書を課するに、一過して卽ち記す、弟成章も亦夙慧、父多く書籍を蓄へ、二子をして縱觀せしむ、又遍く耆宿に交らしむ、是に於て業益進む、年甫て十五、成章と韓客を見て倡和す、長ずるに及び、思を字學に潛め、恆に謂ふ、字義を知らざれば則ち文作ること能はず、書解すること能はず、而して字書訓詁往々假借す、乃ち古人の用字の例を類集し、又、諸を象形に取り、諸を聲音に求め、字義既に通じ、文理始めて晰かなり、而して後古人の書を讀めば、則明なること、自ら日を掲ぐるが如しと、名疇六篇及易詩書儀禮戴記春秋語孟釋解を作り、以て一家の學を立つ、弟子籍に著する者凡そ三千餘人、平日人を待つに、貴賤を分たず、迎えず送らず、公卿諸侯、弟子の禮を執る者甚衆し、平戸侯最敬重す、文化丁卯卒



千餘人、平日待人、不別貴賤、不迎不送、公卿諸侯執弟子禮者甚衆、平戶侯最敬重、文化丁卯卒、年七十四、門人私諡曰弘道先生、平戶侯爲製碑文、膳所侯書字。

角田簡 大可曰、淇園爲人溫厚沈毅、寬于容物、敏于行事、不立名節、不事矜飾、事父母、待弟妹、皆得其驩心、博學淹通、以經學文章、名重海內、然迄晚年、好豪華、甚嗜酒、愛絲竹、時挾歌妓、縱飲鴨河之上、又有乞詩文書畫者、則不擇其人、隨貨賂應之、時論或以是少之。

## 宮崎奇

字子常、號筠圃、尾張海西郡人、幼從父遷家平安、受業伊藤東涯、東涯亡、又從蘭嶋

す、年七十四、門人私に諡して弘道先生と曰ふ、平戶侯爲に碑文を製し、膳所侯字を書す。

角田簡 大可曰、淇園、人と爲り温厚沈毅、物を容るゝに寛に、事を行ふに敏なり、名節を立てず、矜飾を事とせず、父母に仕へ弟妹を待つ、皆其驩心を得たり、博學淹通、經學文章を以て、名、海内に重し、然れども晩年に迄り、豪華を好み、甚酒を嗜み、絲竹を愛し、時に歌妓を挾み、鴨河の上に縱飲す、又、詩文書畫を乞ふ者あらば、則其人を擇ばず、貨賂に隨ひ、之れに應ず、時論或は是を以て之れを少とす。

## 宮崎奇

字は子常、筠圃と號す、尾張海西郡の人、幼にして父に從ひ、家を平安に遷し、業を伊藤東涯に受く、東涯

父死爲服、喪三年、菜粥僅給、而貧亦益甚、母長尾氏戒之曰、窮當益堅、遺命勿護、於是益肆力經史、工詩及書畫、尤名畫竹、得者珍藏、比之拱璧、性溫孝、謙下、不以行能加人、無少長賢愚、皆禮待之、聞一善言、見一善行、必錄而藏焉、母歿、亦爲三年喪、安永甲午病卒、年五十八、正二位、大納言源信通親製碑文、士林榮之。

### 中井積善

字子慶、號竹山、稱善太、大阪人、薨菴長子、少與弟積德、師五井蘭洲、蘭洲死、兄弟相與講習、切劇、爲人豪邁、容貌瑰傑、接人不立、崖岸、談笑裕如、問難諧謔、博學洽聞、貫綜古今、以王魯齋自比、不喜俗儒、雖崇尊

亡し、又、蘭嶼に従ふ、父死す、爲に喪に服すること、三年、菜粥僅に給す、而して貧亦益々甚し、母、長尾氏之れを戒めて曰、窮しては當に益堅かるべし、遺命護るゝ勿れと、是に於て益、力を經史に肆にす、詩及び書畫に工みなり、尤、畫竹に名あり、得る者珍藏し、之れを拱璧に比す、性溫孝謙下、行能を以て人に加へず、少長賢愚と無く、皆之れを禮待す、一善言を聞き、一善行を見れば、必錄して焉を藏す、母歿す、亦三年の喪を爲す、安永甲午病んで卒す、年五十八、正二位大納言源信通、親しく碑文を製す、士林之れを榮とす。

### 中井積善

字は子慶、竹山と號す、善太と稱す、大阪の人、薨菴の長子なり、少ふして弟積德と、五井蘭洲を師とす、蘭洲死す、兄弟相與に講習切劇す、人と爲り豪邁、容貌瑰傑、人に接するに、崖岸を立てず、談笑裕如たり、問難諧謔を雜ゆ、博學洽聞古今を貫綜し、王魯齋を以て自ら比し、俗儒を喜ばず、程朱を崇尊すと雖、微疑あるに至りては、則犁然として明辨し、經旨を得るを以て

程朱至有微疑、則犁然明辨、以得經旨爲主、肥後辛島鹽井嘗問其學淵源曰、吾學非林非山崎、一家宋學、性慷慨有大志、詩文雄渾雅健、如其爲人、撰逸史十二卷、議論痛切、大府命進其書、賞以時服、故白川侯定信巡視大阪、厚禮引見、使講經、又諸以時務、乃退作草茅危言、以獻焉、初、麓洲創懷德書院、請三宅石庵爲院長、麓菴蘭洲及石庵子春樓、相續教授、至此子慶代爲院長、寬政四年書院罹火、乃如江都、請再建之、官賜黃金三百兩、以充實用、於是學者益進、薩摩肥後二侯皆重祿聘之、不應、及老、自號溧翁、又號雪翁、文化元年卒、年七十五、私謚曰文惠先生、所著非徵詩

主と爲す、肥後の辛島鹽井嘗て其學の淵源を問ふ曰、吾が學は林に非ず山崎に非ず、一家の宋學と、性慷慨にして大志あり、詩文雄渾雅健、其人と爲りの如し、逸史十二卷を撰す、議論痛切、大府命じて其書を進めしめ、賞するに時服を以てす、故白川侯定信大阪に巡視し、厚禮引見し、經を講ぜしむ、又諸ふに時務を以てす、乃退いて草茅危言を作り以て獻す、初め麓洲、懷德書院を創め、三宅石庵を請ふて院長と爲す、麓洲、蘭洲及石庵の子春樓、相續いで教授す、此に至りて子慶代りて院長と爲る、寬政四年書院火に罹る、乃、江都に如き、之れを再建せんことを請ふ、官、黃金三百兩を賜ひ、以て實用に充つ、是に於て學者益、進み、薩摩肥後二侯、皆重祿もて之れを聘すれども、應ぜず、老に及び、自ら溧翁と號す、又雪翁と號す、文化元年卒す、年七十五、私に謚して文惠先生と曰ふ、著す所、非徵詩律兆、莫陰略稿、世に行はる。

律兆、莫陰略稿、行于世。

篠崎應道

字安道、號三島、又號郁洲、其先伊豫人、父遷家大阪、遂什一之利、安道承其業、益殖貨財、聞輒讀書、好義輕財、屢折券拯急、以是產日落、年四十、始改業、講授生徒、素善書能詩、多藏古帖、求書者衆、精入粗、裕買舊宅、收租曰、此可以白先人矣、博學多通、著有碧沙籠集、爲人潤達、處事明快、與人言無所回避、藪孤山嘗稱其豪爽、不遜武人、文化十年卒、年七十七、無子、養子弼、字承弼、號小竹、亦著稱於世。

片山猷

字孝秩、號北海、越後新潟人、家世爲農、而

篠崎應道

字は安道三島と號す、又、郁洲と號す、其先は伊豫の人、父、家を大阪に遷し、什一の利を逐ふ、安道、其業を承け、益貨財を殖す、間に輒ち讀書す、義を好み財を輕んず、屢、券を折り急を拯ふ、是を以て産日に落つ、年四十、始めて業を改め生徒に講授す、素より書を善くし詩を能くす、多く古帖を藏す、書を求むる者衆く、精入粗、裕かなり、舊宅を買ひて又租を收む、曰此れ以て先人に白すべしと、博學多通、著に碧沙籠集あり、人と爲り潤達、事を處すること明快、人と言ふに回避する所なし、藪孤山嘗て其豪爽にして武人に遜らざるを稱す、文化十年卒す、年七十七、子なし、養子、弼、字は承弼、小竹と號す、亦世に著稱す。

片山猷

字は孝秩、北海と號す、越後新潟の人、家世農たり、

好學、僻區無師友之資、年十八、西如京師、遊宇士新門、士新歿而後、生理銷乏、父亦挈家來就、孝秩備嘗苦辛、左右奉之、克底其豫、後占居大阪爲人閑靖寡欲、無與世競、恆以澹雅自樂、岸和田侯、每有韓聘、例司大阪公館、必用文儒供其應接、於是、以客禮聘召、孝秩亦悅觀光之美也、應之、受其廩給、常與岡元鳳、葛子琴、賴千秋、尾藤志尹、田子明、篠安道結詩社、以混沌爲名、諸子推孝秩爲盟主、當時呼爲七才子、年老、家人以其老病、請用帛易布被、孝秩卻之曰、吾昔者養親、不能使輕暖、足於尊體、今吾曷以是爲、因泣下、其孝思如此、寬政二年卒、年六十八歲。

而して學を好み、僻區にして師友の資なし、年十八、西、京師に如く、宇士新の門に遊ぶ、士新歿して後、生理銷乏す、父亦家を挈けて來り就く、孝秩備に苦辛を嘗め、左右之れに奉じ、克く其豫を底す、後、居を大阪に占む、人と爲り閑靖寡欲、世と競ふ無し、恆に澹雅を以て自ら樂む、岸和田侯、韓聘ある毎に、例に大阪公館を司とるに、必、文儒を用ひて其應接に供す、是に於て客禮を以て聘召す、孝秩も亦觀光の美を悦び、之れに應じ、其廩給を受く、常に岡元鳳、葛子琴、賴千秋、尾藤志尹、田子明、篠安道と詩社を結び、混沌を以て名と爲す、諸子、孝秩を推して盟主と爲す、當時呼んで七才子と爲す、年老ひて家人其老病を以て帛を用ひて布被に易えんことを請ふ、孝秩之れを卻けて、曰、吾れ昔者親を養ふに、輕暖をして尊體に足らしむる能はず、今吾曷ぞ是を以て爲んと、因て泣下る、其孝思此の如し、寬政二年卒す、年六十八歲。

字彦輔、號栗山、讚岐人、少時東遊學于林門、英邁不群、耽思經籍、旁善詩文、學成仕阿波爲儒臣、歲俸四百石、住京師、倡宋學、以儒雅風流聞、與西依成齋赤松滄洲、皆川淇園、厚善、天明八年被大府召赴江都、爲昌平學教官、命與祭酒岡田寒泉共修學政、立五科目以造士、享保中自物徂徠排斥宋學、唱復古學、都下學者多薰染其教、故每示諭下、詆謗百出、栗山毅然不爲變、以關異術道爲己任、國學規模一新、都下學風亦從而變、稍稍知嚮程朱者、其力居多、性豁達愛士、談笑間、事涉節義、音詞激烈、感動座人、列侯厚禮延請、後賜綠還

字は彦輔、栗山と號す、讚岐の人、少時、東遊し林門に學ぶ、英邁不群、思を經籍に耽らし、旁、詩文を善くす、學成りて、阿波に仕へ、儒臣と爲ら、歲俸四百石、京師に住す、宋學を倡へ、儒雅風流を以て聞ゆ、西依成齋、赤松滄洲、皆川淇園と厚く善し、天明八年、大府の召を被むり、江都に赴く、昌平學の教官と爲る、命じて祭酒岡田寒泉と共に學政を修む、五科の目を立て、以て士を造る、享保中、物徂徠宋學を排斥し、復古學を唱えし自り、都下の學者多く其教に薰染す、故に示諭下る毎に、詆謗百出す、栗山毅然として、爲に變ぜず、異を關き道を衛るを以て己の任と爲す、國學規模一新し、都下の學風亦從而變じ、稍々程朱に嚮ふを知る者は、其力多きに居る、性豁達にして士を愛し、談笑の間、事、節義に涉れば、音詞激烈、座人を感動す、列侯厚禮延請す、後、綠を賜ひ、西城の侍讀に遷る、俸米二百包を増賜す、朝に大議あれば、輒、詢謀に列すと云

西城侍讀○按縁、祿之調、増賜俸米二百苞、朝有

大議、輒列詢謀云、文化四年病卒、年七十

二、無子、養姪爲後。

池桐孫 無絃曰、先生經術文章爲一代泰

斗、海内學者趨之如鶩、余於先生爲三世

通家、在京之日、追隨絳帳、日得仰瞻風采、

先生雖不專詩、音節天然自不可掩、長篇

大作多在初年、排纂則贈韓客百八十韻、

沈鬱則天台山百韻、皆可謂巨刃摩天之

手矣、追幕府登庸後、詩風亦變、多莊重雄

大之作、如嗟峨夜歸、畫景梅花雌鷄圖、皆

其中年詩、清麗卻可喜、晚年不爲此種詩、

亦不屑爲也、先生嘗作壇浦懷古云、黑鼠

餐牛丹水乾、六龍西幸海漫漫、簪纓滿地

ふ、文化四年病んで卒す、年七十二、子なし、姪を養ふ  
て後と爲す。

池桐孫 無絃曰、先生經術文章一代の泰斗たり、海内の

學者之れに趨くこと鶩するが如し、余、先生に於て三

世の通家たり、京に在る日、絳帳に追隨し、日に風采

を仰瞻するを得たり、先生、詩に専ならずと雖、音節

天然、自ら掩ふべからず、長篇大作、多くは初年に在

り、排纂は、則、韓客に贈る百八十韻、沈鬱は、則、天台

山の百韻、皆、巨刃、天を摩するのたとひと謂ふべし、幕府

登庸の後に追ひ、詩風亦變ず、莊重雄大の作多し、嗟

峨夜歸、畫景梅花雌鷄圖の如き、皆其中年の詩、清麗

却て喜ぶべし、晚年、此種の詩を爲らず、亦爲るを屑

とせざるなり、先生嘗て壇浦懷古を作りて云ふ、黑鼠  
牛を餐ふて丹水乾き、六龍西に幸して海漫漫、簪纓滿  
地當時の恨、獨、陶真曲裡に彈する有り」と、以て淇園  
に示す、淇園、黑鼠丹水の出處を憶ふて得ず、沈吟數  
會、先生晒つて曰、淇園大才、目、萬卷を窺ひ、一楮小故

當時恨、獨有陶真曲裡彈、以示洪園、洪園

憶黑鼠丹水出處、不得、沉吟數會○按會字疑有誤

先生哂曰、洪園大才、目窮萬卷、一樁小故

事、如何不曉得、洪園曰、老夫實不知、先生

曰、不是祕書、出於野馬臺詩、二人拍掌大

笑、余方弱齡、竊自屏後、窺之、當時以爲天

仙之會、先生題盧生圖云、一熟黃梁五十

年、幾場榮耀枕中天、滿城富貴功名客、不

識真身何處眠、未三月、先生竟歸道山、方

知一時偶作、未嘗非識。

角田簡大可曰、朝鮮聘禮下、議昌平學、栗

山執一事、颺言、林祭酒曰、此議所關非小、

先生且低聲、栗山曰、奚妨、吾聲雖大不至、

聞於朝鮮也、衆皆大笑、賴春水嘗問其著

事、如何んぞ曉り得ざると、洪園曰、老夫實に知らず、

先生曰、是れ祕書にあらず、野馬臺の詩に出づと、二

人掌を拍つて、大に笑ふ、余方に弱齡、竊に屏後より

之れを窺ふ、當時以て天仙の會と爲す、先生、盧生の

圖に題して云ふ、一熟黃梁五十年、幾場の榮耀枕中

の天、滿城の富貴功名の客、識らず真身何れの處にか

眠ると、未だ三月ならずして、先生竟に道山に歸る、

方に知る一時の偶作、未だ嘗て識に非ずんばあらざ

るを。

角田簡大可曰、朝鮮聘禮に、議を昌平學に下す、栗山、

一事を執り颺言す、林祭酒曰、此議關する所、小に非

ず、先生且低聲にせよと、栗山曰、奚ぞ妨げん、吾聲大

と颺、朝鮮に聞ゆるに至らずと、衆皆大笑す、賴春水

嘗て其著書を問ふ、曰、夫の著書なる者ありて、人に



青曰、無有夫著書者益於人也、僕之迂腐爲不急之書、或有閱之者、是損入之心目也、故僕不著書、乃所以益於人耳、謂之有著書亦可、平居奉養甚儉、然其延客供給甚豐、四方贈遺、日闌盈其門、都下儒門之盛、柴氏爲最、常欽慕蘇公、壬戌夕會諸名士、白河侯聞之、寄書遺鱸、以求座客詩歌、乃使肥後辛島鹽井爲之記、一時傳以爲雅舉。

錦天山房詩話、栗山經學深湛、庀材宏富、沉雄瑰麗、自成一家、有非塵步所能追跋者矣、然性滑稽、往往以諧謔、是其一病、古稱陸士衡、惠才多、於栗山亦然。

尾藤孝肇卷八十一

益する無し、僕の迂腐なる、不急の書を爲らば、或は之れを閱みず者あらん、是れ人の心目を損するなり、故に僕、書を著さず、乃人に益する所以のみ、之れを著書ありと謂ふも亦可なりと、平居奉養甚儉す、然れども其客を延く、供給甚豊なり、四方の贈遺、日に其門に闌盈す、都下儒門の盛、柴氏を最と爲す、常に蘇公を欽慕す、壬戌の夕、諸名士を會す、白河侯之れを聞き、書を寄せ鱸を遺り、以て座客の詩歌を求む、乃肥後の辛島鹽井をして、之れが記を爲らしむ、一時傳へて以て雅舉と爲す。

錦天山房詩話、栗山、經學深湛、庀材宏富、沉雄瑰麗、自ら一家を成す、塵步の能く追跋する所に非ざる者あり、然れども性滑稽、件々雜ふるに諧謔を以てす、是れ其の一病なり、古に稱す陸士衡、才の多きを患ふと、栗山に於いても亦然り。

尾藤孝肇卷八十一

字志尹、號二洲、一號約山、稱良佐伊豫人、少有足疾、來大阪、讀書於片山北海所、時安藝頼春水亦在大阪、得洛閩書、喜之、勸志尹讀之、志尹大喜、以爲正學、日夜鑽研、又與中井竹山兄弟親善、爲人肉角大口、音吐爽朗、識悟超詣、純守程朱、寬政中大府辟爲昌平學教官、賜俸米二百囊、與林祭酒柴栗山同議定學政、晚年退安養、老性恬淡簡易、其於古人文、愛歸震川詩、愛陶柳、又喜白傅、古賀精里以爲不可、往復論難、柴栗山爲調停之、文化十年卒、年六十九、著有素餐錄、正學指掌、稱謂私言、靜寄餘筆、冬讀書餘靜寄軒集。

角田簡大可曰、幕相某、嘗訪儒士於岡田

錦天山房詩話下冊

字は志尹、二洲と號す、一に約山と號す、良佐と稱す、伊豫の人、少ふして足疾あり、大阪に來り、書を片山北海の所に讀む、時に安藝の頼春水も亦大阪に在り、洛閩の書を得て、之れを喜び、志尹に勸めて之れを讀ましむ、志尹大に喜び、以て正學と爲し、日夜鑽研す、又、中井竹山兄弟と親善す、人と爲り肉角大口、音吐爽朗、識悟超詣、純ら程朱を守る、寬政中、大府、辟して昌平學の教官と爲し、俸米二百囊を賜ひ、林祭酒柴栗山と同じく議して、學政を定めしむ、晚年退安して老を養ふ、性恬淡簡易、其、古人の文に於ける、歸震川を愛し、詩は陶柳を愛し、又、白傅を喜ぶ、古賀精里以て不可と爲す、往復論難す、柴栗山、爲に之れを調停す、文化十年卒す、年六十九、著に素餐錄、正學指掌、稱謂私言、靜寄餘筆、冬讀書餘靜寄軒集あり。

角田簡大可曰、幕相某、嘗て儒士を岡田寒泉に訪ふ、

寒泉寒泉對曰、文辨雄豪、無若中井子慶、學識純粹、尾藤志尹爲優、賴山陽評其素餐錄曰、識悟超詣、不在明薛胡二氏之下、錦天山房詩話、約山文詩、縱橫閎肆、不及栗山、風骨遒爽、不及精里、然至其雅淡雋永、饒自得之致、則亦二家所無也、此其所以鼎足而立、自樹一幟與。

## 古賀樸

字淳風、號精里、稱彌助、本姓劉氏、肥前佐賀人、生而顯異、專精力學、殆廢寢食、二親恐其生疾、禁之、乃夜潛起、篝燈誦讀、不使二親知、及長、好王新建學、游學京師、初從福井小車、後入西依成齋門、復寓大阪、與尾藤二洲、賴春水、交密、終舍舊學、純以程

寒泉對へて曰、文辨雄豪は中井子慶に若くはなし、學識純粹は尾藤志尹を倭と爲すと、賴山陽、其の素餐錄を評して曰、識悟超詣、明の薛胡二氏以下に在らずと。

錦天山房詩話、約山文詩、縱橫閎肆は、栗山に及ばず、風骨遒爽は精里に及ばず、然れども其雅淡雋永、自得の致、饒きに至りては、則亦二家の無き所なり、此れ其鼎足して立ち、自ら一幟を樹つる所以なるか。

## 古賀樸

字は淳風、精里と號す、彌助と稱す、本姓は劉氏、肥前佐賀の人、生れて穎異精を専らにして學を力め、殆んど寢食を廢す、二親、其疾を生せんことを恐れて之れを禁ず、乃、夜潛に起きて燈を篝して、誦讀し、二親をして知らしめず、長するに及び、王新建の學を好み、京師に遊學す、初め福井小車に從ひ、後、西依成齋の門に入り、復、大阪に寓し、尾藤二洲、賴春水と交り密なり、終に舊學を捨て、純ら程朱を以て宗と爲す、學、

朱爲宗、學成而歸、藩侯任用、參預機務、事無鉅細、展盡無所諱、恆恥以文人儒生見稱、每語人曰、學也者、將修己而治人也、何暇終身矻矻攻文字乎哉、侯制設學校、命定其規制、兼行教授、事時國用不給、諸吏束手、無策、建議剗剔蠹弊、終以有濟、歲儉民饑、乃告侯賑之、士民大悅、侯益敬重之、所言無不聽、賞賜無虛月、寬政三年、從如江都、大府命說經、昌平學、七年、大府召赴江都、衆知其爲徵庸、淳風謂親老、不可遊、遊欲以病辭、老臣皆曰、大府之命不可峻拒、明年抵都、擢爲儒官、與林祭酒、柴栗山、尾藤二洲等諸儒、振勅學政、既陞教官、增月俸、班綬兩番上、文化七年、命往對馬、接

編 天山房詩話下冊

成りて歸る、藩侯任用し、機務に參預せしむ、事、細と無く展盡して諱む所なし、恆に文人儒生を以て稱せらるゝを恥づ、毎に人に語けて曰、學は將に己を修め而して人を治めんとするなり、何の暇ありてか終身矻々として文字を攻めんやと、侯、學校を制設し、命じて、其規制を定め、兼ねて教授の事を行はしむ、時に國用給せず、諸吏手を束ねて策なし、建議して蠹弊を剗剔し、終に以て濟ふあり、歲儉に民饑、乃、侯に告げて之れを賑はす、士民大に悅ぶ、侯益々之れを敬重す、言ふ所聽かれざるはなし、賞賜虛月なし、寬政三年、從ふて江都に如く、大府命じて經を昌平學に説かしむ、七年、召されて江都に赴く、衆、其の徵庸たるを知る、淳風謂ふ、親老ゆ、遠く遊ぶべからずと、病を以て辭せんと欲す、老臣皆曰、大府の命峻拒すべからずと、明年都に抵り、擢んでられて儒官となる、林祭酒、柴栗山、尾藤二洲等の諸儒と學政を振勅す、既にして教官に陞り、月俸を増し、班は兩番の上に繼る、文化七年、命せられて對馬に往き、韓使を接待す、黃金時服を賜ふ、多年督學の勤勞を以て、歲俸米百石を加ふ、十年特に命じて祿を賜ふ、人と爲り軀幹瑰梧、嚴正寡

待韓使、賜黃金時服、以多年督學勤勞、加歲俸米百囊、十年特命賜祿、爲人軀幹、瑰梧、嚴正寡默、人有不善、直面戒之、退無後言、崇尚理學、而深憎山崎門固陋之弊、故其學極博洽、一時無比、詩文所用奇字僻典、皆取之腹笥、咄嗟而成、雄偉富贍、一時列侯多賞重之、執贄受教者數十人、或詢以治道、文化十四年卒、年六十八歲、著有學庸纂釋辨誤。

樺島公禮世儀曰、精里先生德行之崇、經術之深、四方之所知而景慕、身生西鄙、而名震于大朝、一旦拔擢爲天下之宗師、榮亦至矣、加以家多賢子、龍駒鳳雛、世美可仰、是又古今儒中之所希有。

後崎彌承弼曰、精里先生正大之學、發爲

默、人不善あれば、直面之れを戒む、退いて後言なし、理學を崇尚し、而して深く山崎門固陋の弊を憎む、故に其學極めて、博洽、一時比なし、詩文用ふる所、奇字僻典、皆之れを腹笥に取り、咄嗟にして成る、雄偉富贍、一時列侯多く之れを貴重す、贄を取り教を受くる者、數十人、或は詢ふに治道を以てす、文化十四年卒、年六十八歲、著に學庸纂釋辨誤あり。

樺島公禮世儀曰、精里先生、德行の崇き、經術の深き、四方の知りて景慕する所、身、西鄙に生れて、而も名、大朝に震ふ、一旦拔擢せられて、天下の宗師と爲る、榮亦至れり、加ふるに家に賢子多きを以てす、龍駒鳳雛、世美仰ぐべし、是又古今儒中の希に有る所なり。

後崎彌承弼曰、精里先生、正大の學、發して文詩と爲

文詩、富瞻雄偉、龍騰鳳翥、觀者欽誦不能置其品評也、而先生不以自足、每一篇出、輒必與人商量議定、及其晚年、每春輯錄前年所著編、投視遠方之知舊及門人、曰有疵瑕乎、指摘無隱、知舊門人之所疑且質、或可取焉、則沛然從之、如決江河、嗚呼、是先生之所以正且大乎。

錦天山房詩話予之生也晚不及見栗山二洲二先生、尙幸逮事乎精里先生、先生嚴毅方正、使見者起敬、然愛好人才、誘掖不倦、每游復原樓及諸侯園池、輒折簡見邀、座間鬪韻揮毫、府和動至三四而不輟、至夜分而散、以爲常、先生之詩雄健遒爽、無一毫媚媚之態、殆如其爲人。

る、富瞻雄偉、龍騰鳳翥、觀る者欽誦して其品評を置く能はざるなり、而して先生以て自ら足れりとせず、一篇出る毎に、輒、必人と商量議定す、其晩年に及び、每春、前年著編する所を輯録し、投じて遠方の知舊及門人に視して曰、疵瑕あらんか、指摘して隠す無れと、知舊門人の疑ひ且質す所、或は取るべければ、則、沛然として之れに従ふこと、江河を決するが如し、嗚呼、是れ先生の正且大なる所以なるか。

錦天山房詩話、予の生るゝや晚く、栗山・二洲二先生を見るに及ばず、尙、幸に精里先生に事ふるに逮べり、先生、嚴毅方正、見る者をして敬を起さしむ、然して人才を愛好し、誘掖して倦まず、復原樓及諸侯の園池に遊ぶ毎に、輒ち簡を折りて邀へらる、座間韻を鬪し、揮毫府和し、動もすれば三四に至りて輟まず、夜分に至りて散す、以て常と爲す、先生の詩、雄健遒爽、一毫媚媚の態なし、殆んど其人と爲りの如し。

## 西山正卷八十二卷

字子雅、號拙齋、家世備中人、父祖皆業醫、幼而穎悟、十六遊大阪、學醫古林氏、因從播人岡孚齋讀經、孚齋歿、遂師事那波師會於京師、時物茂卿唱明人古文辭、子雅亦隨師會赴之、研鑽頗力、名噪京攝、既師會一日自悟其非、與子雅同棄之、益自磨礪、師會薦之聖護王府、王帝弟也、親爲點茶吹笙、禮遇甚篤、而辭歸鄉、環堵蕭然、絕意仕途、聲聞日廣、遠近來學者、日益多、阿波加賀二侯、皆遣侍儒聘問、歡迎、皆峻拒不起、愀然若無意于斯世者、然遇忠孝信義之事、賞激感嘆、言與涕俱下、一聞敗俗非聖之言、輒憤悶辯駁、不遺餘力、寬政十

## 西山正卷八十二

字は子雅、拙齋と號す、家世、備中の人、父祖、皆醫を業とす、幼にして穎悟、十六、大阪に遊び、醫を古林氏に學ぶ、因て播人岡孚齋に從ひ、經を讀む、孚齋歿し、遂に那波師會に京師に師事す、時に物茂卿、明人の古文辭を唱ふ、子雅も亦師會に隨ふて之れに赴き、研鑽頗力む、名京攝に噪し、既にして師會一日自ら其非を悟り、子雅と同じく之れを棄て、益、自ら磨礪す、師會之れを聖護王府に薦む、王は帝の弟なり、親しく爲に點茶吹笙し、禮遇甚篤し、而して辭して郷に歸る、環堵蕭然、意を仕途に絶つ、聲聞日に廣く、遠近來り學ぶ者、日に益、多し、阿波加賀の二侯、皆侍儒を遣はし、聘問して致く迎ふ、皆峻拒して起たず、愀然として、斯世に意なき者の若し、然れども忠孝信義の事に遇へば、賞激、感嘆、言、涕と俱に下る、一たび敗俗非聖の言を聞けば、輒、憤悶辯駁して餘力を遺さず、寛政十年疾んで卒す、年六十四歳、著す所、閑齋瑣言、松山遊記、芳野紀行、汗漫日記、他詩文和歌三十卷あり。

年疾卒、年六十四歲、所著有閑窓瑣言、松山遊記、芳野紀行、汗漫日記、他詩文和歌三十卷。

柴邦彦彦輔曰、余奉檄來江戶、白河源公方當國、寤寐賢才、猶饑渴、余爲歷舉一時耆德、首西山翁、公欣然意向之、即將入言發命、余因陳其高風清節、難以塵務者再三、公亦爲之顧慮、敗其高而止、是其崇信愛惜者、視之尋常賓興奉書幣奔頤者、萬萬如何也。

菅晉帥禮卿曰、拙齋先生之詩較長較佳、大長大佳、不如無根之花易萎。

賴惟柔千祺曰、先生絕句淡淡說出、其當仁見義、扼腕慷慨、有一筆萬鈞之重。

柴邦彦彦輔曰、余檄を奉じて江戶に来る、白河源公方に國に當る、賢才を寤寐すること、猶、饑渴のごとし、余爲に一時の耆德を歴舉し、西山翁を首とす、公欣然として之れに意向す、即ち將に言を入れて命を發せんとす、余因て其高風清節、干すに塵務を以てし難きを陳する者再三、公亦之れが爲に其高きを敗るを顧慮して止む、是其の崇信愛惜する者、之れを尋常賓興し、書幣を奉じ奔頤する者に視ぶるに萬々如何ぞや。

菅晉帥禮卿曰、拙齋先生の詩、較、長ければ較、佳、大に長ければ大に佳、無根の花の萎み易きが如くならず。

賴惟柔千祺曰、先生の絶句、淡々説き出だす、其仁に當り義を見はし、扼腕慷慨、一筆萬鈞の重あり。



北條謙子讓曰、徐子能云、詩乃清華之府、衆妙之門、非鄙穢人所得而學、洗去名利二字、可得其半矣、其言可愛、先生俯仰無作之言、最得風雅之本旨。

賴惟柔卷八十四

字千祺、號杏坪、稱萬四郎、安藝人、與二兄千秋、千齡、竝好學、有名、仕本藩、爲文學、後歷任三次、惠蘇奴可、三上等邑宰、在郡殆二十年、務恤民隱、大著聲稱、請致仕、見允、優游而卒、年□□□、著有春草堂詩集八卷。

後崎彌承弼曰、先生學殖醇深、著書闡明正學、既拔自學官、任郡邑之職、蓋二十年矣、芟豪強、恤老弱、寬猛竝施、郡民感悅、致

北條謙子讓曰、徐子能云、詩は乃清華の府、衆妙の門、鄙穢人の得て學ぶ所に非ず、名利の二字を洗ひ去りて、其半を得べしと、其言愛すべし、先生俯仰作る無きの言、最風雅の本旨を得たり、

賴惟柔卷八十四

字は千祺、杏坪と號す、萬四郎と稱す、安藝の人、二兄千秋、千齡と竝に學を好みて名あり、本藩に仕へ文學と爲る、後、三次、惠蘇奴可、三上等の邑宰に歷任し郡に在ること殆二十年、務めて民隱を恤ひ、大に聲稱を著はす、致仕を請ふて、允され、優游して卒す、年□□□、著に春草堂詩集八卷あり。

後崎彌承弼曰、先生學殖醇深、書を著して正學を闡明す、既に抜かれて學官より郡邑の職に任ず、蓋二十年、豪強を芟り、老弱を恤み、寬猛竝に施す、郡民感悅し、嘉禾の祥を致す、我邦儒林に希に有る所なり、而

嘉禾之祥、我邦儒林所希有矣、而其緒餘發於詩者、奇構百出、使彼劇目、錄心之徒、汗流且僵乎其後矣。

菅晉帥禮卿曰、千祺詩、既非前輩大聲壯語、又異今時骯穢輕佻、特述其所遭、而意至筆隨、民艱吏情、曲丁肯綮、雖傳奇小說所不易言、然入諸詩律、而優游餘綽、語近而不俚、意深而不鑿、洵稱前無古人、嗚呼亦奇矣。

又曰、誠齋秋崖善言瑣事、而意在搜陰險、千祺則平平出之、而奇在其中。

賴襄子成曰、杜少陵與蘇端詩云、近來海內爲長句、汝與山東李白好、可見長古難做、雖盛唐人已稱罕有、況在晚近、方今風

して其緒餘詩に發する者、奇構百出す、彼の劇目、錄心の徒をして、其後に汗流れ且つ僵れしむ。

菅晉帥禮卿曰、千祺の詩、既に前輩の大聲壯語に非ず、又、今時の骯穢輕佻に異り、特に其の遺ふ所を、述べて而して意至り筆隨ふ、民艱吏情、曲に肯綮に丁る、傳奇小説と雖言ひ易からざる所、然して諸を詩律に入れ、而して優游餘綽、語近くして俚ならず、意深くして鑿ならず、洵に前に古人なしと稱す、嗚呼亦奇なり。

又曰、誠齋・秋崖、善く瑣事を言ひ、而して意、陰險を搜るに在り、千祺は則ち平々之れを出だす、而して奇は其中に在り。

賴襄子成曰、杜少陵、蘇端と與ふる詩に云ふ、「近來海内長句を爲る、汝と山東の李白と好し」と、見るべし長古做し難し、盛唐人と雖、已に罕に有りと稱す、況んや晚今に在つてをや、方今風氣日に澆弱、詩を以て家

氣口澆弱、以詩名家者、唯嘔心鑠骨律絕、  
一作長篇、如綿力、六石弓、醜態畢露、獨  
老蒼掣鯨之手、老而不衰、我大人又方駕  
竝驅、未知鹿死誰手、然耆閑人、大人百忙  
裏爲之、而綽有餘裕、此非一家私評也。  
後藤機世張曰、蓋詩之道與政通矣、先生  
以兼人之才能、耐煩劇、弛張有法、當其政  
寬也、發諸詩者、亦溫婉、當其政猛也、發諸  
詩者、亦勁厲、故觀先生之詩、可以見先生  
之政矣、其首首精細、卽百務之周到也、一  
字不苟、卽一事之縝密也、至於其險韻難  
題、愈奇愈正、愈健愈順、如利器之快斷盤  
根錯節、則鉏梗神明莫不底乎。  
錦天山房詩話、杏坪、詩才宏深、遠過二兄、

に名づくる者は、唯、律絶に嘔心鑠骨す、一たび長篇  
を作れば、綿力にて、六石の弓を發するが如し、醜態  
畢く露る、獨、老蒼掣鯨の手、老いて衰へず、我が大人  
又方駕竝驅す、未だ鹿の誰が手に死するを知らず、然  
れども嘗は閑人、大人は百忙裏に之れを爲す、而して  
綽として餘裕あり、此れ一家の私評に非ざるなり。

後藤機世張曰、蓋詩の道は政と通ず、先生、人を兼ぬ  
るの才を以て、能く煩劇に絶え、弛張、法あり、其政に  
當るや寬なり、諸を詩に發する者、亦溫婉、其政に當る  
や猛なり、諸を詩に發する者、亦勁厲、故に先生の詩を  
觀て、以て先生の政を見るべし、其首々精細なるは、  
卽百務の周到なり、一字苟せざるは、卽、一事の縝密  
なり、其險韻難題に至りては、愈、奇愈、正愈、健愈、順、  
利器の盤根錯節を快斷すれば、則鉏梗神明底らざる  
なきが如きか。

錦天山房詩話、杏坪、詩才宏深、遠く二兄に過ぐ、七

七古最當行、雖痛快不及其姪、口所欲言、筆能到焉、亦近世之雄也。

賴襄卷八十五

字子成、自號山陽外史、稱督太郎、春水長子、幼有逸才、以疾廢寓居京師、詩文英邁有奇氣、尤長史學、性蹇傲、高自標置、又善書、嗜畫、喜聚古人名蹟、著書僅數部、每乞假諸人而讀、終身不忘、天保壬辰卒、年五十二、著有日本外史、通議、政記、新策、及山陽集、凡數十卷。

筱崎鶴承弼曰、子成以曠世之才、逞雄偉之詞、體兼古今、調無唐宋、略應酬之常套、而發咏懷之蓄念、合典故於和漢、寓議論於風雅、操縱在手、細大無遺、能使覽者壯

古最當行、痛快是其姪、及ばすと雖、口言はんと欲する所、筆能く到る、亦近世の雄なり。

賴襄卷八十五

字は子成、自ら山陽外史と號す、督太郎と稱す、春水の長子、幼にして逸才あり、疾を以て廢し、京師に寓居す、詩文英邁にして奇氣あり、尤史學に長ず、性蹇傲、高く自ら標置す、又、書を善くし、畫を嗜む、喜んで古人の名蹟を聚む、書を蓄ふる僅に數部、毎に諸人に乞假して讀む、終身忘れず、天保壬辰に卒す、年五十二、著に日本外史、通議、政記、新策、及び山陽集、凡數十卷あり。

筱崎鶴承弼曰、子成、曠世の才を以て、雄偉の詞を逞ふし、體、古今を兼ぬ、調、唐宋なく、應酬の常套を略し、而して咏懷の蓄念を發す、典故を和漢に合せ、議論を風雅に寓す、操縱手に在り、細大遺す無し、能く覽者をして壯氣憤然扼腕切齒せしめて、彼の韓蘇諸

氣憤然扼腕切齒、欲與彼韓蘇諸公相馳逐焉。

柴允升□□曰、天才縱逸、又於韓蘇得力、故五七言古體尤飛動縱橫、往往使人鼓舞不已、烏可及哉。

劉蕤□□曰、奇想奇語、炫爛奪目。

菅谷帥禮卿曰、詩律巧緻、似費工夫、子成則咄嗟而辨、是爲異他人耳。

池桐孫無絃曰、子成詠史詩律、則半生史學、一時陶鑄出來、殆如讀集句、又似誦李滄溟文、碎錦斑斕、使人眼眩、實千古伎倆。後藤機世張曰、先生之詩、率然讀之、有若澹泊無味者、有聲牙不可解者、然皆相題行文、隨物賦形、寓天倫於風月、寄人事於

公と相馳逐せんと欲せしむ。

柴允升□□曰、天才縱逸、又韓蘇に於て力を得たり、故に五七言古體、尤飛動縱橫、往々人をして鼓舞にまざらしむ、烏ぞ及ぶべけんや。

劉蕤□□曰、奇想奇語、炫爛、目を奪ふ。

菅谷帥禮卿曰、詩律巧緻、工夫を費すに似たり、子成は則咄嗟にして辨ず、是れ他人に異なりと爲すのみ。

池桐孫無絃曰、子成詠史詩律は、則半生の史學、一時に陶鑄し出し來る、殆んど集句を讀むが如し、又李滄溟の文を誦するに似たり、碎錦斑斕、人をして眼眩せしむ、實に千古の伎倆。

後藤機世張曰、先生の詩、率然として之れを讀めば、澹泊、味ひなき者の若きあり、聲牙、解すべからざる者あり、然れども皆題を相て文を行ひ、物に隨ひて形を賦す、天倫を風月に寓し、人事を比興に寄す、讀む者

比興、讀者一踐其境、歷其事、則知向之落  
牙者、皆平易、而澹泊者皆滋味也。

角田簡大可曰、山陽卜居於三樹坡、仰望  
叡岳、俯臨鴨河、晨夕對坐、感悼古昔、鬱勃  
之情、發於詠言、一時傳誦、晚患咯血、群醫  
以爲難起、因作咯血歌曰、吾有一腔血、其  
色正赤、其性熱、不能瀝之、明主前、赤光燦  
向廟堂、微又不能賤、濺之國家難、留痕大  
地、碧弗滅、鬱積徒成磊塊、凝欲吐、不吐熱愈  
熱、一旦咯出、學李賀、難收糝地、紅玉屑、或曰  
先生閱古、遭姦雄、漏天罰、睢陽之齒、數嚼齧  
渠、無寸傷、已自殘、憤懣遂成肺肝裂、或曰先  
生雖殺、人手無尺鐵、發姦摘伏、由筆舌、以  
心誅、心人不知、靈臺冥冥、滌陰血、吾聞此語

一たび其境を踐み、其事を歴れば、則向の落牙なる者  
は皆平易、而して澹泊なる者は、皆滋味なるを知る。

角田簡大可曰、山陽、居を三樹坡に卜し、仰いで叡岳を  
望み、俯して鴨河に臨む、晨夕對坐、古昔を感悼す、鬱勃  
の情、詠言に發す、一時傳誦す、晚に咯血を患ひ、群醫  
以て起ら難しと爲す、因て咯血の歌を作りて曰、吾れ  
一腔の血あり、其色、正赤、其性熱す、之れを明主の前  
に瀝ぎ、赤光燦として廟堂に向て徹する能はず、又之  
を國家の難に濺ぎ、痕を大地に留めて碧滅せざる能  
はず、鬱積徒に成りて磊塊凝る、吐かんと欲して吐  
かず、熱愈熱す、一旦咯出して李賀を學び、收め難し糝  
地の紅玉屑、或は曰先生古を閱して姦雄の天罰を漏  
るゝに遭ひ、睢陽の齒數、嚼齧す、凝れ寸傷なく已に  
自ら殘す、憤懣遂に肺肝の裂を成す、或は曰先生人を  
殺すと雖手に尺鐵なし、姦を發し、伏を摘す筆舌によ  
る、心を以て心を誅して人知らず、靈臺冥々陰血を滌  
す、吾れ此の語を聞き兩つながら未だ領せず、童子進

兩未領童子進曰走意別先生肉中本無血腹中有字僅可剝賺得杜康爭載醇劍菱如劍岳雪雪大福藏府受不起溢爲赤黎警饜饜咄哉此意慎勿說又作己像贊曰躬偃仰一室而心關百世之失得不恤己醜齏而憂人家國文章滿腹不濟乎飢枉尺直尋則所不爲噫是何物迂拙男兒乎雖然烏知無念此迂拙者之時哉又曰此膝不屈於諸侯聊答故君之德此眼竭之於群籍不虛先人之囑此脚侍母輿二躋芳山五蹕太湖十上下漢灣而未嘗踵朱頓之門此口不能餽殘杯冷炙而此手欲援黔黎之饑寒也其友筱崎小竹曰所謂笑謔罵罵皆成文章韻語山陽在焉。

一四六  
んで日走の意は別なり、先生肉中本、血なし、腹中に字あり僅に剝すべし、杜康を賺し得て争ふて醇を載す、劍菱は劍の如く岳雪は雪、大福は藏府し受けて起たず、溢れて赤藜と爲り饜饜を警む、咄なるかな此の意慎んで説く勿れ、と又己れの像贊を作りて曰、身は一室に偃仰して心は百世の失得に關す、己れの醜醜を恤ひず、而して人の家國を憂ふ、文章、腹に滿つるも飢を濟はず、尺を枉けて尋を直ふするは、則爲さざる所、噫是れ何物の迂拙男兒ぞや、然りと雖烏ぞ此の迂拙者を念ふの時なきを知らんや、又曰、此膝諸侯に屈せず、聊、故君の德に答ふ、此眼、之れを群籍に竭し、先人の囑を虚せず、此脚母の輿に侍し、二たび芳山に躋り、五たび太湖を躋む、十たび漢灣を上下す而して未だ曾て朱頓の門を踵まず、此口殘杯冷炙を餽る能はず、而して此手、黔黎の饑寒を援げんと欲す、と、其友筱崎小竹曰、謂はゆる笑謔罵罵、皆文章韻語を成すとは、山陽在りと。

錦天山房詩話、享元之際、服南郭、專唱李  
 王體、主高華、率多浮響、而乏實際、末流之  
 弊、卑庫貌凡、至明和、天明、而極矣、六如茶  
 山、務矯其弊、而力有未逮、山陽繼其後、才  
 高學博、刻意韓蘇、魄力雄潤、最遠史學、故  
 運用古事、鎔鑄剪裁、別開生面、七古排纂  
 縱橫沉鬱、頓挫具有昌黎、眉山之格律、近  
 體亦精鍊雅健、聲調鏗鏘、寓綺麗於雄渾、  
 實不忝近世之哲匠矣。

櫻田命真 卷八十六

字伯恆、號北岸、加賀人、著有瓶花庵集、旗

山集等、其弟太田錦城、梓而行世。

龜田興□□曰、伯恆之格、乃古澹也、而其

直者、淡者、隋者、寂者、清者、閑者、蒼者、不、敢

錦天山房詩話、享元之際、服南郭、專唱李王之體、唱  
 へ、高華を主とし、率ね浮響多し、而して實際に乏し、  
 末流の弊、卑庫貌凡、明和、天明に至りて極まる、六如  
 茶山は務めて其弊を矯む、而して力未だ逮ばざる有  
 り、山陽其後を繼ぎ、才高く學博く、韓蘇に刻意し、魄  
 力雄潤、最史學に遠し、故に、古事を運用し、鎔鑄剪裁、別  
 に生面を開く、七古は排纂縱橫、沈鬱頓挫、昌黎、眉山の  
 格律を具有せり、近體、亦精鍊雅健、聲調鏗鏘、綺麗を雄  
 渾に寓す、實に近世の哲匠を忝かしのす。

櫻田命真 卷八十六

字は伯恆、北岸と號す、加賀の人、著に瓶花庵集、旗山  
 集等あり、其弟太田錦城、梓して世に行ふ。

龜田興□□曰、伯恆の格、乃古澹なり、而して其直な  
 る者、淡なる者、隋なる者、寂なる者、清なる者、閑なる者、  
 蒼なる者、敢て其實を以て而して、其情を浮せず、麗



以其質、而浮其情、麗者、綺者、沉者、壯者、正者、靡者、大者、不敢以其華、而剽其辭、古澹者、伯恆之格也、而渾厚雋永、淵乎在其中、所謂偏者、蓋於此焉亡矣。

太田教 □ □ 曰、我邦曩昔有一霸、偏起唱盛唐格調之學焉、不幸而其說蔓延、遂徧及于海內矣、自是以後、隨波逐浪、雷同不已、天下之作、如出一手、模擬蹈襲、陳腐極矣、而新進後生、猶慕其殘賸不已、吾北岸先生、慨然而憂之、起于加之辭、厥疾呼以磨之、其後一、二名家相踵而起、力詆而痛駁之、格調之學、遂燼矣、然其始唱之者、則吾北岸先生、實爲諸人之嚆矢、後之從正學者、相與尸而祝之、社而稷之可也。

なる者、綺なる者、沈なる者、壯なる者、正なる者、靡なる者、大なる者、敢て其華を以て、而して其辭を剽せず、古澹なるは伯恆の格なり、而して渾厚雋永、淵乎として、其中に在り、謂はゆる偏なる者、蓋、此に於て亡し。

太田教 □ □ 曰、我邦曩昔一霸あり、偏起して盛唐格調の學を唱へ、不幸にして其說蔓延し、遂に徧く海内に及ぶ、是より以後波に隨ひ、浪を逐ひ、雷同して、已ます、天下の作、一手に出づるが如し、模擬蹈襲、陳腐極れり、而して新進後生、猶ほ其殘賸を慕ふて已ます、吾北岸先生、慨然として之れを憂ひ、加之辭に起り、疾呼して以て之れを磨く、其後、一、二の名家、相踵いで起り、力詆して痛く之れを駁す、格調の學、遂に燼す、然して其始めて之れを唱ふる者は、則吾北岸先生、實に諸人の嚆矢たり、後の正學に従ふ者、相與に尸して之れを祝し、社して之れを稷して可なり。

## 鈴木恭

字遠恥、江戸人、父雍、字文熙、號芙蓉、以善畫著、遠恥少好讀書、受業柴栗山、年十五、作性論、寄示京師、皆川淇園、淇園驚異爲下評語、曰、騏驥之駒、其步驟一日已見千里之能、及年二十、遊學京師、從淇園而學、於是業大進、享和癸亥六月、患麻疹而歿、年僅二十五、遺集題曰、昨非稿、友人葛質子文、更題曰、小蓮殘香集、小蓮、其別號也、葛質子文曰、遠恥幼好讀書、十二三能屬文、十八九屹然知志學之方、常云、經學文章、通爲一途、分爲二途者、後人之妄見也、聖門四科、亦單立文學一科矣、未聞並立明經文章二科也、世有不能文章、而稱通

錦天山房時話下冊

## 鈴木恭

字は遠恥、江戸の人、父、雍、字は文熙、芙蓉と號す、畫を善くするを以て著はる、遠恥、少ふして讀書を好み、業を柴栗山に受く、年十五、性論を作り、京師の皆川淇園に寄示す、淇園、驚異し、爲に評語を下して曰、騏驥の駒、其步驟一日已に千里の能を見はすと、年二十に及び、京師に遊學し、淇園に従ひて學ぶ、是に於て業大に進む、享和癸亥六月、麻疹を患ひて歿す、年僅に二十五、遺集、題して昨非稿と曰ふ、友人葛質子文更に題して小蓮殘香集と曰ふ、小蓮とは、其別號なり。

葛質子文曰、遠恥幼にして讀書を好み、十二三、能く文を屬す、十八九、屹然として志學の法を知る、常に云ふ、經學文章、通じて一途たり、分ちて二途と爲すは、後人の妄見なり、聖門四科、亦單に文學一科を立つ、未だ明經文章二科を雙立するを聞かず、世に文章を能くせずして經學に通ずと稱する者あり、吾れ未だ之れを信ぜざるなり、世に經學に通ぜずして文章

經學者、吾未之信也、世有不通經學而稱善文章者、吾亦未之信也。

曾樂□□曰、遠恥詩原本二唐、覃思古詩、而以少陵爲宗、其文溫雅疏通、無擬倣蹈襲之僻、無浮囂鉤棘之弊。

錦天山房詩話、遠恥嘗著志學自警、有云、生平宗唐詩、但近體倣錢劉、資格調俊爽、不爲板大詞句、意欲懲宋明流弊、古詩專尙少陵、仍倣唐調、事氣象崢嶸、詞句勁拔、上不援漢魏、下不託韋柳、此是吾胸中壁立處、不幸天折、雖所作不符所言、亦可見其所志不凡也。

市河世寧卷八十七

字子靜、一字嘉祥、號西野、寬齋半江、皆其

を善くすと稱する者あり、吾れ亦未だ之れを信せざるなり。

曾樂□□曰、遠恥の詩、二唐に原本し、古詩に覃思す、而して少陵を以て宗と爲す、其文、溫雅疏通にして、擬倣蹈襲の僻無く、浮囂鉤棘の弊なし。

錦天山房詩話、遠恥嘗て志學自警を著し、云へるあり、生平唐詩を宗とす、但近體は錢劉に倣ひ、格調の俊爽を貴び、板大の詞句を爲さずと、意宋明の流弊を懲らさんと欲す、古詩は專、少陵を尙び、仍て唐詩に倣ふ、氣象崢嶸詞句勁拔を事とし、上、漢魏を援かず、下、韋柳に托せず、此は是れ吾胸中壁立の處、不幸天折し、作る所は言ふ所に符せずと雖、亦其志す所の凡ならざるを見るべきなり。

市河世寧卷八十七

字は子靜、一の字は嘉祥、西野と號す、寬齋半江は皆

別號稱小左衛門、其先甲州武田氏支族、世居上州甘樂郡南牧山中、父好謙號蘭臺、好筆札、受業細井廣澤、子靜少志學、負笈遊學、補昌平學員長、居五年、以病解去、寬政三年、富山侯聞其名、徵爲養舍教授、在職二十餘年、以老致仕、性溫厚和易、不喜忤於物、然內懷氣節、每見小人作惡、指撻無所避、由是失意落魄、亦晏然不動、一友以冤繫獄、奮身往救、人皆危之、決然不顧、又耽山水、屢遊上毛、晚又遊長崎、一年、文政三年七月病卒、年七十二、門人私謚曰文安先生、著有日本詩紀五十卷、全唐詩逸三卷、陸詩意注七卷、陸詩考實三卷、宋百花詩七卷、金石私誌青蚨私誌各六

其の別號なり、小左衛門と稱す、其先、甲州武田氏の支族、世々上州甘樂郡・南牧山中に居る、父、好謙、蘭臺と號す、筆札を好み、業を細井廣澤に受く、子靜少志して、學に志し、笈を負ふて遊學し、昌平學員長に補す、居ること五年、病を以て解き去る、寬政三年、富山侯、其名を聞き、徵して養舍の教授と爲す、職に在ること二十餘年、老を以て致仕す、性溫厚和易、物に忤ふを喜ばず、然るに内に氣節を懷き、小人の惡を作すを見る毎に、指撻して避くる所なし、是れに由りて失意落魄す、亦晏然として動かす、一友、冤を以て獄に繫がる、身を奮ひ往いて救ふ、人皆之れを危ぶめども、決然として顧みず、又山水に耽り、屢々、上毛に遊び、晚に又長崎に遊ぶこと、一年、文政三年七月病んで卒す、年七十二、門人私に謚して文安先生と曰ふ、著日本詩紀五十卷、全唐詩逸三卷、陸詩意注七卷、陸詩考實三卷、宋百花詩七卷、金石私誌青蚨私誌各六卷、半江暇筆五卷、瓊浦夢餘錄一卷、詩文集十卷あり、長子三女、書を善くす、次子祥胤出で、鶴木氏を嗣ぐ、書を善くす、皆一時に名あり。

卷半江暇筆五卷、瓊浦夢餘錄一卷、詩文集十卷、長子三亥善書、次子祥胤、出嗣、木氏善畫、皆名於一時。

林銜公鑑曰、子靜於學精敏、最長乎詩、篇什頗富、清麗奇峭、無所不有、其初爲樊川一變而香山、再變而劍南、終又鎔陶諸家、別出杼軸、亦非一體、後進推以爲領袖、承其指畫、粗能成家者不少。

菅芥師禮卿曰、木護二社詩、輝映一時、然率多虛飾、而乏實際、子琴六如始能振之、而孤唱寡和、及寬齋先生出、其徒相踵而起、諸州翕然風靡、夫詩言志、而言佛其志、得無內愧乎、先生之詩壇功亦偉矣。

池桐孫無絃曰、先生之於詩、冲融都雅、毫

林銜公鑑曰、子靜學に於て精緻、最詩に長ず、篇什、頗富む、清麗奇峭、有らざる所なし、其初め樊川を爲し、一變して香山、再變して劍南、終に又諸家を鎔陶し、別に杼軸を出だす、亦一體に非ず、後進推して以て領袖と爲し、其指畫を承け、粗能く家を成す者少からず、

菅芥師禮卿曰、木護二社の詩、一時に輝映す、然るに率ね虚飾多く、而して實際乏し、子琴六如始めて能く之れを振ふ、而して孤唱寡和、寬齋先生出づるに及んで、其徒相踵いで起り、諸州翕然として風靡す、夫れ詩は志を言ふ、而して言其志に佛らば、内に愧づる無きを得んや、先生の詩壇の功亦偉なり。

池桐孫無絃曰、先生の詩に於ける、冲融都雅、毫も毫

無驕傲任放之氣、其詩如人、其人如詩、表裏透徹、何啻冰壺。

又曰先生壬戌歲、重赴越中、時患臂痛、乞暇浴南山、有南山紀遊一卷、其中窮婦歎七古、悲詞痛語、令讀者動色、未幾詩達其君、詰問官吏、遽周恤之、爾後封內無告之民、及孝子力田皆得聞、以賜錢物、實由先生之力也、詩神風教、蓋乃如此、世之以詩爲弄具者、讀之能無警乎。

錦天山房詩話、大窪行天民題其肖像略云、少日學嘉萬七子詩、不是他人、維河先生、排擊七子、首唱清新、不是他人、維河先生、先生之老、益變益妙、混化諸家、金玉其聲、嗚呼偉哉先生、於詩變化無窮、猶龍難

傲任放の氣なし、其詩は人の如し、其人は詩の如し、表裏透徹すること、何ぞ啻に冰壺のみならんや。

又曰、先生、壬戌の歲、重ねて越中に赴く、時に臂痛を患ひ、暇を乞ひて南山に浴す、南山紀遊一卷あり、其中、窮婦歎七古、悲詞痛語、讀者をして色を動かさしむ、未だ幾くならずして、詩、其君に達し、官吏を詰問し、遽に之れを周恤す、爾後封内無告の民、及び孝子力田、皆聞するを得、以て錢物を賜ふ、實に先生の力に由るなり、詩の風教を裨ふ、蓋、乃此の如し、世の詩を以て弄具と爲す者、之れを讀んで能く警むことなからんや。

錦天山房詩話、大窪行天民、其肖像に題す、略に云ふ、  
「少き日、嘉萬七子の詩を學ぶ、是れ他人ならず、維河先生、七子を排擊し、清新を首唱す、是れ他人ならず、維河先生、先生の老ふる、益、變じて益、妙、諸家を混化し、其聲を金玉にす、嗚呼偉なるかな先生、詩に於て變化窮りなし、猶龍の名づけ難きが如し」と、賴麘子成詩を寄す、略に云ふ、「西野先生東隅より起り、

名頼、襄子成寄詩略云、西野先生東隅起、藝苑不復說七子、登壇老將世稔聞、天文政幾四紀、陶娘巷鑄詩佛、左提右挈、變詞風、享保餘黨、膝盡屈、譬如二十四考中、書令誠燧、總自部下出、東北宿寇待勦殄、撥亂反正作又述、二子之語皆極其推重、其如誘進後進、一變詩風、則或然、然氣運所趨、豈特人力乎哉、今閱其集、力弱而幅窄、時涉纖佻、殊不稱其聲、昔歲嘗見池無絃、曰生前互相排擊、及遺集出、則不覺心折者、陰山文熙也、生前極相推尊、及遺集出、則大不測人意者、寬齋先生也、然則公論之在人、雖其徒亦不能諱也。

藝苑復七子を説かず、登壇の老將世稔聞す、天文政幾四紀、陶娘を陶し詩佛を鑄し、左提右挈詞風を變ず、享保の餘黨膝盡く屈す、譬へば二十四考中書令、誠燧總て部下より出づるが如し、東北の宿寇勦殄を待つ、撥亂反正作又述と、二子の語皆、其の推重を極む、其の後進を誘進し、詩風を一變するが如きは、則或は、然らん、然れども氣運の趨く所、豈特に人力のみならんや、今其の集を閱するに、力弱くして幅窄し、時に纖佻に涉る、殊に其聲に稱はず、昔歲嘗て池無絃を見る、曰く、生前互に相排擊し、遺集出づるに及び、則覺えず心折する者は、陰山文熙なり、生前極めて相推尊し、遺集出づるに及んで、則大に人の意に満たざる者は、寬齋先生なりと、然らば則公論の人に在るや、其の徒と雖、亦諱むこと能はざるなり。

字禮卿稱太中號茶山備後神邊人父扶好稱久助本高橋氏嗣菅波氏頗涉書傳母佐藤氏又喜國史能訓導其子禮卿少小善病而喜讀書作詩年十九遊京師從那波魯堂受濂洛之學與京攝名家交既歸委家事於其弟而益讀書教授其塾面於黃葉山因曰黃葉夕陽村舍山陽南海諸州人來學者甚多素好詩詩名尤高山阿部侯與林祭酒論詩祭酒曰當今詩人當以菅某爲魁侯命吏廉問悉得其學行兼茂狀乃賜月俸五口後命準儒官賜章服凡增俸至三十口準大目附數賜金及衣來往東都者凡再又遊京師及和濃尾常諸勝文政十年八月十三日病卒年

錦天山房詩話下冊

字は禮卿、太中と稱す、茶山と號す、備後神邊の人、父、扶好、久助と稱す、本、高橋氏、菅波氏を嗣ぐ、頗、書傳に涉る、母、佐藤氏、又國史を喜ぶ、能く其子を訓導す、禮卿、少小善く病む、而して讀書作詩を喜ぶ、年十九、京師に遊び、那波魯堂に從ひ、濂洛の學を受け、京攝の名家と交はる、既に歸りて家事を其弟に委し、而して益々讀書教授す、其塾、黃葉山に面す、因て黃葉夕陽村舍と曰ふ、山陽南海諸州の人、來り學ぶ者甚多し、素とより詩を好む、詩名尤高し、福山阿部侯、林祭酒と詩を論ず、祭酒曰、當今詩人當に菅某を以て魁と爲すべしと、侯吏に命じ廉問し、悉く其の學行兼茂の狀を得たり、乃月俸五口を賜ふ、後命じて儒官に準じ、章服を賜ふ、凡そ增俸三十口に至り、大目附に準ず、數、金及び衣を賜ふ、東都に來往する者凡そ再び、又京師及和濃尾常諸勝に遊ぶ、文政十年、八月十三日病んで卒す、年八十、門人私に諡して文恭と曰ふ、曾て藩命を奉じ、福山の地志を修す、他、著す所、黃葉夕陽村舍詩二十二卷、文二卷、遊藝記一卷、室町志四卷あり、

一五五



八十門人私諡曰文恭、曾奉藩命、脩福山地志、他所著有黃葉夕陽村舍詩二十二卷、文二卷、遊藝記一卷、室町志四卷。

賴襄子成曰、自享保正德、諸大家輩出、大抵本嘉萬七子、而摸擬唐賢、大而未化、葛蠶庵一變之、六如師二變之、而江湖社諸子更相標榜、海內喁然、非復舊習、然論其剛柔互用、洪纖悉有、而風格高逸、有一唱三嘆之意者、識者獨推先生焉。

釋慈周六如曰、他人吟卷、讀之未過兩三號、已倦而睡、若禮卿詩似啖甘蔗、只恨其易了、又如石蜜中邊皆甜、每奇瑰橫陳、往往使人自視欲然。

錦天山房詩話、自六如師唱宋詩、茶山繼

賴襄子成曰、享保正德より、諸大家輩出す、大抵嘉萬七子に本づき、而して唐賢を摸擬す、大にして未だ化せず、葛蠶庵之れを一變し、六如師之れを二變し、而して江湖社の諸子更に相標榜し、海内喁然として復た舊習に非ず、然れども其剛柔互に用ひ、洪纖悉く有し、而して風格高逸にして、一唱三嘆の意ある者を論ずるときは、識者獨先生を推す。

釋慈周六如曰、他人の吟卷、之れを讀みて、未だ兩三號に過ぎず、已に倦んで睡る、禮卿の詩の若きは、甘蔗を啖ふに似たり、只其の了り易きを恨む、又、石蜜の中邊皆甜きが如し、毎に奇瑰橫陳し、往々人をして自ら視て欲然たりしむ。

錦天山房詩話、六如師、宋詩を唱えしより、茶山繼

起、詩風一變、其詩亦在伯仲之間、賴子成贈詩云、唯許周公難弟兄、遠神獨覺幾籌贏、蓋六如專宗劍南、上溯樊川、茶山則間出入韓蘇、故縱橫勝此、而穩秀不及焉、其精鍊蒼老、善道人所難狀、固屬獨步、然如瞽僧叫賣、按摩行等類、涉乎卑俚者、亦復不尠、如夫芟蕪擢英、可謂一代鉅匠矣。

山村良由卷九十

字君裕、號蘇門、本姓大江氏、七世祖宗川、關原之役、屬東照大君、有功賜食邑于濃州、世住木曾、治邑政、兼司福島關、及木曾入尾封、亦從屬尾、世襲相承、君裕幼好讀書、常憂僻邑、乏師友、弱冠如東都、師事大内熊耳、又納交諸名家、而歸、會其臣石作

て起り、詩風一變す、其詩、亦伯仲の間に在り、賴子成の贈詩に云ふ、唯許す周公弟兄たり難く、遠神獨覺ふ幾籌か贏すと、蓋六如は專、劍南を宗とし、上、樊川に溯る、茶山は則、間、韓蘇に出入す、故に縱橫は此れに勝るも、而も穩秀は及ばず、其精鍊蒼老、善く人の狀し難き所を道ふは、固より獨歩に屬す、然れども「瞽僧叫んで按摩を賣りて行く」等の類の如く、卑俚に涉る者、亦復尠からず、如し夫れ蕪を芟り英を擢すれば、實に一代の鉅匠と謂ふべし。

山村良由卷九十

字は君裕、蘇門と號す、本姓は大江氏、七世の祖、宗川、關ヶ原の役、東照大君に屬して功あり、食邑を濃州に賜ひ、世々木曾に住す、邑政を治め、兼ねて福島關を司る、木曾、尾封に入るに及び、亦從ふて尾に屬し、世襲相承く、君裕幼にして好んで書を読み、常に僻邑にして師友に乏しきを憂ふ、弱冠にして東都に如く、大内熊耳に師事す、又、交を諸名家に納れて歸る、

貞、遊學業就而歸於、是日夜切磋、又通許南宮大湫江村北海問業、天明元年襲父職、會東北諸州大饑、木曾尤甚、君裕振恤盡力、民賴活者甚多、尾公聞而喜之、賜物賞焉、尾公欲召委國政、而事在異典、乃請大朝、使其子襲職、引君裕爲國相、別賜祿三千石、相尾十餘年、大著聲稱、敍從五位下、任伊勢守、後以疾辭職、尾公優命給養老祿、文政六年正月十六日卒、年八十二、所著有清音樓忘形集等。

## 石作貞

字士幹、稱貞五郎、岐岨人、世仕福島山村氏、少而好學、負笈遊學四方、結交名士、學成歸鄉、其君知其有才幹、擢爲計長、時山村氏負財甚衆、士幹竭力計度、用度無匱、

會、其臣石作貞、遊學業就りて歸る、是に於て日夜切磋す、又書を南宮大湫・江村北海に通じて業を問ふ、天明元年、父の職を襲ぐ、會、東北諸州大に饑り、木曾尤甚し、君裕振恤力を盡くす、民頼りて活する者甚多し、尾公聞いて之れを喜び、物を賜ひて賞す、尾公召して國政を委ねんと欲す、而して事、異典にあり、乃ち大朝に請ひ、其子をして職を襲がしめ、君裕を引いて國相と爲す、別に祿三千石を賜ふ、尾に相たること十餘年、大に聲稱を著す、從五位下に敍し、伊勢守に任ず、後、疾を以て職を辭す、尾公優命、養老祿を給ふ、文政六年正月十六日卒す、年八十二、著す所、清音樓忘形集等あり。

## 石作貞

字は士幹、貞五郎と稱す、岐岨の人、世、福島山村氏に仕ふ、少ふして學を好み、笈を負ふて四方に遊學し、交を名士に結ぶ、學成りて郷に歸る、其君其才幹あるを知り、擢んで、計長と爲す、時に山村氏負財甚衆し、

素長詞賦、簿領之暇、吟咏不廢、著有翠山樓集。

山村 真由 君裕曰、士幹居常、事母盡孝、信於朋友、而爲人剛直、公清、犯余顔者數、苟見義則常奮不顧身、蓋自家老莫不肅然敬憚之、然則士幹之詩、非世之輕薄輩、紙筆和墨無皮傅毛者之比矣。

江村 經 君錫曰、有吏才者無文才、論儒術者未必講治民之術、士幹能施美於此、不亦偉乎、況其施爲一根、祇于四經、是以國用亨、而民不知戚、難乎哉、加之其爲人質直好義、儉朴率物、又傍精通于武伎、然則瑣瑣詩篇、在士幹實緒餘耳、然而緒餘亦有如斯、是可論士幹者歟。

士幹、力を竭して計慮し、用度置しき無し、素より詞賦に長ず、簿領の暇、吟咏廢せず、著に翠山樓集あり。

山村 真由 君裕曰、士幹居常母に事へて孝を盡くし、朋友に信ぜらる、而して人と爲り剛直公清余の顔を犯す者數、苟義を見ては則常に奮つて身を顧みず、蓋、家老よりして、肅然として之れを敬憚せざるは莫し、然らば則士幹の詩、世の輕薄輩、筆を砥め墨に和し、皮なく而して毛を傳くる者の比に非ず。

江村 經 君錫曰、吏才ある者は文才なし、儒術を論ずる者は未だ必しも治民の術を講ぜず、士幹能く美を此に施ふ、亦偉ならずや、況んや其施爲一に四經に根柢す、是を以て國用亨り、而して民、戚むを知らず、難いかな、之れに加ふるに、其人と爲り質直にして義を好み、儉朴にして物を率ゆ、又傍ら武伎に精通す、然らば則瑣々たる詩篇、士幹に在ては實に緒餘のみ、然而而して緒餘亦斯の如き有り、是れ士幹を論すべき者か

東龜年 □□曰、石士幹之深、於詩、遠韻高致、不汲汲於唐、不區區於明、雖、邇宋元之語、有時乎不復棄之、其發纖穠於簡古、寄至味於澹泊、非特使人誦之弗能自止、清新澹蕩、夢不可忘者、實有之。

## 佐佐木俊信

字逸平、號龍原、又號鹿野山人、本姓國重氏、周防人、其先出自、峽中武田氏、源四郎信正者、始移藝之國重里、因氏焉、仕長州侯、幼而患痘、手足不良、不得學、武伎、乃發憤讀書、入國學、事田鹿門、勵精刻苦、業日益進、鹿門薦爲都講、又轉助講、侯嘉其篤學善誘、給歲俸若干、後攝儒官佐佐木氏家事、冒其氏、擢國學講師、請業者益多、寬

東龜年 □□曰、石士幹の詩に深き、遠韻高致、唐に汲々たらず、明に區々たらず、迺ち宋元の語と雖、時ありてか復、之れを棄てず、其纖穠を簡古に發し、至味を澹泊に寄す、特り人をして之れを誦して自ら止む能はざらしむるのみに非ず、清新澹蕩、夢にも忘るべからざる者、實に之れ有り。

## 佐々木俊信

字は逸平、龍原と號す、又、鹿野山人と號す、本姓は國重氏、周防の人、其先は峽中の武田氏、源四郎信正といふ者より出づ、始め藝の國重の里に移り、因て氏とす、長州侯に仕ふ、幼にして痘を患ふ、手足不良、武伎を學ぶことを得ず、乃憤を發して書を読む、國學に入り、田鹿門に事ふ、勵精刻苦、業日に益進む、鹿門薦めて都講と爲す、又、助講に轉ず、侯、其學に篤く善く誘ふを嘉みし、歲俸若干を給す、後儒官佐々木氏の家事を攝し、其氏を冒す、國學講師に擢んでらる、業を請ふ者益多し、寛政十二年九月十四日疾んで卒す、年五十一、著に龍原文集五卷あり。

政十二年九月十四日疾卒、年五十一、著

有龍原文集五卷。

繁澤規世□□曰、龍原詩、淡而不華、文、則簡而不編、其於書也、手雖不如人、加人一等、其它所學亦非人所及也。

錦天山房詩話、龍原發憤奮身、司業津宮、雖其志氣才力、固有過人者、然亦遇其時也、如其詩、過於摹擬、拙於用才、不及青郊、遠甚矣。

脇長之卷九十一

字子善、豐後人、號愚山、遊學肥後、又從中井竹山學、所著有蘭室集略十二卷。

錦天山房詩話、蘭室詩、蒼潤、具有風骨。

松山造卷九十三

錦天山房詩話下冊

繁澤規世□□曰、龍原の詩、淡にして華ならず、文は則簡にして纏ならず、其の書に於けるや、手、人の如くならずと雖、人に加ふること一等、其它學ぶ所、亦人の及ぶ所に非ず。

錦天山房詩話、龍原憤を發して、身を奮つて業を津宮に司どる、其志氣才力固より人に過ぎたる者ありと雖、然ども亦其の時に遇ふなり、其詩の如きは摹擬に過ぎ、用才に拙なり、青郊に及ばざる遠きこと甚し。

脇長之卷九十一

字は子善、豐後の人、愚山と號す、肥後に遊學す、又中井竹山に従ふて學ぶ、著す所、蘭室集略十二卷あり。

錦天山房詩話、蘭室の詩、蒼潤にして風骨を具有せり。

松山造卷九十三

字茂肅、越後人

江村綾君錫曰、松山茂肅、越後絲後魚川邑長、家業農賈、非不塵擾、而天資好學、夢寐斯文、其子姪皆能詩詞、近創銷夏樓、博蒐典籍、漸將充棟、可謂風流偉人。

岡部正懋卷九十四

字公修、號四溟、陳人、東都旗下士也、少喜任俠、閭里子弟從遊者甚衆、後折節讀書、刻勵自立、尤善詩、著四溟集、時年甫二十六、晚年爲僧、名素閑、鉢孟蒲團、蕭然自適、井純卿曰、公修少喜任俠、一旦幡然改之、乃納交當世諸老、其慷慨不能自己、悉發之詩、煥乎、雄者麗者、悲者壯者、皆可以誦焉。

字は茂肅、越後の人

江村綾君錫曰、松山茂肅は、越後絲後魚川の邑長、家業賈を業とす、塵擾ならざるに非ず、而して天資學を好み、斯文に夢寐す、其子姪皆詩詞を能くす、近ごろ銷夏樓を創し、博く典籍を蒐め、漸く將に棟に充たんとす、風流の偉人と謂ふべし。

岡部正懋卷九十四

字は公修、四溟陳人と號す、東都旗下の士なり、少ふして任俠を喜み、閭里の子弟從遊する者甚衆し、後節を折りて讀書し、刻勵自立す、尤、詩を善くし、四溟集を著す、時に年甫めて二十六、晩年に僧と爲り、素閑と名づく、鉢孟蒲團、蕭然自適せり。

井純卿曰、公修、少ふして任俠を喜び、一旦幡然として之れを改む、乃、交を當世の諸老に納る、其慷慨自ら己む能はざるは、悉く之れを詩に發す、煥乎として雄なる者、麗なる者、悲なる者、壯なる者、皆以て誦すべし。

袁恭君愿曰、公修少而孤、與予年相若、居亦甚近、以故得交焉、後予從家君、官于石州五年、及來東都、先往見之、試叩其所學、出詩若干首、以示之、洋洋乎非尋常之聲也、且謂予曰、予年十四五時、好爲放蕩不羈之行、自謂大丈夫磊磊落落當如日月、焉能枉其意而役於人乎、而意氣慷慨、以赴人之艱難、爲急、又性好酒、酒後耳熱、氣壯、意銳、走馬鬪鷄、擊筑拊缶、自以爲適、不知其不可也、後稍聞詩書之義、慕長者之風、乃知游俠之非正義、沉湎之不可耽、悉剔去舊習、惟新是謀、日講其學、屹屹不已、予聞其言、而大其志、公修之不憚改過、比之耽樂之徒、終身不知其非者、不可同日

袁恭君愿曰、公修少ふして孤、予と年相若く、居も亦甚近し、故を以て交を得、後予家君に従ひ、石州に官たること五年、東都に來るに及び、先づ往いて之れを見る、試に其學ぶ所を叩けば、詩若干首を出だし、以て之れを示す、洋洋乎として尋常の聲に非ず、且予に謂つて曰、予年十四五の時、好んで放蕩不羈の行を爲し、自ら謂ふ大丈夫磊々たること、當に日月の如くなるべし、焉んぞ能く其意を枉けて而して人に役せられんやと、而して意氣慷慨、人の艱難に赴くを以て急と爲す、又、性、酒を好み、酒後耳熱し、氣壯んに意銳く、走馬鬪鷄、擊筑拊缶、自ら以て適と爲して、其不可なるを知らざるなり、後、稍、詩書の義を聞き、長者の風を慕ふ、乃、游俠の正義に非ず、沈湎の耽るべからざるを知り、悉く舊習を剔去し、惟、新是れ謀る、日に其學を講じ、屹々として已まず、予其の言を聞き而して其志を大とす、公修の過を改むるを憚らざる、之れを耽樂の徒が終身、其非を知らざる者に比するに、同日にして語るべからざるや明なり。



而語也明矣。

太田覃子紹曰、公修與關叔成、森君敏、及余不佞、結交牛門、自號四友、其詩業已具體、每得一篇、莫不示夫三子者、乃相與稱爲我輩語云。

### 淺野長泰

字東君、通稱內記、錦谷其別號、世襲寄合班、淺野源氏、祖備前守長親、軍充、騎將、父中務少輔長富、西城侍中、君生、席榮、臙然、少長恬澹、雅不樂進取、身又善病、遂絕意當世、而專精誦讀、文雅自將、爲人和而莊、治家蒞下有法、諸胥梁薰習、斬如也、天保三年七月卒、年僅四十有八。

野村溫君玉曰、錦谷源君、振芳奕葉、蚤播

太田覃子紹曰、公修、關叔成、森君敏、及び余不佞と、交を牛門に結び、自ら四友と號す、其詩業已に體を具ふ、一篇を得る毎に、夫の三子者に示さざるは莫し、乃相與に稱して我輩の語と爲すと云ふ。

### 淺野長泰

字は東君、通稱は内記、錦谷は其別號なり、世々寄合班を襲ぐ、淺野源氏なり、祖、備前守長親、軍騎將たり、父、中務少輔長富、西城の侍中たり、君生れて、榮臙に席す、然れども、少長じて恬澹、雅より進取を樂まず、身、又善く病む、遂に意を當世に絶つ、而して精を専らにして誦讀し、文雅自ら將ゆ、人と爲り和にして莊、家を治め下に蒞むに法あり、諸の高梁薰習は斬如たり、天保三年七月卒す、年僅に四十有八。

野村溫君玉曰、錦谷源君、芳を奕葉に振ひ、蚤に嘉譽

嘉譽展采清華、夙標妙質、垂紳端笏、亞五  
 等之崇班、列鼎累茵、享萬鍾之美祿、秉性  
 謙冲、稔躬淡泊、文腰頓減、不關蕭統多愁、  
 班鬢將凋、實藉潘安善病、謝浮榮乎、絨冕、  
 敦宿好以、邱墳設蠅帷、而夏晝忘劬、挑麝  
 燭以、冬宵廢寢、其陶情於、範水模山、肆力  
 於、駢花儷葉、閉門搏撻、鬪壁推敵、昌谷之  
 嘔心、虢州之覆面、滿掣冰雪、表潔章間、半  
 腕烟霞、收奇字裏、調因清音、倍遠辭以、淡味  
 逾深、莫不、轍宋凌劉、茹葦吐賈、況愛士不  
 倦於、推襟、延賓能勤、夫推、慧、鶯風暖閣、葦  
 兩涼牕、邀伐木之清娛、發、粲花之雅論、擊  
 鉢、捶琴、八叉而呈妙伎、斫營、摩壘、三捷以  
 聘、雄才可謂、追北郭之豪游、踵西園之雅

錦天山房詩話下冊

を播き、采を精華に展べて、夙に妙質を標す、紳を垂  
 れ笏を端し、五等の崇班に亞ぐ、鼎を列し、茵を累ね、  
 萬鍾の美祿を享く、秉性謙冲、稔躬淡泊、久腰頓に減  
 じて、蕭統の多愁に關せず、班鬢將に凋まんとす、實  
 に潘安の善病に藉る、浮榮を絨冕に謝し、宿好を敦く  
 するに邱墳を以てし、蠅帷を設け而して夏晝に劬を  
 忘れ、麝燭を挑げ、以て冬宵に寢を廢し、其情を範水  
 模山に陶し、力を駢花儷葉に肆にす、門を閉ぢて搏撻  
 し、壁を鬪んで推敵す、昌谷の嘔心、虢州の覆面、滿胸  
 の冰雪、潔を章間に表し、半腕の烟霞、奇を字裏に收  
 む、調は清音に因て倍々遠く、辭は淡味を以て逾々深  
 く、宋を轍し劉を凌ぎ、葦を茹ひ賈を吐かざるなし、況  
 や士を愛して襟を推すを倦まず、賓を延いて能く夫  
 の慧を擁するを勤む、鶯風暖閣、葦兩涼牕、伐木の清娛  
 を邀へ、粲花の雅論を發す、擊鉢捶琴、八叉にして妙伎  
 を呈す、斫營摩壘、三捷以て雄才を聘す、北郭の豪游を  
 追ひ、西園の雅集を踵ぐと謂ふべし。

## 集矣。

錦天山房詩話、東君長身玉立、有朱霞天半之表、居恆小齋、柴几、左右籤帙、香茗滿然、每逢美景辰良、輒饌具、延佳士友于館、擊籤捻韻、卜夜維燭、時篋園野村博士、蟬原樓壇帖特盛、牛門諸子、靡然翕縱、君家于冬青坂、相距伊邇、每一吟就、走長鬚、片紙乞正、博士亦爲細心批還、日夕磨刮、適然色喜、其於不佞、謬辱洋裝久矣、凡有綴述、屢命傳觀、使進其贅說、必得而止、否則爲感、蓋樂道崇藝、天彌其性、故其爲詩、凡近古諸體、莫弗具、宜抒景託情、往往刻琢警新、而居然渾成、終歸大雅、逮乎詠物、工而脫俗、當時同人中卓標一幟、要皆足以

錦天山房詩話、東君長身、玉立、朱霞天半の表あり、居恆小齋に几に柴り、籤帙を左右にし、香茗滿然たり、美景辰良に逢ふ毎に、輒ち饌具し、佳士友を館に延き、案を擊き韻を捻り、夜を卜し維れ燭す、時に篋園野村博士、蟬原樓壇帖特に盛なり、牛門の諸子、靡然として翕縱す、君冬青坂に家す、相距ること伊れ邇し、一吟就る毎に、長鬚を走らし、片紙、正を乞ふ、博士も亦細心爲に、批して還す、日夕磨刮し、適然として色喜ぶ、其不佞に於て、謬りて洋裝を辱くすること久し、凡そ綴述あらば、屢々命じて傳觀し、其贅說を進めしむ、必ず得て而して止む、否らざれば、則感と爲す、蓋道を樂み藝を崇ぶ、天其性を彌す、故に其詩たる、凡そ近古諸體、具せざるはなし、宜べなり景を抒し情を託する、往々にして刻琢警新、而して居然渾成し、終に大雅に歸す、詠物に遠んでは、工にして脱俗、當時同人中、卓として一幟を標す、要するに皆以て世に傳ふるに足れり、平生亂稿山積す、嘗て手自ら中年後作る所を録し、訂して一編を成す、目して錦谷樵唱と曰ふ、茲

傳世也、平生亂稿山積、嘗手自錄、中年後所作訂成一編、目曰錦谷樵唱、茲就中汰其二、三、餘悉登載。

又云、肉食多鄙、自古興嘆、且武弁之於柔翰、猶染徑庭、其勢便爲然、故世之善弓刀而工于競病、視之○按、競病、恐有誤、如同晨星也、至於錦谷集者、不特不可與其曹偶、同日論、乃所謂憔悴專一之士、相共繫其短、較其長、蓋可過而莫不及矣、宜乎霽莊先生恆深擊節、而余之采錄多多、亦豈門戶阿好之見云乎哉。

### 香川弘

字士毅、號樗山、稱清助、仕爲庵正之屬吏、文化丙寅、受學問考試、賜賞銀、初受業川

の中に就いて其二三を汰し、餘は悉く登載す。

又云ふ、肉食多鄙、古より嘆を興せり、且武弁の柔翰、染に於ける、徑庭あり、其勢、便ち然りと爲す、故に世の弓刀を善くし、而して競病に工みに、之れを視るに、晨星に同じきが如し、錦谷集といふ者に至りては、特其曹偶と同日に論ずべからざるのみならず、乃謂はゆる憔悴專一の士、相共に其短を繋り其長を較ぶるも、蓋、過ぐる可きも、而も及ばざる莫し宜なるかな、霽莊先生、恆に深く節を擊てり、而して余の采録多々なる、亦豈門戶阿好の見と云はんや。

### 香川弘

字は士毅、樗山と號す、清助と稱す、仕へて庵正の屬吏と爲る、文化丙寅、學問考試を受け、賞銀を賜ふ、初

春川篠竹堂與大窪詩佛菊池五山之徒、友善、晚遊野篁園龜望野及余社、天保戊戌五月病卒、年五十六、著有樗山文集三卷、詩集十卷、藏于家、摘稿一卷、梓行于世。錦天山房詩話、翁之生也、當亦羽餘流未竭、故其詩仍沿其波、雖未能脫然出其範圍、然質而不俚、樸而不佻、見其詩而其人可想、尙不失先民之矩矱、言志之正路也、視夫之淫褻放肆、有傷大雅者、豈可同日而論哉、余序其摘稿云爾。

荒木田興正卷九十八

字董卿、號鼎湖、又號南陵、伊勢山田祠官、敘從四位下、荒木田息雅長子、有故爲伯父正富嗣、俗稱釜谷數馬、資性好學、孜孜

め業を川春川篠竹堂に受け、大窪詩佛菊池五山の徒と友とし善し、晩に野篁園龜望野及び余の社に遊ぶ、天保戊戌五月病んで卒す、年五十六、著に樗山文集三卷、詩集十卷あり、家に藏す、摘稿一卷、世に梓行す。

錦天山房詩話、翁の生ずるや、赤羽の餘流未だ竭きざるに當る、故に其詩、仍ほ其波に沿ふ、未だ脫然として其範圍を出づる能はずと雖、然れども質にして俚ならず、樸にして佻ならず、其詩を見て、其人想ふべし、尙先民の矩矱、言志の正路を失はざるなり、夫の淫褻放肆、大雅を傷ふある者に視ぶるに、豈、同日にして論せべけんや、余其摘稿に序して爾か云ふ。

荒木田興正卷九十八

字は董卿、鼎湖と號す、又南陵と號す、伊勢山田の祠官、從四位下に敘す、荒木田息雅の長子、故ありて伯父正富の嗣と爲る、俗稱釜谷數馬、資性學を好み、孜孜として晨夜にす、江村綏の門人たり、二弟、正肅興

晨夜、江村綬門人、有二弟正肅與雄、同好  
藝業。

雄あり、同じく藝業を好む。

北條讓卷一百

字子讓、號霞亭、稱讓四郎、志摩人、少而好  
學、年十八、負笈求師、不遠千里、遊江戶及  
京攝、徧與諸名士交、遂卜居嵯峨、吟咏自  
娛。

北條讓卷一百

字は子讓、霞亭と號す、讓四郎と稱す、志摩の人、少  
して學を好み、年十八、笈を負ふて師を求む、千里を  
遠しとせずして、江戶及び京攝に遊び、徧く諸名士と  
交はり、遂に嵯峨に卜居し、吟咏自ら娛む。

菅晉帥禮卿曰、霞亭詩、力寫實境、而不逐  
時尚、余之所歎於衆作者、霞亭或能言之、  
夫詩之隨時運、古人所謂固不誣也、我自  
爲我、而不省其體之入時、唐宋諸公爲然、  
我不能爲我、從人浮沉、安在其爲詩、霞亭  
蓋有見於斯矣。

菅晉帥禮卿曰、霞亭の詩、力めて實境を寫す、而して  
時尚を逐はず、余の衆作者に歎する所、霞亭或は能く  
之れを言ふ、夫れ詩の時運に隨ふは、古人謂ふ所固よ  
り証ひざるなり、我自ら我を爲して、而して其體の時  
に入るを省みず、唐宋諸公然りと爲す、我れ、我を爲  
す能はずして、人に從ひて浮沉すれば、安ぞ其詩たる  
に在らん、霞亭は蓋斯に見る有り。

伊藤幸猛

伊藤幸猛

錦天山房詩話下巻

字寛叔、號鏡河、豐後岡人、本姓田近氏、九歲出爲伊藤氏養子、稍長好學、刻苦、崇尚物徂徠之學、冬夜讀書於屋後巖窟中、手抄口誦、達旦不輟、又善刀鎗、皆窮其奧祕、有至性能事義父母、撫弟妹最篤、安永五年、藩侯始建國學、擇有文行者數人爲督學、寛叔亦與焉、時年二十五、後爲公子傅、甚有輔導之益、遷近臣長、內剛外柔、宏獎士類、喜談人之善、治家有法、儉素自守、每親故有急、竭力振救、無所吝、歷事四君、恪勤罔怠、由大扈從、進近習物頭、祿二百二十石、文政十二年卒、年七十八。

## 清原雄風

初名藏、字伯高、森氏、初號崑岡、後號雄風、

字は寛叔、鏡河と號す、豐後岡の人、本姓は田近氏、九歲出で、伊藤氏の養子と爲る、稍長じて學を好みて刻苦す、物徂徠の學を崇尚し、冬夜書を屋後の巖窟中に讀む、手抄し口誦し、且に達して輟まず、又、刀鎗を善くし、皆、其奧祕を窮む、至性あり、能く養父母に事へ、弟妹を撫すること最篤し、安永五年、藩侯始めて國學を建て、文行ある者數人を選び、督學と爲す、寛叔亦與る、時に年二十五、後、公子の傅と爲る、甚、輔導の益あり、近臣長に遷る、内剛に外柔に、士類を宏獎す、喜んで人の善を談す、家を治むるに法あり、儉素自ら守る、親故ある毎に、力を竭して振救し、少しも吝む所なし、四君に歷事し、恪勤、怠るなし、大扈從より、近習物頭に進む、祿二百二十石、文政十二年卒す、年七十八。

## 清原雄風

初の名は藏、字は伯高、森氏、初め崑岡と號す、後、雄

豊後岡人、少承父業、稱楊伯、好學善詩、游筑前、與龜井道載交、道載以爲畏友、藩主聞其有文、舉爲學業司業、使其弟玄甫承醫業、更稱忠次郎、爲人疎誕、不檢、面垢不濯、髮亂不梳、塵埃滿室、客至、僅容膝而已、坐事杜門、數日不勝鬱悶、潛出遊行、塗遇官長、卽蔽面而走、居數年、益厭官務、卽亡命、變姓名、韜跡山東、不定居止、初寓江都、藩醫堀宗本、知其有才、欲以爲義子、雄風惡其爲人、乃剪己髮、以紙縷繫、客舍衛格而行、後宗本果獲罪、雄風乃至、上總爲某寺厮養、與奴爲伍、一日主僧沈思半面美人詩、未得、雄風卽作示之、主僧大驚曰、明日招詩客、汝亦陪坐、雄風辭謝、明日炊

館天山房詩話下冊

風と號す、豊後岡の人、少ふして父の業を承け、楊伯と稱す、學を好み詩を善くす、筑前に遊び、龜井道載と交る、道載以て畏友と爲す、藩主、其文あるを聞き、舉げて學業司業と爲し、其弟玄甫をして醫業を承けしめ、更に忠次郎と稱す、人と爲り疎誕にして檢せず、面垢つくも濯はず、髮亂るゝも梳らず、塵埃室に滿つ、客至る、僅に膝を容るゝのみ、事に坐して門を杜つ、數日にして鬱悶に勝へず、潛に出で、遊行す、塗に官長に遇ふ、卽面を蔽ふて走る、居ること數年にして益、官務を厭ひ、卽亡命して姓名を變じ、跡を山東に韜み、居止を定めず、初め江都に寓す、藩醫堀宗本、其才あるを知り、以て義子と爲さんと欲す、雄風、其の人と爲りを惡み、乃己れの髮を剪り、紙縷を以て客舍の衛格に繋ぎて行る、後、宗本果して罪を獲たり、雄風、乃、上總に至り、某寺の厮養と爲り、奴と伍を爲す、一日、主僧半面美人の詩を沈思し、未だ得ず、雄風卽作りて之れを示す、主僧大に驚きて曰、明日詩客を招く、汝も亦陪坐せよと、雄風辭謝す、明日炊食未だ熱せず



食未熟、乃行。至下總銚子、爲酒家保、有暇即手不釋卷、主人奇之、使子弟受業、由是里人皆敬重焉。每坐搖顛其膝、人目曰顛顛先生。後居香取、與江都橋千蔭結歡、咏歌酬答。寬政季年、徙居江戶、作詩咏歌、以自娛。後專治和歌、著恰野集、聲名漸著。諸侯延招、以爲上客。藩主特命釋舊罪、使出入邸門。文化七年卒、年六十四。門人正木千幹、集其和歌、號曰雄風家集。梓行於世。錦天山房詩話古昔欽明馭寓佛法東漸、豐聰馬子首先信奉之、故暫燿而愈熾矣。自此後、歷朝君相、莫不崇奉尊信、方是時、高僧並出、龍象競興、最澄傳台旨、空海述密教、源空演淨土、榮西闡禪宗、下至親戀

るに乃行る、下總銚子に至り、酒家の保と爲る、暇あれば即、手に卷を釋かず、主人之れを奇とし、子弟をして業を受けしむ、是れに由りて里人皆敬重す、坐する毎に其膝を搖顛す、人目して顛々先生と曰ふ、後香取に居り、江都、橋千蔭と歡を結ぶ、咏歌酬答す、寬政の季年、徙りて江戶に居る、詩を作り歌を咏じ、以て自ら娛む、後専ら和歌を治む、恰野集を著す、聲名漸く著る、諸侯延招し、以て上客と爲す、藩主特に命じて舊罪を釋し、邸門に入らせしむ、文化七年に卒す、年六十四、門人正木千幹、其和歌を集め、號して雄風家集と曰ひ、世に梓行す。

錦天山房詩話、古昔欽明の馭寓、佛法東漸し、豐聰馬子、首として先づ之を信奉す、故に暫く燿して愈熾なり、此より後、歷朝の君相、崇信尊信せざるは莫し、是の時に方り高僧並び出で、龍象競ひ興る、最澄、台旨を傳へ、空海、密教を述べ、源空、淨土を演べ、榮西、禪宗を闡く、下、親鸞、日蓮の徒に至るまで、各門戸を立て、争ふて異議を標し、以て愚眚を煽誘す、是に於

## 文之

日蓮之徒、各立門戶、爭標異義、以煽誘愚  
 眊、於是寺觀遍沙海、窟沙門衆於編戶、爾  
 時宗風雖盛、文藻罕振、其詩偶傳于今者、  
 不過智藏辨正等七八人而已、保平以還、  
 王室多故、四海糜沸、至應仁而極矣、當軸  
 宰世者、率多介冑武夫、目不識一丁、文字  
 之權、專在緇徒、由此中津、周信、通恕、梵芳  
 之徒、頗以詩著、及東照大君撥亂反正、偃  
 武修文、海內昇平、彬焉皆嚮文學、方外之  
 徒、亦皆奮勵、各修其業、著撰日多、不下數  
 十百人、然求其卓然成家者、匱匱不過四  
 五人、才難、不其然乎、今就其專集及選錄  
 者、略加彙括、以著于編、卷一百一

## 文之

て寺觀、海窟に遍く、沙門、編戶より來し、爾の時宗風  
 盛なりと雖、文藻振ふこと罕なり、其詩偶の今に傳  
 ふる者、智藏辨正等七八人に過ぎざるのみ、保平以還、  
 王室多故、四海糜沸す、應仁に至りて極まれり、軸に  
 當り世を宰する者は、率ね介冑武夫多く、目に一丁を  
 識らず、文字の權は、専ら緇徒に在り、此れに由りて、  
 中津、周信、通恕、梵芳の徒、頗、詩を以て著はる、東照  
 大君が、亂を撥して正に反へし、武を偃せ、文を修む  
 るに及びて、海内昇平、彬焉として皆文學に嚮ふ、方  
 外の徒、亦皆奮勵し各、其業を修め、著撰日に多く、  
 數十百人に下らず、然して其卓然として家を成す者  
 を求むれば、匱々四五人に過ぎず、才難しと、其れ然ら  
 ずや、今、其專集及び選錄する者に就いて、略、彙括  
 を加へ以て編に著す、卷一百一

號南浦、薩摩人、掌本州書記、薩侯與琉球及福建提督、往復書牘皆其所草、著有南浦文集。

錦天山房詩話、南浦詩、俚俗可笑、以其在國初、姑錄一二。

寂本

號雲石堂、住高野山、後徙居泉州、蓮浦著有蓮浦集。

湛慧曰、本公園梨、野山之耆宿也、學識兼高、德望重、一時、晚寓居泉之蓮浦、眼空榮辱、思返清靜、得景物於自然之際、適性逍遙、其詞風浩氣冷然、俾讀者有出淤泥濯清漣之意也。

錦天山房詩話、蓮浦集三卷、率多弘法大

南浦と號す、薩摩の人、本州の書記を掌る、薩侯、琉球及び福建提督との往復書牘は皆其草する所、著に南浦文集あり。

錦天山房詩話、南浦の詩、俚俗笑ふべし、其國初に在るを以て、姑く一二を録す。

寂本

雲石堂と號す、高野山に住す、後、泉州蓮浦に徙居す、著に蓮浦集あり。

湛慧曰、本公園梨は、野山の耆宿なり、學識兼高く、德望一時に重し、晚に泉の蓮浦に寓居し、眼、榮辱を空しくし、思、清靜に返る、景物を自然の際に得、適性逍遙、其の詞風浩氣冷然、讀者をして淤泥を出で、清漣に濯ふの意あらしむ。

錦天山房詩話、蓮浦集三卷、率ね弘法大師以下、密教

師以下、密教者宿贊偈、辭句俚俗、多不成語、今就中錄稍可者一首。

## 道成

號圓通、熊野人、鹽屋村光明寺開山禪師、初從禪林寺南谷、得度、後參黃檗獨湛、入其室、爲一時禪傑、享保丙子寂、年八十四、所著圓通語錄、角虎錄等、凡不下百卷云。

## 法霖

本名慧琳、號日溪、紀州關戸村人、入鷲森道場祝髮、後赴京師、事桃溪若霖、博究內外典、在龍谷講堂領衆、元文辛酉寂、年四十九、江州日溪正崇寺、本桃溪所住、法霖嗣之、故號焉、其詩有日溪詠錄、今此收其逸篇。

者宿贊偈多し、辭句俚俗にして多く語を成さず、今、中に就いて稍、可なる者一首を録す。

## 道成

圓通と號す、熊野の人、鹽屋村光明寺開山禪師、初め禪林寺南谷に従ひて、得度し、後、黃檗獨湛に參し、其室に入る、一時の禪傑たり、享保丙子寂す、年八十四、著す所圓通語錄、角虎錄等、凡そ百卷に下らずと云ふ。

## 法霖

本名は慧琳、日溪と號す、紀州關戸村の人、鷲の森道場に入り祝髮す、後、京師に赴き、桃溪若霖に事ふ、博く内外の典を究め、龍谷講堂に在りて、衆を領す、元文辛酉寂す、年四十九、江州日溪正崇寺は、本、桃溪の住する所、法霖之れを嗣ぐ、故に號とす、其の詩、日溪詠錄あり、今此に其逸編を收む。

## 日政卷一百二

字元政、自號妙子、又號不可思議、又號泰堂、俗姓菅原、氏石井、母夢一高僧來、曰賴哉、覺後有娠、元和癸亥生於洛陽桃花坊、生二歲、父攜見東山送火、曰兒識此字乎、歸家書大字、六歲讀書、一習便誦、八歲遊彥根城下、閑於武伎、十三事井伊侯直孝、雅好典籍、樂山水、所至終日吟咏不倦、從母至泉州和氣、拜蓮師像、自發三願、一我必出家、二父母壽考得盡孝、三闕天台三大部、後皆如其言、時泉涌周律師講法華、政往聽之、慕師德、告以欲出家、師曰、子甚少、出家未晚也、後八年祝髮從妙顯寺日豐、讀書有所不解、輒不擇僧俗長幼就而問、

## 日政卷一百二

字は元政、自ら妙子と號す、又不可思議と號す、又泰堂と號す、俗姓は菅原、氏は石井、母夢む、一高僧來りて曰く、賴もしきかなと、覺めて後娠めるあり、元和癸亥洛陽桃花坊に生る、生れて二歲、父攜へて東山の送火を見て曰、兒、此の字を識るかと、家に歸りて大の字を書す、六歲にして讀書す、一習便ち誦す、八歲彥根城下に遊ぶ、武伎に閑ふ、十三、井伊侯直孝に事ふ、雅より典籍を好む、山水を樂み、至る所終日吟咏して倦まず、母に従ひ、泉州和氣に至り、蓮師の像を拜し、自ら三願を發す、一、我必出家せん、二、父母壽考にして孝を盡すことを得ん、三、天台三大部を闕せんと、後皆其言の如し、時に泉涌周律師法華を講ず、政、往いて之れを聽き、師の德を慕ひ、以て出家せんと欲すと告ぐ、師曰く子甚少し、出家未だ晚からざるなり、後、八年祝髮し、妙顯寺日豐に従ふ、書を讀みて解せざる所あれば、輒ち僧俗長幼を擇ばず、就いて之れを問ひ、研究して止まず、故に博く内外二典に通じ、兼ねて本邦の典故に明かなり、後瑞光寺を草山に翹して居る、常に袈裟を脱せず、持律誦經、勤修して怠らず、王公

之研究不止、故博通内外二典、兼明本邦典故、後勅瑞光寺於草山而居焉、常不脫袈裟、持律誦經、勤修不怠、王公貴人有招之者、皆不應、性至孝、迎父母、舍寺側、晨昏不廢、父母竝年八十七而卒、母卒、後旬餘亦病卒、壽四十六、遺命栽竹三竿於墓上、不建塔、遺集三十卷、曰艸山集、其他所著十數部、竝傳於世。

錦天山房詩話、世人多以政師方石丈山、蓋不特其高風清節相類、其詩亦頡頏、一則學晚唐而得其形似、一則摹石公而逼其神肖、自世諦觀之、則政師似遜一籌、自出世諦觀之、則丈山墮若乎後矣。

日可

錦天山房詩話下冊

貴人之れを招く者あるも、皆應ぜず、性至孝、父母を迎えて寺側に舍し、晨昏廢せず、父母竝に年八十七にして卒す、母卒して後、旬餘亦病んで卒す、壽四十六、遺命して竹三竿を墓上に栽えしめ、塔を建てず、遺集三十卷、艸山集と曰ふ、其他著す所十數部、竝に世に傳ふ。

錦天山房詩話、世人多く政師を以て石丈山に方ぶ、蓋特に其高風清節、相類するのみならず、其詩も亦相頡頏す、一は則晚唐を學び、而して其形似を得、一は則石公を摹し、而て其神肖に逼る、世諦より之れを觀れば、則政師一籌を遜るに似たり、出世諦より之れを觀れば、則丈山は後に墮若たり。

日可

字宜翁、號竹庵、俗姓岡田氏、讚州丸龜人、父名吉勝、父出其母、宜翁聞其病也、躬往而候之、攜而歸、其母舊里、既死、葬畢、慟而歸、事後母而孝、父又逐後母、宜翁益不樂、性素好學、而父不喜之、每密讀書、覃思新建之學、父又逐之、乃來京師、自剃髮、投西山義萃、又投興正寺拙堂、聽圓覺般若等說、未幾、慕深草元政、往受學、修行不懈、初其在洛、舊妻來求見、宜翁出見、乃恭言、辱遠來、然此處不許女人入門、請自此辭也、便入、妻慚恚而返、宜翁雖絕意世事、常悲失父歡心、時時跪讀孝經、獨盡其心矣、父嘗來京師、宜翁使人請謁、父不聽、於是日、日躡蹻其門、而不能去、朝往而暮歸、及父

字は宜翁、竹庵と號す、俗姓は岡田氏、讚州丸龜の人、父吉勝と名づく、父、其母を出だす、宜翁其病を聞くや、躬ら往きて之れを候し、携えて其母の舊里に歸る、既に死して葬り、畢り、慟して歸り、後母に事えて孝、父、又後母を逐ふ、宜翁、益々樂まず、性素と學を好む、而して父之れを喜ばず、毎に密に書を讀み、思を新建の學に覃くす、父又之れを逐ふ、乃、京師に來り、自剃髮し西山義萃に投ず、又興正寺拙堂に投じて、圓覺般若等の說を聽く、未だ幾くならず、深草の元政を慕ひ、往いて學を受け、修行懈らず、初め其洛に在るや、舊妻來りて見ること求めむ、宜翁出で、見る、乃恭しく言ふ、遠來を辱ふす、然れども此處は女人の門に入るを許さず、請ふ此れより辭せんと、便ち入る、妻慚恚して返る、宜翁、意を世事に絶つと雖、常に父の歡心を失へるを悲み、時々跪きて孝經を讀み、獨、其心を盡せり、父嘗て京師に來る、宜翁、人をして謁せんことを請はしむ、父、聽さず、是に於て日々其門に躡蹻し、而して去ること能はず、朝に往て暮に歸る、父歸るに及び、潛に往いて之れを透り大阪に至り、號泣して歸る、寛文元年六月疾んで卒す、終に臨み畢く

歸潛往送之至大阪號泣而歸寬文元年  
 六月疾卒臨終畢會諸友告訣整法衣展  
 坐具向佛三拜既而謂諸友曰我出家以  
 來梵行不缺十年樂道常自謂天地之間  
 無可以代此者風煙山水是我家鄉豈離  
 此土別求寂光傍僧曰請遺偈笑曰向者  
 數句即我辭世之語耳竟夜閒談奄然而  
 終年三十八歲元政甚悼惜輯其詩文曰  
 竹菴遺稿

釋元皓卷一百三

字月枝號大潮肥州松浦郡人俗姓浦鄉  
 氏幼而穎異年二十一得法於龍津化霖  
 和尚住持蓮池龍津寺後退居甘露山寺

諸友を會し訣を告ぐ、法衣を整へ、坐具を展べ、佛に向  
 つて三拜す、既にして諸友に謂て曰、我れ、出家以來、  
 梵行缺けず、十年道を樂む、常に自ら謂ふ、天地の間、  
 以て此れに代ふべき者なしと、風煙山水はれ我家  
 郷、豈、此土を離れて、別に寂光を求めんやと、傍僧曰、  
 請ふ、偈を遺せよと、笑て曰、向の數句は、即、我辭世  
 の語のみと、竟夜閒談し、奄然として終る、年三十八歳、  
 元政甚悼惜し、其詩文を輯めて竹庵遺稿と曰ふ。

釋元皓卷一百三

字は月枝、大潮と號す、肥州松浦郡の人、俗姓は浦郷  
 氏、幼にして穎異、年二十一、法を龍津化霖和尚に得、  
 蓮池龍津寺に住持し、後退いて甘露山寺に居り、詩を  
 善くす、服南郭と、藥を東西に振ふ、聲望頗頡す、寂す



善詩、與服南郭、振藻東西、聲望頽頽、寂年九十一、著有松浦集、

釋道費無隱曰、元文庚申、得松浦集、以讀之、則知其才俊逸、其學廣博、其識高明、儒者見之、謂儒道者見之、謂道、佛者見之、謂佛、蓋一辭難可能讚云、近者有魯寮詩偈者、其爲體裁也、皆禪門伽陀、而見地脫洒、意味深長、含蓄無量妙義、較之於鼓山中峰而上、龍樹馬鳴諸大士、當與其駢鑣馳騁、何啻不愧而已哉。

錦天山房詩話、大潮詩名大噪、與萬庵對峙、東西雖竝、摸擬七子、尙隔一塵、然五言諸聯及五言小品、亦有頗近唐詩者、

原資

る年九十一、著に松浦集あり。

釋道費無隱曰、元文庚申、松浦集を得、以て之れを讀む、則知る其才俊逸、其學廣博、其識高明、儒者之れを見て儒と謂ひ、道者之れを見て道と謂ひ、佛者之れを見て佛と謂ふ、蓋一辭能く讚すべき難しと云ふ、近者、魯寮詩偈といふ者あり、其體裁たるや、皆禪門の伽陀、而して見地脫洒、意味深長、無量の妙義を含蓄す、之れを鼓山中峰而上、龍樹馬鳴諸大士に較するに、當に其れと鑣を駢べて馳騁すべし、何ぞ當、愧ぢざるのみならんや。

錦天山房詩話、大潮の詩名大に噪がし、萬庵と對峙す、東西竝に七子を摸擬すと雖、尙一塵を隔つ、然るに五言諸聯、及五言小品、亦頗唐詩に近き者あり。

原資

號萬庵、住持品川□□寺、後退居芙蓉軒、著有江陵集四卷。

物茂卿曰、初觀尊者詩、在我東方、古今無兩、不佞爲之吐舌矣、及讀其集、遍中華、流所無、假使金面老子從事風雅、則不知其如何耳、其他支公休上人以下悉墜乎後矣、修多羅所謂淵才雅思文中王、要當屬諸尊者也。

服元喬子遷曰、初師少有千里駒稱、長以學德淵博、爲海內所推服、而其詩最稱釋門無與二焉、乃師之淵博、既已莫不精覈矣、莫不自擬以試矣、今操觚家一有能當於師者乎、則非獨釋門無與二焉。

池桐孫無絃曰、偶閱書肆、見古今二鳴編、

萬庵と號す、品川□□寺に住持す、後、退いて芙蓉軒に居る、著に江陵集四卷あり。

物茂卿曰、初め尊者の詩を觀るに、我東方に在りて、古今兩なし、不佞之れが爲に舌を吐く、其集を讀むに及んで、遍中華の編流も無き所、假し金面老子をして風雅に従事せしめば、則其如何を知らざるのみ、其他支公休上人以下、悉く後に墜たらん、修多羅に謂はゆる淵才雅思文中の王と、要するに當に諸を尊者に屬すべきなり。

服元喬遷曰、初め師少ふして千里駒の稱あり、長じて學德淵博を以て海内の推服する所と爲る、而して其詩、最釋門、與に二なしと稱す、乃、師の淵博、既に已に精覈ならざる莫し、自擬し以て試みざる莫し、今操觚家一も能く師に當る者あるか、則、獨釋門、與に二なきのみに非ず。

池桐孫無絃曰、偶、書肆を閲して古今二鳴編を見る、一

一本係安永丙申年刻、合集惟忠萬庵二僧詩者、忠與義堂絶海同時、萬詩世有江陵集、全蹟襲明七子、此編所載絶不相類、如五言云、細雨抽蘭葉、微風綻杏花、茶鼎鳴還息、竹窓晴忽陰、古廟馴狐出、寒枝怪鳥啼、七言云、村煙籠樹市聲遠、野水拍堤山影寒、巖罅月明松鼠出、牆陰風度木犀香、松影布雲、知月上簾紋、凝水覺涼生、鴈雲蚤雨秋將老、白髮青燈意未平、枕上有時排句律、燈前無事檢醫方、功名強醉猩猩酒、祿位爭營燕燕巢、皆有放翁風味、蓋萬晚年歸依宋詩、自云深慙往見之謬、此與王弇州臨終猶手握蘇子瞻集、一般見解亦幾乎朝聞夕死之意矣、世尙有宿儒

一本は安永丙申年の刻に係る、惟忠萬庵二僧の詩を合集する者、忠は義堂絶海と同時なり、萬の詩は世に江陵集あり、全く明七子を踏襲す、此の編載する所絶えて相類せず、五言に云ふが如き、細雨、蘭葉を抽んで、微風、杏花綻ぶ、茶鼎鳴りて還た息む、竹窓晴れて忽陰る、古廟馴狐出で、寒枝怪鳥啼く、七言に云ふ、村烟樹を籠めて市聲遠く、野水堤を拍ちて山影寒し、巖罅月明にして松鼠出で、牆陰風度りて木犀香し、松影雲を布いて月の上るを知り、鴈雲水を凝らして涼の生ずるを覺ふ、鴈雲蚤雨秋將に老ひんとす、白髮青燈意未だ平ならず、枕上時ありて句律を排し、燈前事なくして醫方を檢す、功名強いて醉ふ、猩々の酒、祿位營を争ふ、燕々の窠と、皆放翁の風味あり、蓋、萬、晚年宋詩に歸依す、自ら云ふ、深く往見の謬を慙つと、此れ王弇州終に臨みて猶手に蘇子瞻集を握ると一般の見解、亦朝に聞き夕に死するの意に幾し、世尙ほ宿儒皓首まで迷ふて復らざる者あり、已だ駭ならずや。

皓首迷不復者不已駭乎。

錦天山房詩話、萬庵與服南郭齊名、造詣殊深、才力亦超、不特逼肖七子、故工選體、名下無虛、信不誣也。

義寬卷一百四

字起教、號桃溪、居東叡山、後住持尾張觀音寺、歲旱、郡民請祈雨、謝曰、貧道力不能動佛天、民懇求不已、乃作牀於海心、坐其上、曰、明日申時必雨、至明日未後、雷雨果大作、風怒濤湧、衆恐其漂沒、爭舟而行、見端坐合掌如死狀、衆皆感泣、各負米來謝、義寬每人受一掬、曰、天應衆誠、貧道何德膺之。

大龍卷一百五

錦天山房詩話下冊

錦天山房詩話、萬庵、服南郭と名を齊くす、造詣殊に深し、才力亦超、特り七子に逼肖するのみならず、最選體に工みなり、名下に虚なしと、信に誣ひざるなり。

義寬卷一百四

字は起教、桃溪と號す、東叡山に居り、後、尾張觀音寺に住持す、年旱す、郡民雨を祈らんことを請ふ、謝して曰、貧道の力、佛天を動かす能はずと、民懇に求めて已まず、乃、牀を海心に作り、其上に坐して曰、明日申時必雨ふらんと、明日未の後に至り、雷雨果して大に作り、風怒り濤湧く、衆其漂沒せんことを恐れ、舟を争ひて行き見るに、端坐合掌して死狀の如し、衆皆感泣す、各米を負ひ來りて、謝す、義寬人毎に一掬を受けて曰、天、衆の誠に應ず、貧道何の徳か之れに膺らんと。

大龍卷一百五

號拙庵、筑後人善詩及書、性豪傲物。

龜井魯道載曰、歲甲午拙庵北遊、本藩說

法瑞雲教寺、余素聞其名、往謁、時年六十、

英氣勃勃、視人如蟻、譬諸國狗之痕、無所

不咬、余幾缺望、而亦奇其膽氣、一日邀會

于野大夫望海樓、分韻賦詩、樓臨北海、景

勝絕美、時五月天晴、陽侯霽威、馮夷負氣、

四美殆備、拙庵大悅、作七言絕句二首、而

大言傲物如平常、竟座無一美譚稱人意、

詩惟絕句得妙。

顯常卷一百六

宇大典、近江人、受業於宇士新兄弟、研鑽

不怠、於此名聲大振、海內推爲巨匠。

拙庵と號す、筑後の人、詩及書を善くす、性豪にして物に傲る。

龜井魯道載曰、歲甲午、拙庵北、本藩に遊び、法を瑞雲教寺に説く、余素より其名を聞けり、往きて謁す、時に年六十、英氣勃勃として、人を視ること蟻の如し、諸を國狗の痕して咬まざる所なきに譬ふ、余幾んど望を缺く、而して亦其膽氣を奇とす、一日野大夫の望海樓に邀へ會し、韻を分ちて詩を賦す、樓は北海に臨み、景勝絶だ美なり、時に五月にして天晴れ、陽侯、威を霽らし、馮夷、氣を負ひ、四美殆んど備はる、拙庵大に悦び、七言絶句二首を作る、而して大言物に傲ること平常の如し、坐を竟ふるまで一美譚の人意に稱ふなし、詩は惟、絶句妙を得たり。

顯常卷一百六

宇は大典、近江の人、業を宇士新兄弟に受け、研鑽、怠らず、此に於て名聲大に海内に振ふ、推して巨匠と爲す。

片山猷孝秩曰、禪師之文、溫雅純粹、文詩和諧清麗、而天機活動、以幹旋之、猶丸之轉盤者、乃其道之所致乎。

藤元椿秋卿曰、禪師之於詩也、才膽思精、風神清遠、音響迢亮、汰浮華而不僻、去險波而不糜、其於文也、淳正雄渾、自左氏司馬、莊騷、以及韓柳之長集而成之、苑而出之、豈不比諸濯濯淨植者哉、師實天縱之才、加以精鍊、不惟爲巨擘於當今、使其在古作者之間、安知不相竝顏頰哉。

錦天山房詩話、今閱昨非集、雖沉著有自得之境、然殊乏高華、竊怪其名浮於實矣、後讀小雲棲稿、似更長一格、蓋晚年所著也、因知禪師老而益精詣也、文最妥帖、絕

片山猷孝秩曰、禪師の文、溫雅純粹、其詩は和諧清麗、而して天機活動、以て之れを幹旋す、猶、丸の盤に轉する者のごとし、乃其道の致す所か。

藤元椿秋卿曰、禪師の詩に於けるや、才膽り思精し、風神清遠、音響迢亮、浮華を汰して、僻せず、險澁を去りて靡ならず、其文に於けるや、淳正雄渾、左氏司馬、莊騷より、以て韓柳の長に及ぶまで、集めて之れを成し、苑にして之れを出だす、豈、諸を濯々として淨植する者に比せざらんや、師は實に天縱の才、加ふるに精練を以てす、惟、當今に巨擘たるのみにあらず、其れをして古作者の間に在らしむるも、安ぞ相竝びて顏頰せざるを知らんや。

錦天山房詩話、今、昨非集を閱するに、沈著にして自得の境ありと雖、然も殊に高華に乏し、竊に其名實に浮くるを怪む、後、小雲棲稿を讀むに、更に一格を長するに似たり、蓋、晩年の著す所なり、因て知る禪師老いて益々精詣なるを、文最妥帖、絶えて支離の病なし、

無支離之病、當時推爲巨匠、亦非虛美矣。

釋慈周卷一百七

字六如、近江人、俗姓苗村氏、父介洞、嘗受學伊藤東涯、以醫爲業、母駒井氏、幼而神彩穎悟、父母奇之、屬之觀國大僧正、延享元年、祝髮時天台、時年十一、三年從大僧正、徙武之仙波、寶曆七年住善光院、明和中、東叡有革律之事、不奉教、而削籍者十人、師亦在其中、未幾准三后法王再住東叡、律制復初、被斥逐者、皆召還、師監天台正覺院、安永三年、召來東叡、九年法王退、老淺草寺、授院家、待以賓禮、寵遇優渥、師性清恬、不樂富貴、雖居清班、如在草莽、少好學、廣通二典、以博學洽聞著稱、最好

當時推して巨匠と爲す、亦虛美に非ず。

釋慈周卷一百七

字は六如、近江の人、俗姓は苗村氏、父、介洞、嘗、學を伊藤東涯に受け、醫を以て業と爲す、母は駒井氏、幼にして神彩穎悟、父母之れを奇とし、之れを觀國大僧正に屬す、延享元年、天台に祝髮す、時に年十一、三年、大僧正に従ひ、武の仙波に徙り、寶曆七年善光院に住す、明和中、東叡に革律の事あり、教を奉ぜずして、籍を削らるゝ者十四人、師も亦其中に在り、未だ幾くならずして、准三后法王再び東叡に住し、律制、初に復す、斥逐せられし者、皆召還せらる、師、天台正覺院を監す、安永三年、召されて東叡に來る、九年、法王、淺草寺に退老す、院家を授けられ、待つに賓禮を以てし、寵遇優渥、師性清恬、富貴を樂まず、清班に居ると雖、草莽に在るが如し、少ふして學を好み、廣く二典に通ず、博學洽聞を以て著稱す、最詩賦を好み、初め劉文翼に従ふて遊ぶ、後、其非を悟り、乃、體格を更め、専ら劍南を宗とす、海内の詩風之れが爲に一變す、著に六如菴詩鈔、葛原詩話あり。

詩賦初從劉文翼游、後悟其非、乃更體格、  
 專宗劍南海內詩風爲之一變、著有六如  
 庵詩鈔、葛原詩話。

江村毅君錫曰、釋門之詩、在元和已後、獨  
 海雲禪師、漁家傲、矯矯乎絕塵而上、無與  
 之抗者、今而有此詩、可謂頡頏不相下也、  
 但漁家傲稍過枯淡、又間失諧尖詭、尊者  
 詩無其弊、而難以華腴之言、以余見之、則  
 謂之釋門無二、恐非誇言也。

松村延年子長曰、余竊論上人體裁、根柢  
 老杜、輔以香山、渭南、蘇、黃、范、楊、下自青丘、  
 天池、唐解元、袁石公、至于錢牧齋、程松園、  
 苟名其家者、無不摘取其長。

東龜年□□曰、飄飄奇思、用巧乎、致若風

錦天山房詩話下冊

江村毅君錫曰、釋門の詩、元和已後に在りて、獨海雲  
 禪師の漁家傲、矯々乎として絶塵して上る、之れと抗  
 する者なし、今にして此詩あり、頡頏相下らずと謂ふ  
 べし、但、漁家傲は稍、枯淡に過ぐ、又間諧を尖詭に失  
 す、尊者の詩は其弊なし、而して難ふるに華腴の言を  
 以てす、余を以て之れを見るに、則、之れを釋門無二  
 と謂ふも、恐くは誇言に非ざるなり。

松村延年子長曰、余竊に上人を論するに、體裁は老杜  
 に根柢し、輔くるに香山、渭南、蘇、黃、范、楊を以てし、下、  
 青丘、天池、唐解元、袁石公より、錢牧齋、程松園に至るま  
 で、苟、其家に名ある者は、其長を摘取せざるはなし。

東龜年□□曰、飄々奇思、巧を用ひんか、風の恬にし



之恬而霞之蔚、倏忽變幻不可端倪也。

井純卿□□曰、當世作者、培婁山岳、流潦江海、皆同其辭、千篇雷同、無一可感、人心要之、徒知美其辭、而不顧其志、何如、鍛字煉句、終失其所以言之、今也、上人特能不踏世習、千變萬化、不可窮極、亦惟取之其杼軸、豈不得三百篇之遺意乎。

池桐孫無絃曰、六如禪師、詩名籠罩一世、人以鉢盂中陸務觀稱之、余誦其詩、景仰非一日、或傳師爲人、矜情作態、見便可憎、余不欲覩面、恐回慕悅之心也。

又曰、詩用生字者、六如之癖也、其人淹博該通、雖無鑿據、然亦古人所無、古人以意勝、不以字勝、六如則挾字鬪勝、僅可以

て霞の蔚たるが若きを致す、倏忽變幻端倪すべからず、井純卿□□曰、當世作者、培婁山岳、流潦江海、皆其辭を同じくし、千篇雷同、一も人心を感ずべき無し、之れを要するに、徒に其辭を美にするを知りて、其志の如何を顧みず、字を鍛ひ句を煉り、終に其之を言ふ所以を失ふ、今や上人は特り能く世習を踏まず、千變萬化、窮極すべからず、亦惟、之れを其杼軸に取る、豈、三百篇の遺意を得ざらんや。

池桐孫無絃曰、六如禪師、詩名、一世を籠罩す、人、鉢盂中の陸務觀を以て之れを稱す、余、其詩を誦し、景仰すること一日に非ず、或は傳ふ、師、人と爲り、矜情にして態を作す、見れば便ち憎むべしと、余、面を覲るを欲せず、慕悅の心を回さんことを恐るればなり。

又曰、詩、生字を用ふる者は、六如の癖なり、其人淹博該通、鑿據なきに非ずと雖、然も亦古人の無き所、古人は意を以て勝れ、字を以て勝れず、六如は則字を挾みて勝を鬪はす、僅に以て中人を悦ばすべし、而して

悅中人、而不可以牢籠上智也、蓋深一生讀詩、如閱燈市、覓奇物、故其所著詩話、只算一部骨董簿、殊失詩話之體也。

烟雜植橘洲曰、上人之於詩也、鏘鏘乎世者久矣、振古叢林之間、罕見其倫、是以世之人每觀一篇、如得一摩尼焉、上人晚暮自悔綺語之過、拚關枯坐、謝交游、一種篆煙、蕭閒竟日、其詩不復刻苦費工夫、信口一吟、以遣興已、杜少陵云、老去才雖盡、秋來興甚長、上人之意、其在子斯與、視諸前集、則張錦郭筆、都用盡、似黯然亡彩、泊然無味、迺是無上真性、可謂詩菩提者矣。

錦天山房詩話、自護老唱李王以來、海內靡然以摸擬爲巧、及末流萎荏殊甚、所謂

以て上智を牢籠すべからざるなり、蓋、深れ一生詩を讀むに、燈市を關し奇物を覓むるが如し、故に其著す所の詩話は、只、一部の骨董簿を算す、殊に詩話の體を失へり、

烟雜植橘洲曰、上人の詩に於けるや、世に鏘々たること久し、振古、叢林の間、其倫を見ること罕なり、是を以て世の人、一篇を觀る毎に、一摩尼を得るが如し、上人晚暮自ら綺語の過を悔ひ、關を拚ひ枯坐して交游を謝し、一種の篆煙、蕭散日を竟ふ、其詩、復た刻苦して工夫を費さず、口に信せて一吟し、以て興を遣るのみ、杜少陵云ふ、老去りて才盡くと雖、秋來興甚長し、と、上人の意、其れ斯に在るか、諸を前集に視ぶれば、則ち張錦郭筆、都て用ひ盡し、黯然彩なく、泊然味無きに似たり、迺、是れ無上の真性、詩菩提と謂ふべき者なり。

錦天山房詩話、護老が李王を唱へしより以來、海内靡然として摸擬を以て巧と爲す、末流に及んで、萎荏殊

黃茅白葦彌望皆是也、有識者往往病焉、及尊者一旦起而磨之、和者繼作詩風由是而一變、可不謂豪傑之士乎、尊者詩、初年猶作時調、中年變格、專出入於香山劍南之際、其七言律有逼肖放翁者、晚年漸流頽唐、故今所選多中年作云。

## 志岸卷一百九

字圓超、近江人、少學台嶺、後爲廣福親王侍讀、殊蒙寵眷、晚住持勢州西來寺、著有松谿集。

源之熙君績曰、圓超上人夙振衣台嶺中、潛跡松谿、爲人智度冲深、行無權實、稱爲台學之領袖、其詩流麗而幽暢。

錦天山房詩話、圓超詩學步南郭逕、未

に甚し、謂はゆる黃茅白葦彌望皆是なり、有識者往々焉を病む、尊者一旦起ちて之れを磨くに及んで、和する者繼いで作り、詩風是れに由りて一變す、豪傑の士と謂はざるべけんや、尊者の詩、初年は猶、時調を作す、中年に格を變じ、専ら香山、劍南の際に出入す、其七言の律、放翁に逼肖する者あり、晩年、漸く頽唐に流る、故に今選する所は、多くは中年の作と云ふ。

## 志岸卷一百九

字は圓超、近江の人、少ふして台嶺に學び、後、廣福親王の侍讀と爲る、殊に寵眷を蒙る、晩に勢州西來寺に住持す、著に松谿集あり。

源之熙君績曰、圓超上人夙に衣を台嶺の中に振ひ、跡を松谿に潛む、人と爲り智度冲深、行、權實なし、稱して台學の領袖と爲す、其詩流麗にして幽暢なり。

錦天山房詩話、圓超、詩學、南郭の逕を歩いて、未だ

化論其品格應在下中間。

敬雄

號全龍道人、美濃人、著有雨新菴集。

釋元皓月枝曰、洛自五嶽諸師、而後、尠不從事詞翰者、而教師超乘上之也、蓋其人教外自該、不欲以教者、自囿、游心三藏、寓目四庫、其詩若文、海湧濤騰、其才洵不可測也、已體無所不具、辭無所不麗、追勉氣格、精詣風調、乃鏗鏘乎中土之音也。

江村綾君錫曰、高華明暢、一以唐明諸名家爲標的、矯矯乎亦釋門之俊也。

元明

字悟心、勢州人、少遊東都、學詩於服南郭、與高蘭亭瀧鶴臺交厚、既西歸、住持勢之

化せず、其品格を論ずれば、應に下中の間に在るべし。

敬雄

金龍道人と號す、美濃の人、著に雨新庵集あり。

釋元皓月枝曰、洛は五嶽諸師より、而して、後、詞翰に從事せざる者、尠なし、而して教師は超乘して之に上るなり、蓋、其人教外自ら該ね、教者を以て自ら囿せらるを欲せず、心を三藏に游ばし、目を四庫に寓す、其詩若くは文、海湧き濤騰る、其才洵に測るべからざるのみ、體具はらざる所なし、辭麗ならざる所なし、氣格を追勉し、風調を精詣す、乃ち鏗鏘乎として中土の音なり。

江村綾君錫曰、高華明暢、一に唐明諸名家を以て標的と爲す、矯々乎として亦釋門の俊なり。

元明

字は悟心、勢州の人、少ふして東都に遊び、詩を服南郭に學ぶ、高蘭亭瀧鶴臺と交り厚く、既にして西に歸

法泉寺去結一雨庵於鴨水東紫雲山下而居焉後又住持近江鳳翔山著有一雨餘稿

釋元皓月枝曰心公資已英特學復富贍少以見性爲期與衆見推一意祖述以夢寐明李王交一臂而失之是其憾卽以至子廢寢食耶猶且孜孜弗已也則數歲而業成成則與李王旦暮相遇出其禪餘以鳴吾道之盛耶

龍公美君玉曰師禪誦之暇善詩文巧篆刻厥少壯之日麻衣草鞋與終南禪師東游武都及南郭服子之門飽受其教而猶且與厥門之諸子高蘭亭瀧彌八之徒切劇所學咸盡厥蘊而還焉厥臨別也服子

り勢の法泉寺に住持し去りて一雨庵を鴨水の東紫雲山下に結びて居る後又近江鳳翔山に住持し著に一雨餘稿あり

釋元皓月枝曰心公資已に英特學復た富贍少ふして見性を以て期と爲す衆の與に推され一意祖述し以て明の李王を夢寐し一臂を交へて之れを失ふ是れ其の憾み卽以て寢食を廢するに至るか猶且孜孜として已まざるなり則數歲にして業成る成れば則李王と旦暮相遇ふ其禪餘に出で以て吾道の盛を鳴らすか

龍公美君玉曰師禪誦の暇詩文を善くし篆刻を巧みにす厥少壯の日麻衣草鞋終南禪師と東武都に遊び南郭服子の門に及び飽くまで其教を受く而して猶且厥門の諸子高蘭亭瀧彌八の徒と切劇し學ぶ所咸厥蘊を盡くして還る厥の別に臨むや服子送るに詩を以てす曰一乘應に相照らすべし雙珠海南に返る春天上國に連なり華界名藍に入る禪

送以詩曰、一乘應相照、雙珠返海南、春天連上國、華界入名藍、禪結山中坐、清留江左談、縱甘澗、默跡難晦、二龍潭、於是乎厥名選、虜乎馳、騁于叢林之間者、三十年于今矣、豈可不謂吾東方之道林、惠遠耶。

官奇 子常曰、正瑞心公、理識宏深、而學義廣博、故發而爲文、爲詩者、辭旨自是要妙勝絕也、公繙門之名望、其志自有所立、其於文辭、豈區區爲之者哉、蓋出於其緒餘、所謂用於既足之後、發持滿之末者也。

錦天山房詩話、悟心詩雖得法、赤羽薰染未深、故其七絕沖澹、間有似元人小品者、賢圓超敬雄輩遠矣。

閩秀卷一百十

錦天山房詩話下冊

は山中の坐を結ぶ、清は江左の談を留む、縦ひ跡を濁黙するを甘んずるも、二龍の潭を晦まし難し」と是に於てか厥名處々乎として叢林の間に馳騁する者、今に三十年、豈、吾が東方の道林惠遠と謂はざるべけんや。

官奇 子常曰、正瑞心公、理、識宏深、而して學義廣博、故に發して文と爲り詩と爲る者、辭旨自ら是れ要妙勝絶なり、公は繙門の名望、其志自ら立つる所あり、其、文辭に於ける、豈、區々之を爲す者ならんや、蓋、其緒餘に出づ、謂はゆる既足の後に用ひて、持滿の末に發する者なり。

錦天山房詩話、悟心の詩、法を赤羽に得ると雖、薰染未だ深からず、故に其七絶沖澹間、元人の小品に似たる者あり、圓超敬雄輩に賢ること遠し。

閩秀卷一百十

一九三

錦天山房詩話、自古淑媛以善國雅著稱者、世不乏人、最盛於□□□□之間、伊勢赤染紫姬清女之流、形管之美、照映千古、然而未聞有篇章傳于後世者、孝謙天皇、惠日照千界、慈雲覆萬生一聯、實俊語也、其他亦唯讚佛偈耳、上下千年、獨有內親王有智子而已、公主嵯峨天皇第三女、以英妙之年、接綺麗之藻、假令文人騷客竭才殫思、未能有之先、實可謂曠世奇才也、況其薨也、遺令薄葬、且辭護葬使、其賢明不特藻績之美、其他所傳、紀氏大伴氏、惟氏寥寥數首耳、後數百年、小野阿通、有幽志賦一篇、又作詞曲數齣、亦屬罕觀、元和以還、文運漸盛、閨閣中亦有弄文墨者、然

錦天山房詩話、古より、淑媛、國雅を善くするを以て稱せらる者、世、人に乏しからず、最□□□□の間に盛なり、伊勢、赤染紫姬、清女の流、形管の美、千古に照映す、然り而して未だ篇章の後世に傳ふる者有るを聞かず、孝謙天皇「惠日、千界を照し、慈雲萬生を覆ふ」の一聯、實に俊語なり、其他は、亦唯讚佛偈のみ、上下千年、獨、内親王有智子あるのみ、公主は嵯峨天皇の第三女、英妙の年を以て、綺麗の藻を披ひ、假令文人騷客、才を竭し思を殫くすも、未だ之れが先ある能はず、實に曠世の奇才と謂ふべきなり、況んや其薨するや、遺令して葬を薄くし、且、護葬使を辭す、其賢明なる特に藻績の美のみならず、其他傳ふる所の紀氏、大伴氏、惟氏寥寥數首のみ、後、數百年、小野阿通、幽志賦一篇あり、又、詞曲數齣を作る、亦罕觀に屬す、元和以還、文運漸く、盛んに、閨閣中亦文墨を弄する者あり、然れども當時風俗敦樸にして、多くは女子が詞章を以て人間に傳播するを尙ばず、故に傳ふる者甚少し、近世に至りては、則、稍翰を操るを知れば、則、競ふて聲譽を銜し、甚しきは人を情ひ手も藉り、以て相誇矜するに至る、亦以て世俗の醇醜を驗すべし、禁海尼

當時風俗敦樸、多不尙女子以詞章傳播人間、故傳者甚少、至近世則稍知操翰、則競街聲譽、甚至情人藉手以相誇矜、亦可以驗世俗之醇醜、慧海尼者、後西院天皇皇女、號默堂、住持曇華院、其冬日書懷曰、寒林蕭索帶風霜、幽竹臙前已夕陽、既月秋宵猶恨短、尋花春日尙思長、榮枯過眼百年事、憂喜傷心一夢場、靜對爐香禪坐久、細煙裊裊繞孤牀、江村君錫評其詩曰、理趣超凡、不啻脫紅粉之習、兼遠烟火之氣、實然余藏望玉蟾畫山水、默堂題唐句於上、筆力遒勁、殊無軟媚之態、可想見其造詣之深、又平松亞相時章之女方子、稱飛鳥井、奉仕文恭大君後宮、或傳其宮中

錦天山房詩話下冊

は後西院天皇の皇女にして、默堂と號す、曇華院に住持す、其冬日書懷に曰「寒林蕭索として風霜を帶ぶ、幽竹臙前に夕陽、月を既びて秋宵猶短きを恨み、花を尋ねて春日尙長きを思ふ、榮枯眼を過ぐ百年の事、憂喜心を傷ましむ、一夢場靜に爐香に對して禪坐久し、細煙裊々孤牀を繞る、江村君錫其詩を評して曰、理趣超凡、番に紅粉の習を脱するのみならず、兼て烟火の氣に遠ざかると、實に然り、余、望玉蟾の畫山水を藏す、默堂、唐句を上題す、筆力遒勁、殊に軟媚の態なし、其造詣の深きを想見すべし、又平松亞相時章の女方子、飛鳥井と稱す、文恭大君の後宮に奉仕す、或るひと其宮中夜坐の詩を傳ふ、曰「沈々玉漏三更に到る、上苑の秋風面を吹いて清し、銀燭朱簾光月靜に、絃管を聞かすして蟲聲を聞く、亦頗誦すべし、一は貴主に係り、一は宮嬪に係る、登載に便ならず、故に附見す。



夜坐詩曰、沉沉玉漏到三更、上苑秋風吹、面清銀燭、簾朱光月靜、不聞絃管聽蟲聲、亦頗可誦、一係貴主、一係宮嬪、不便登載、故附見。

## 井上氏

名通、讚州丸龜士人女、幼給事其侯、後宮在東都九年、侯卒歸丸龜、道中以國字紀行、名歸家日記、後爲豫三田氏妻。

錦天山房詩話、余讀歸家日記、辭旨婉至、立意正大、非涉學淺近者之所能辨也、其中載詩十二首、語多胸臆、卒不足采、因錄其差可傳者、後附錄其少作數首、有感興一絕云、改來身上非終是、爭止胸中瘦亦肥、將學春風含暖氣、豈堪秋日作霜威、不

## 井上氏

名は通、讚州丸龜の士人の女、幼にして其侯の後宮に給事す、東都に在ること九年、侯卒して丸龜に歸る、道中に國字を以て行を紀す、歸家日記と名づく、豫の三田氏の妻と爲る。

錦天山房詩話、余歸家日記を讀むに、辭旨婉至、立意正大、涉學淺近者の能く辨する所に非ず、其中、詩十二首を載す、語、胸臆多く、卒に采るに足らず、因て其差、傳ふべき者を録し、其少作數首を附録す、感興一絶あり、云ふ、改め來りて身上の非終に是、爭止んで胸中瘦亦肥ゆ、將に學ばんとす春風の暖氣を含むを、豈堪へんや、秋日の霜威を作すにと、一營に脂粉の習なきのみならず、宛然醉儒の口氣、以て涵養する所の深きを見る

管無脂粉之習、宛然醇儒口氣、可以見所涵養深也。

### 多田氏

名順、字季婉、黒川侯臣、佐野源内之妻、自幼讀書、善詩及和歌、及長通諸子百家、好讀通鑑源語、出入侯第、教女公子者數家、安永丙申卒、所著有綽約集。

太田原子粗曰、昔皇朝之盛、僅有有智子一律、照映千古、其餘女流、若清紫者、口多微辭、徒步趨國風、而未嘗陶鑄唐詩也、及東都起、桃仙、中山二稿行于世、今閱綽約集、可爲之執箕帚矣、嗚呼、上下千載、有一婦人、形管有煒、閨閣生色、才難、不其然乎。

岡田挺之口口曰、余讀季婉之詩、句協字

べし。

### 多田氏

名は順、字は季婉、黒川侯の臣、佐野源内の妻、幼より書を読み、詩及和歌を善くし、長ずるに及び、諸子百家に通ず、好んで通鑑源語を読み、侯第に出入し、女公子を教ふる者數家、安永丙申に卒す、著す所綽約集あり。

太田原子粗曰、昔皇朝の盛んなる、僅に有智子の一律あり、千古に照映す、其餘の女流、清紫の若き者、口多微辭多く、徒らに國風に步趨し、而して未だ嘗て唐詩を陶鑄せず、東都起るに及んで、桃仙・中山二稿世に行はる、今綽約集を閱するに、之が爲に箕帚を執るべし、嗚呼、上下千載、一婦人あり、形管煒たるあり、閨閣色を生ず、才難しと、其れ然らずや。

岡田挺之口口曰、余、季婉の詩を讀むに、句協ひ字穩

穩、無生硬之病、實聞秀中所罕觀也、所謂  
清淑之氣、鍾婦人也。

## 尼元總

號了然、又號大休、俗姓葛山氏、父長次、隱  
居京師、以精鑿書畫著、元總幼奉仕東福  
門院、院崩後、辭仕家居、性貞靜、好歌詩、後  
嫁松田晚翠、生子三人、削髮爲尼、晚創武  
州落合村泰雲寺、而居、正德元年九月十  
八日寂。

錦天山房詩話、了然少有出塵之志、其議  
姻也、先約曰、妾如爲君生三子、則願乞身  
出家、夫許之、年二十四五、既生三子、詩如  
約、夫不能止、於是雲游四方、遍參黃蘗諸  
老、時弘福寺鐵牛和尚名噪禪林、遠來問

に生硬の病なし、實に閨秀中、罕に觀る所なり、謂は  
ゆる清淑の氣、婦人に鍾まるなり。

## 尼元總

了然と號す、又、大休と號す、俗姓は葛山氏、父、長次、  
京師に隱居す、書畫を精鑿するを以て著はる、元總幼  
にして東福門院に奉仕し、院崩する後、仕を辭して家  
居す、性貞靜にして歌詩を好み、後、松田晚翠に嫁し、  
子三人を生む、削髮して尼と爲る、晩に武州落合村泰  
雲寺を創して居る、正德元年九月十八日寂す。

錦天山房詩話、了然、少ふして出塵の志あり、其、姻を  
議するや、先づ約して曰、妾若し君が爲に三子を生ま  
ば、則願くば身を乞ふて出家せんと、夫之れを許す、年  
二十四五、既に三子を生む、約の如くせんことを請ふ、  
夫、止むること能はず、是に於いて四方に雲游し、遍  
く黃蘗諸老に參す、時に弘福寺鐵牛和尚、名、禪林に  
噪がし、遠く來りて法を問ふ鐵牛、其年少くして美色

法、鐵牛見其年少美色、不許入門、木庵禪師之弟子、白翁和尚在駒籠、乃往參禪、白翁亦見其貌美、不肯納、元總卽熱銅灼面、面悉焦爛、作偈曰、昔遊宮裡燒蘭麝、今入禪林燎面皮、四序流行亦如此、不知誰是箇中移、白翁大嗟歎、遂許留在寺、其銳志求道如此。

### 尼正慶

名阿雪、俗姓三好氏、浪華長堀商家木津屋の女也、性任俠常凌強扶弱、終以女俠聞、時有劇盜、官屢逐捕不能獲、阿雪縛捕送于官、人服其勇、好讀書、兼善書畫、然頗自矜重、不肯輕寫、終身不嫁、晚年削髮爲尼、號正慶、住難波村、享和二年、年七十四歲、行

なるを見、門に入るを許さず、木庵禪師の弟子白翁和尚駒籠に在り、乃往いて參禪す、白翁も亦其貌の美なるを見、納ること肯んぜず、元總卽銅を熱き面を灼す、面悉く焦爛す、偈を作りて曰、昔宮裡に遊び蘭麝を燒く、今禪林に入りて面皮を燎く、四序流行亦此の如し、知らず誰か是れ箇中に移ると、白翁大に嗟歎し、遂に留まりて寺に在るを許す、其志を銳くして志道を求むること此の如し。

### 尼正慶

名は阿雪、俗姓は三好氏、浪華長堀の商家木津屋の女なり、性、任俠、常に強を凌ぎ弱を扶く、終に女俠を以て聞ゆ、時に劇盜あり、官屢、逐捕すれども獲る能はず、阿雪縛捕して官に送る、人、其勇に服す、好んで書を読み、兼ねて書畫を善くす、然れども頗自ら矜重し、肯て輕しく寫さず、終身、嫁せず、晩年に髮を削り尼と爲る、正慶と號す、難波村に住す、享和二年、年七十四歲、行步輕捷、尙、少年の時の如し、後、數年病んで卒

步輕捷、尙如少年時、後數年病卒、常謂人曰、我於物無擇、唯惡酒客與猫而已。

錦天山房詩話、浪華風俗、尙任俠、先時有雁金文七等、世稱爲五丈夫、阿雪亦慕其風、恐人見其姿色而易之、乃以墨塗面、而後施粉、短衣長刀、往來市中、好爲人解紛息鬪、以此名噪一時、稱爲奴小滿、今雜劇所演卽其人也、余素聞其名、意謂一奇女子、而不知其旁好文墨、偶讀蛻巖集、載贈尼祥圭詩、竝引云、祥圭大阪人、姓三好氏、貞烈有骨勇、初在家、每過寺觀街巷、高髻長袖、翩翩自喜、雖惡少年、不敢侮鬪、遂以女俠聞、既披剃折節、持戒精進、不懈云、寶曆乙亥夏、余遊浪華、主倉氏莊、會圭以鬪

す、常に人に謂て曰、我、物に於て擇ふ無し、唯、酒客と猫とを惡むのみと。

錦天山房詩話、浪華の風俗、任俠を尙ぶ、先時、雁金文七等あり、世に稱して五丈夫と爲す、阿雪も亦其風を慕ふ、人の其の姿色を見をて之を易らんことを恐れ、乃、墨を以て面に塗り、而して後粉を施し、短衣長刀市中を往來し、好んで人の爲に紛を解き鬪を息む、此を以て名、一時に噪がし、稱して奴の小滿と爲す、今、雜劇に演ずる所は卽其人なり、余、素より其名を聞く、意に謂ふ一奇女子なりと、而して其旁ら文墨を好むを知らず、偶、蛻巖集を讀むに、尼祥圭に贈る詩并に引を載す、云ふ、祥圭は大阪の人、姓は三好氏、貞烈にして骨勇あり、初め家に在り、毎に寺觀街巷を過ぎ、高髻長袖、翩翩として自ら喜ぶ、惡少年と雖、敢て侮鬪せず、遂に女俠を以て聞ゆ、既にして披剃して節を折り、持戒精進懈らずと云ふ、寶曆乙亥の夏、余、浪華に遊ぶ、倉氏の莊を主とす、會、圭、岡子蘭を以て紹介と爲し、來りて見る、其色温にして恭、其氣舒にして嚴、其聲容婉々、而して雅馴、法爾の女僧と謂ふべ

子蘭爲紹介來見、其色溫而恭、其氣舒而嚴、其聲容婉婉而雅馴、可謂法爾女僧哉、因嘆異久之、乃賦二絕以贈、怒髮衝筓、氣壓人、肯將艷態媚青春、一朝拋却護心鏡、頓現空門忍辱身、蓮華輪下獻珠遲、蹴盡人間千潑皮、休問南方無垢界、佛身已在變男時、按祥圭與正慶音相近、必其人無疑、觀此可見其概、又聞與柳里恭、木世彌諸名士交好、仍意其詩詞、必有傳者、邇索未得、頃日梅堂淺野君、鈔編旅漫錄中所載事跡及詩見示、詩雖淺陋、然其人固可傳、因編錄。

きかな、因て嘆異之れを久ふす、乃、二絶を賦して以て贈る、二怒髮筓を衝き氣、人を壓す、肯て艷態を以て青春に媚びんや、一朝、護心鏡を抛卻して、頓に現す空門忍辱の身、蓮華輪下珠を獻する遲し、蹴り盡す人間千潑皮、問ふを休めよ南方無垢界、佛身は已に男に變する時に在り、按するに、祥圭、正慶と音相近し、必其人なること疑ひなし、此れを觀て其概を見る可し、又聞く柳里恭、木世彌、諸名士と交り好しと、仍て意ふに其詩詞、必傳ふる者あらんと、遍く索むれども、未だ得ず、頃日梅堂淺野君、編旅漫錄中に載する所の事跡及詩を鈔して示さる、詩は淺陋と雖も、然も其人固より傳ふべし、因て編録す。

錦天山房詩話 下冊終